

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第28集

王 郷 遺 跡

1996年1月

豊橋市教育委員会
豊橋遺跡調査会

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第28集

おう 郷 遺 跡

1996年1月

豊橋市教育委員会
豊橋遺跡調査会



調査地遠景（昭和59年撮影）

王郷遺跡は柳生川右岸の河口部、標高2～3mの段丘中位面上に所在する。渥美湾に突き出した砂堤の基部にも相当し、標高は低いが見渡すことができる。当地域における古代～中世の拠点的港湾と考えられる牟呂（津）は柳生川を挟んだ対岸であり、王郷遺跡は牟呂と関係を持った海浜集落であったと思われる。

近世以降の新田開発により遺跡の所在地は内陸化したのが、上の写真から遺跡の地理的環境をおおよそ探ることができる。

目 次

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

- 1. 遺跡の立地 1
- 2. 歴史的環境 3

第2章 調査の経過

- 1. 調査に至る経過 7
- 2. 調査の方法と経過 8

第3章 遺構

- 1. 基本層序10
- 2. 掘立柱建物18
- 3. 柵（塀）25
- 4. 溝28
- 5. 土壇29

第4章 遺物

- 1. 人工遺物64
- 2. 自然遺物84

第5章 まとめ

- 1. 遺構の変遷96
- 2. 出土遺物について101
- 3. 王郷遺跡の位置付け103

- 報告書抄録 106

挿 図 目 次

第1図	王郷遺跡周辺地形図 (1/30,000)	1
第2図	調査区位置図-1 (1/50,000)	2
第3図	王郷遺跡周辺の遺跡 (1/10,000)	5
第4図	調査区位置図-2 (1/2,500)	7
第5図	遺構全体図 (1/150)	11
第6図	掘立柱建物・柵(塀)位置図 (1/150)	13
第7図	土壌位置図 (1/150)	15
第8図	調査区東壁土層図 (1/80)	17
第9図	掘立柱建物実測図-1 (1/80)	37
第10図	掘立柱建物実測図-2 (1/100)	38
第11図	掘立柱建物実測図-3 (1/80)	39
第12図	掘立柱建物実測図-4 (1/80)	40
第13図	掘立柱建物実測図-5 (1/80)	41
第14図	掘立柱建物実測図-6 (1/80)	42
第15図	掘立柱建物実測図-7 (1/80)	43
第16図	掘立柱建物実測図-8 (1/80)	44
第17図	掘立柱建物実測図-9 (1/80)	45
第18図	掘立柱建物実測図-10 (1/80)	46
第19図	掘立柱建物実測図-11 (1/80)	47
第20図	掘立柱建物実測図-12 (1/80)	48
第21図	掘立柱建物実測図-13 (1/80)	49
第22図	柵(塀)実測図-1 (1/80)	50
第23図	柵(塀)実測図-2 (1/80)	51
第24図	土壌実測図-1 (1/80)	52
第25図	土壌実測図-2 (1/80)	53
第26図	土壌実測図-3・溝実測図-1 (1/80)	54
第27図	溝実測図-2 (1/80)	55
第28図	遺物出土状況図-1 (1/20)	56
第29図	遺物出土状況図-2 (1/20)	57
第30図	遺物出土状況図-3 (1/40)	58
第31図	遺物出土状況図-4 (1/20・1/40)	59
第32図	出土遺物実測図-1 (1/3)	66
第33図	出土遺物実測図-2 (1/3)	69

第34図	出土遺物実測図-3 (1/3)	71
第35図	出土遺物実測図-4 (1/3)	74
第36図	出土遺物実測図-5 (1/3)	77
第37図	出土遺物実測図-6 (1/3)	80
第38図	出土遺物実測図-7 (1/3)	81
第39図	出土遺物実測図-8 (1/3)	83
第40図	出土遺物実測図-9 (1/3)	84
第41図	B-3区SK-30の貝層サンプル採取地点 (1/80)	85
第42図	遺構変遷図-1 (1/400)	98
第43図	遺構変遷図-2 (1/400)	99
第44図	土師器皿実測図 (1/4)	102
第45図	平成3年磯辺王塚古墳発掘調査出土遺物 (1/4)	104

表 目 次

第1表	発掘調査作業工程表	8
第2表	掘立柱建物一覧表	60
第3表	柵(塀)一覧表	61
第4表	溝一覧表	62
第5表	土壙一覧表	62
第6表	サンプルA検出の貝類一覧表	85
第7表	サンプルA検出貝類重量組成表	86
第8表	出土遺物観察表	89
第9表	出土遺物構成表	102

写真図版目次

図版1-1	調査区遠景 (南西から)	2	調査区北東側全景 (南西から)
図版2-1	調査区南西側全景 (北東から)	2	調査区南西側全景 (南西から)
図版3-1	調査区東壁土層-1 (西から)	2	調査区東壁土層-2 (西から)
3	調査区東壁土層-3 (西から)		

- | | | | |
|--------|---------------------------------|---|----------------------|
| 図版 4-1 | 調査区南西側近景-1 (北東から) | 2 | 調査区南西側近景-2 (東から) |
| | 3 調査区北東側近景 (南から) | 4 | SD-2 (南西から) |
| | 5 SD-5 (北西から) | 6 | SD-5 出土状況 (北から) |
| 図版 5-1 | A-1区SK-11 (北から) | 2 | A-2区SK-10 (北東から) |
| | 3 B-1区SK-40出土状況 (北から) | 4 | B-3区SK-30 (北西から) |
| | 5 D-2区SK-1 (南西から) | 6 | D-2区SK-2 (南東から) |
| 図版 6 | 1 SD-3 a-a' 土層 (西から) | 2 | SD-5 b-b' 土層 (北西から) |
| | 3 B-3区SK-30 a-a' 土層 (南西から) | | |
| | 4 B-3区SK-30 b-b'・c-c' 土層 (北西から) | | |
| | 5 D-2区SK-2 b-b' 土層 (北東から) | | |
| | 6 D-2区SK-2 a-a' 土層 (北西から) | | |
| | 7 SB-2 P41出土状況 (南から) | 8 | SB-4 P5出土状況 (北から) |
| 図版 7 | 1 SB-14 P2出土状況 (北から) | 2 | SB-22 P13出土状況 (北東から) |
| | 3 SA-8 P5出土状況 (南から) | 4 | SD-5 出土状況 (北東から) |
| | 5 A-2区SK-131・132出土状況 (南東から) | | |
| | 6 B-1区SK-40出土状況 (西から) | 7 | B-2区SK-41出土状況 (東から) |
| | 8 B-2区SK-156出土状況 (南東から) | | |
| 図版 8 | 1 B-2区SK-160出土状況 (北東から) | 2 | B-3区SK-30出土状況 (北から) |
| | 3 B-3区SK-30出土状況 (北西から) | 4 | B-3区SK-37出土状況 (北西から) |
| | 5 B-3区SK-41出土状況 (北東から) | 6 | D-2区SK-1出土状況 (北東から) |
| | 7 発掘作業風景 | 8 | 調査区の冠水状況 |
| 図版 9 | 出土遺物-1 | | |
| 図版10 | 出土遺物-2 | | |
| 図版11 | 出土遺物-3 | | |
| 図版12 | 出土遺物-4 | | |
| 図版13 | 出土遺物-5 | | |
| 図版14 | 出土遺物-6 | | |
| 図版15 | 出土遺物-7 | | |

カラー図版 調査地遠景

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

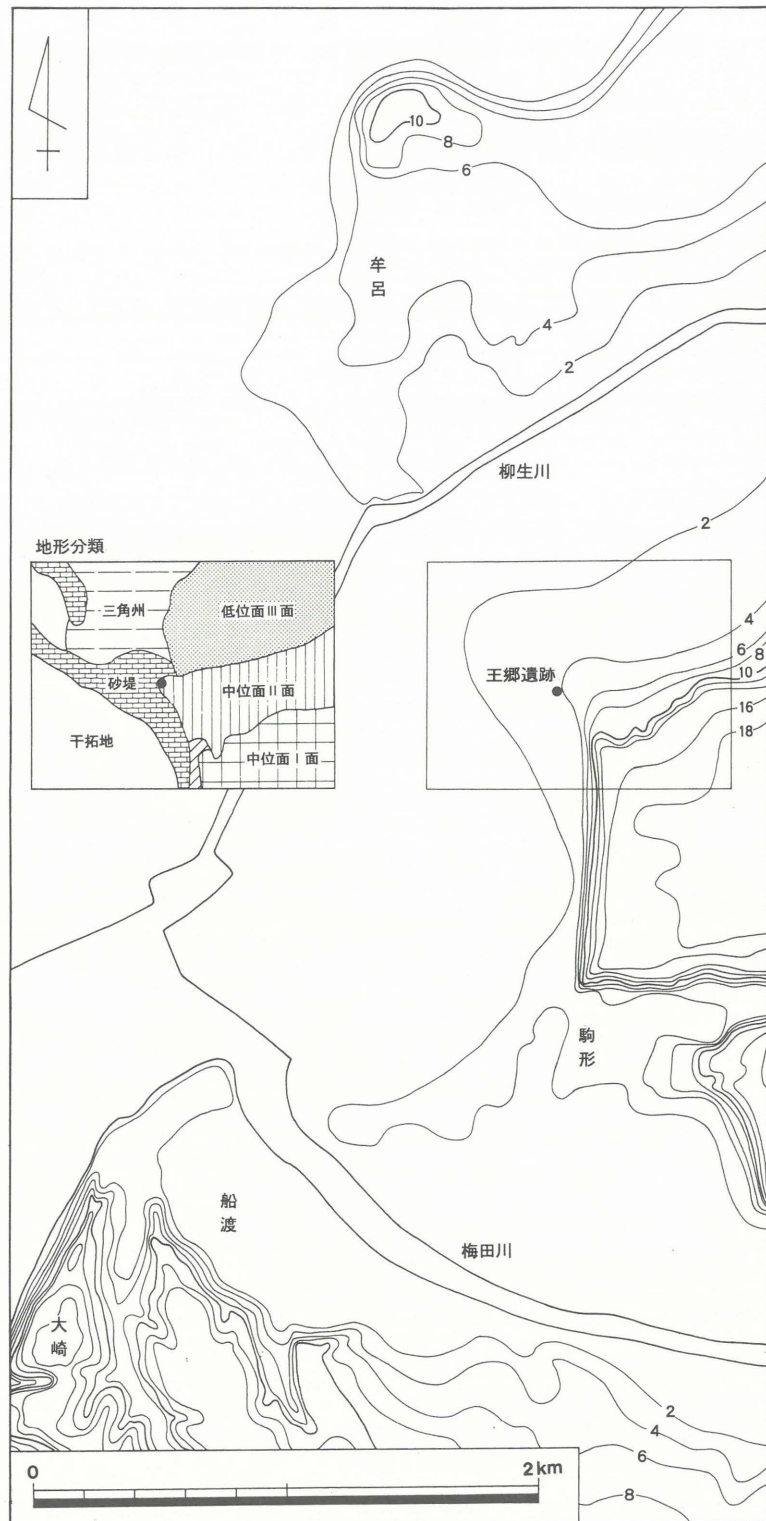
1. 遺跡の立地 (第1・2図)

王郷遺跡は、豊橋市東部の丘陵から西流して三河湾に注ぐ柳生川左岸の、現河口から約2 km付近の中位段丘面上にあり、柳生川谷底平野の沖積面と中位段丘の接する場所に位置している。

豊橋市は豊川下流の左岸にあり、地形は弓張山地、豊川と旧天竜川の河岸段丘、豊川と中小河川が造る沖積平野に大別できる。

河岸段丘は、高位・中位・低位の3面に分けられる。高位面の天伯原面は標高30~60mで、形成後時間がたっているため、浸食が著しい。中位面の高師原・豊橋上位面は標高15~30mである。これらの高・中位面は渥美傾動運動の影響で、南部が高い傾動地塊となっている。低位面は豊橋面と呼ばれ、標高は3~10mである。浸食は進んでおらず、表面は平坦である。

市域を貫流する主要な河川には豊川その他、河岸段丘上を流れるものとして、柳生川、梅田川、紙田川などが挙げられる。これらは豊橋市東部~南部に始まり(梅田川は湖西市より)、いずれも三河湾に注いでいる。王郷遺跡が河口部に位置する柳生川は、豊橋市東部の松明峠(標高257m)の北西斜面に源を発し、豊橋市内陸部の豊川河岸段丘を開析して幅の広い谷底平野を形成する最大



第1図 王郷遺跡周辺地形図 (1/30,000)

流路長11kmの河川である。流域には上流部・河口部を除き遺跡はあまり確認されないが、現在中流部が住宅密集地となっており、これらの下に遺跡の存在が推定される。

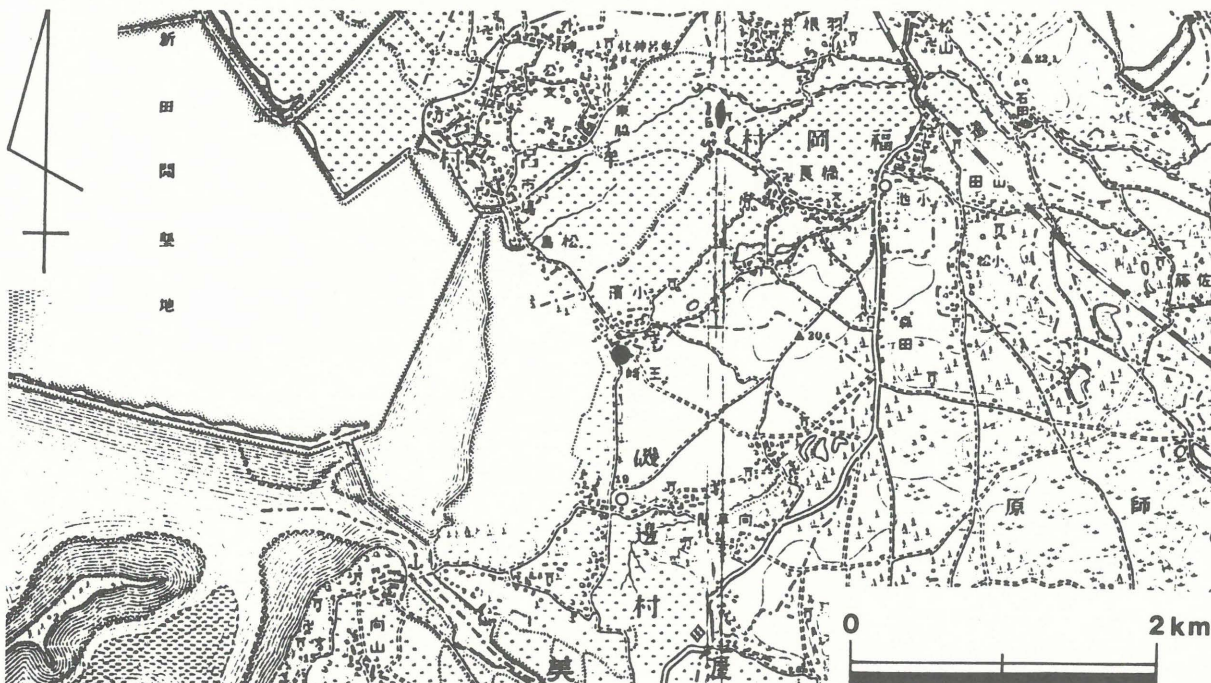
王郷遺跡は、中位面である高師原面北西端の沖積平野にわずかに突き出た場所で、沖積平野の砂堤との境界にあたる標高2.5～3 m付近に立地する。高師原面が徐々に高度を減じ沖積層である海岸砂丘構成層下に没する直前の高師原礫層が遺跡の地山となっている。遺跡のすぐ西で高師原面は沖積層下に没し、地形的には沖積面となる。この高師原面と沖積面とは約2 mの比高がある。沖積面は幅200～300 mの標高1 m程の砂堤が、遺跡の北側から北西方向へ延びている。砂堤の西側は干拓地に、東側は柳生川の谷底平野となっている。なお、干拓地が造られたのは明治時代で、それ以前は砂堤のすぐ西側が海岸線であった(第2図)。

王郷遺跡は沖積平野にわずかに突き出た所に位置するため、西の海岸平野、東の柳生川谷底平野双方をよく見渡すことが出来る。この地は海岸や沖積平野など食料生産の場所に隣接しており、低平な沖積平野に比較して水害等の災害に対しても安全な段丘の縁辺部に相当する。またこの地は隣接する低位面との境界付近には湧水が見られるなど、比較的生活し易い環境にあって集落が営まれたものといえよう。また一方で、河口部となるため柳生川流域の内陸部と海上とを結ぶ交通の接点として機能した所と考えられる。

注 記述内容については、水野季彦氏の意見を全面的に採用させて頂いた。

参考文献

- 豊橋市教育委員会 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第11集 見丁塚遺跡』 1990
- 豊橋市教育委員会 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第18集 橋良遺跡』 1994



(明治23年 大日本帝国陸地測量部作図より)
第2図 調査区位置図-1 (1/50,000)

2. 歴史的環境 (第3図)

王郷遺跡は、河岸段丘(中位面)に所在している。遺跡の北方には河岸段丘低位面、さらに柳生川沿いに発達した沖積低地(三角州)が続き、西は眼前に遠浅の海を控え、また西北方の牟呂地区に向け砂堤が延びている。西側の海は明治時代以降に干拓が進められ、現在は水田地帯となっている。現在確認されている遺跡の大半は、上記の柳生川沖積低地を挟んだ南北の河岸段丘上に立地する。

以下、周辺の遺跡について柳生川沿岸を中心に時代を追って説明する。

縄文時代

周辺地域において最も古い遺跡として、小浜貝塚(13)が挙げられる。小浜貝塚は前期の3号貝塚、中期の1号貝塚、後期の4号貝塚、晩期の2号貝塚からなる地点貝塚で、加曾利EⅢ式に併行する土器や、人骨・石器・貝製品などが見つかっている。また市場遺跡(9)では平成6年度の発掘調査で、中期前葉～後葉の土器が出土した不整形の土壌が確認され、海浜部での何らかの生業の痕跡と考えられる。後期の遺構は周辺ではあまり多くないが、前述の市場遺跡で柱穴状のピットが検出されたほか、市杵嶋神社貝塚(12)で僅かだが土器が確認されている。晩期には、牟呂地区の臨海部に多数の貝塚が営まれ、市杵嶋神社貝塚をはじめ、大西貝塚、水神貝塚などの大規模な貝塚がこの時期を中心に形成された。大西貝塚や水神貝塚は近年発掘調査が行われ、いずれも土器・石器などの遺物量に比較して投棄された貝殻量が異常に多いことが判明した。これらの貝を自給用に採取していたとは考えにくく、貝塚は干し貝加工場であったと想定されている。なお同時期の集落址は付近ではまだ確認されていない。

今回の調査区の東側には、晩期の王ヶ崎貝塚(14)が所在したと言われている。詳細は不明だが、平成3年に実施された磯辺王塚古墳の調査では、墳丘盛土及び石室の裏込めから水神平～市杵嶋式を主体とする条痕文土器片が多数出土しており、王ヶ崎貝塚の遺物と見られる。ただし貝殻自体は確認されなかった。

弥生時代

豊橋市を含む東三河地域は、近畿地方以西における弥生時代前期には縄文土器の流れをくむ条痕文土器が分布しており、その頃までは縄文時代晩期に属するものと把握されている。したがって弥生社会の実質的な形成は、稲作技術の受容が顕著に認められる中期であることを前提に、以下説明を行う。王郷遺跡周辺における弥生時代中期の遺跡として、柳生川左岸の柱三番町付近を中心とする橋良遺跡がある。平成元年、および平成4年に行われた発掘調査では、方形周溝墓2基、竪穴住居21軒などが検出され、遺構の集中具合から柳生川流域の拠点集落と考えられている。遺構に伴い、長床式(中期後葉)を主体とする土器、石器などが出土している。この他、柳生川右岸の見丁塚遺跡では中期(長床式)の方形周溝墓があり、市杵嶋神社貝塚からはわずかに土器が出土しているなど付近における人々の生活痕跡が確認されているが、いずれも小規模な遺跡といえる。

古墳時代

古墳時代前期～中期にかけての集落遺構は柳生川河口部では確認されていないが、市杵嶋神社古墳(11)は前期の有力首長墳として知られている。昭和60年にくびれ部付近が調査された結果、検出された葺石の形状から前方後方墳と確認され、推定全長は60m前後である。供献土器として、廻間Ⅱ式後半～Ⅲ式前半に比定される壺(二重口縁壺を含む)、甕、高坏などが出土し、一部に底部穿孔が認められた。中期の首長墳は確認されないが、後期初頭ではTK-47型式併行期と考えられる三ツ山古墳がある。全長34mの前方後円墳で、墳丘周囲に東三河地域では採用例が少ない埴輪が巡らされていた。なお、古墳の500m西には埴輪や須恵器を古墳に供給したと考えられる水神古窯がある。

王郷遺跡周辺には、後期を中心とする古墳が散在している。滅失例を含めても所在数はあまり多くないが、その中であって磯辺王塚古墳(15)は渥美湾(三河湾奥部)沿岸部の有力首長墳系譜を構成するものとして特筆される。古墳の周辺は中世以降に著しい開発を受け、墳形・規模は確定できないが、現在までに行われた4回の発掘(調査)で、石室は側壁に立柱を有するもので10m以上を測り、石室中央には偏平な石材を敷き並べた棺台の存在することが確認された。また副葬品には双龍環頭、頭椎、円頭の3種の飾大刀、金銅装馬具片、ガラス玉や銀製空玉を主とする各種玉類、須恵器等がある。古墳の築造時期は、双龍環頭大刀の型式から6世紀後葉と考えられる。また万福寺境内に所在する万福寺古墳(16)は築造時期不明の小規模な円墳である。

同時期の集落遺跡では王ヶ崎遺跡(18)にその可能性があるが、詳細は不明である。牟呂町大西遺跡は東西・南北とも200m程度の範囲を持つ6世紀末～7世期の集落で、発掘調査で多数の掘立柱建物が検出されているが、竪穴住居の乏しい点の特徴的である。この他大海津遺跡、公文南遺跡(3)付近で古墳時代の遺構が確認されたほか、見丁塚遺跡では6世紀後葉の竪穴住居が検出されている。

奈良～平安時代

奈良時代から平安時代にかけての遺跡として、牟呂町市道遺跡が挙げられる。市道遺跡は寺院および官衙的施設の複合した遺跡と考えられる。寺院は平成6年度までの調査で一直線上に並ぶ講堂、金堂、門跡と考えられる遺構と、それらを取り囲む堀跡からなり、各種瓦や瓦塔、須恵器の仏器(火舎、鉢など)、土師質の累髪などが出土している。遺跡の性格は位置および建物の構造から郡司クラスの氏寺と推定されている。また官衙的建物群中には全国的にも稀な正六角形掘立柱建物5棟が含まれている。この他、公文遺跡や市場遺跡、中村遺跡(7)など牟呂町の各遺跡から奈良・平安時代の遺物が出土している。この他に生産遺跡として、福岡町橋良東郷古窯では平安時代末葉に陶器・瓦の焼成が行われた。

文献記録によれば12世紀初頭頃、現在の柱二・三・六・七番町付近に伊勢神宮領の橋良御厨が設置されており、その付近ではかつて条里制的地割が断片的に遺存していた。ただし地割の設定時期は不明である。

鎌倉～室町時代

鎌倉～室町時代の遺跡は遺物の散布地を含め、牟呂町を中心とする柳生川河口部に広く確認されて



- | | | |
|----------|------------|-----------|
| 1 王郷遺跡 | 7 中村遺跡 | 13 小浜貝塚 |
| 2 楽法寺北遺跡 | 8 作神遺跡 | 14 王ヶ崎貝塚 |
| 3 公文南遺跡 | 9 市場遺跡 | 15 磯辺王塚古墳 |
| 4 東脇遺跡 | 10 牟呂王塚古墳 | 16 万福寺古墳 |
| 5 権現神社古墳 | 11 市杵嶋神社古墳 | 17 万福寺遺跡 |
| 6 行合遺跡 | 12 市杵嶋神社貝塚 | 18 王ヶ崎遺跡 |

○	縄文時代の遺跡	} 古墳
●	古墳時代の遺跡	
▲	歴史時代の遺跡	
■	歴史時代の遺跡	

第3図 王郷遺跡周辺の遺跡 (1/10,000)

いる。これはとりもなおさず中世における当地域の繁栄ぶりを示すもので、漁撈活動、交易などの集散・中継地としての性格が現れているものと考えられる。

牟呂町で実施された区画整理に伴う発掘調査では、ほぼ全域で中世の屋敷遺構が検出されている。中でも公文遺跡では12世紀代の幅約4m、深さ約1.6mのL字状に曲がる溝が検出され、中世の豪族居館と考えられている。溝の中からは大量の獣骨（馬、牛）、陶器が出土しており、合戦時の犠牲を廃棄したものと推定されている。また市場遺跡付近は市場港（現在も遺存）での水揚げ品や交易品を対象とする流通の一拠点であったと推定され、その名のとおり市場（市庭）が設けられたと思われる。王郷遺跡周辺の中位段丘上にも中世の遺物の散布が認められており、平成3年度の磯辺王塚古墳の発掘調査でも在地産土師器のほか、渥美・常滑窯の製品をはじめとする多数の中世遺物が出土している。その他、東脇遺跡中の貝塚や橋良遺跡などから、中世～近世の遺物が多数確認されている。

また、戦国時代を中心に、柳生川から南部の臨海地帯に草間城、大崎城、高縄城などの戸田氏関連の城が築かれた。

文献によれば、古代から中世にかけて東三河地域には伊勢神宮領を中心とする荘園が多数営まれている。王郷遺跡周辺では秦御園・橋良御厨（橋良遺跡か）などが所在したとされるが、王郷遺跡所在地に相当する荘園については不明である。

近世以降

近世の遺構は、中世遺構と一部重複する形で多数確認されている。発掘が進む牟呂地区において遺構検出が顕著であり、貝殻を投棄した廃棄土壌、地割溝、掘立柱建物などが主要な遺構である。

三河湾沿岸部の海浜集落として様々な様相を呈してきた王郷遺跡周辺であるが、江戸時代から実施された干拓事業によりその様相は一変した。明治時代には旧大崎村の海軍島に通じる軍事道路が調査区西側に造成され、今も豊橋中心街と大崎方面とを結ぶ主要道路として利用されている。

現在、王郷遺跡周辺は内陸化して、海浜部の面影はほとんど見られず、時折吹きつける強い西からの浜風にその名残が見いだせる程度である。調査地付近から最も近い海岸線まで約1.8km離れている。

参考文献

岩瀬彰利 「小浜貝塚出土の縄文時代中期後葉の土器について」 『三河考古 第5号』

三河考古刊行会 1991

豊橋市史編集委員会 『豊橋市史 第1巻』 1973

豊橋市教育委員会 『豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書第2集』 1970

豊橋市教育委員会 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第11集 見丁塚遺跡』 1990

豊橋市教育委員会 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第13集 市杵嶋神社遺跡（Ⅰ）』 1991

豊橋市教育委員会 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第18集 橋良遺跡』 1994

第2章 調査の経過

1. 調査に至る経過

平成6年5月頃、昭和シェル石油株式会社により市内小浜町27、28、29、30番地においてガソリンスタンドの開発計画が立てられた。当該地付近は縄文晩期の王ヶ崎貝塚をはじめ、磯辺王塚古墳などが所在する遺跡の集中地域であることから、同社名古屋支店長より当該地での埋蔵文化財の有無及びその取扱いについて愛知県教育委員会あてに照会があった。豊橋市教育委員会では県教委からの指示を受け、当該地で試掘による遺構確認調査を6月29・30日にかけて実施した。その結果、3カ所設けた試掘グリットのすべてから柱穴を中心とする遺構が検出されたほか、中世・近世の遺物が出土した。これにより当該地が遺跡内に含まれると確認された。

この結果事業者から文化財保護法第57条2に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が提出され、県教委、市教委、事業者の三者で遺跡の取扱いについて協議した。事業者の計画では大型のガソリン等貯蔵施設を地下に設けるほか、多数の建物を建設する予定にあり、地下の遺構にその影響が多大に及ぶことは避けられないと判断された。このため開発予定地について、事業者の調査費負担で発掘調査を行い遺構の記録保存を行うことで三者とも合意した。調査対象地は当該地全域、対象面積は967㎡である。市教委から文化財保護法第98条の2に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知」を文化庁長官あて提出した後、本調査の実施については市協委の指導のもとに豊橋遺跡調査会が実施し、調査期間は平成7年2月1日～3月31日までとする中で市教委、遺跡調査会、事業者三者の合意を得た。



第4図 調査区位置図-2 (1/2,500)

2. 調査の方法と経過 (第1表)

本調査は平成7年2月1日～3月29日にかけて行った。基本的に開発対象地全範囲を調査対象としたが、現状でなお一部が宅地として利用されている部分があり、そこについては調査から除外した。また調査区の周囲に控えを必要としたことから、実際の調査面積は若干縮小している（以下、調査実施場所を調査区と呼称する）。

調査に際して、調査区外に排土置き場が確保できなかったため、調査区を南西側と北東側に分け、それぞれを前後に調査することで置き場の確保を図った。

また調査の基準点は隣接する県道大山・豊橋停車場線に平行する形で任意に設定し、それを基に北東から南西にかけて10m間隔でA A・A・B・C・D帯、北西から南東にかけて1・2・3帯を設け、それぞれの交差による10m方眼の調査地区を設けた（第5図）。地区名はA A-1区など各帯の名称の連続で名付けた。なお国土座標上の位置、及び標高値については（株）フジヤマに測量委託をして求めた。

作業は基本的に人力で行い、表土剥ぎについては重機を使用した。遺構検出面は南西側については試掘調査による所見から地山面にしたが、北東側では地山直上に遺物包含層の広がり認められた（第8図5層）ため、その上面で遺構の確認を行いつつ人力で掘り下げ、最終的には地山面で遺構を検出した。調査は南西側を平成7年2月中に、北東側を同3月中に行い、それぞれの終了時に高所作業車を使用して全体の俯瞰写真撮影を行った。2月中は晴天が続き、作業は比較的順調にはかどった。3月後半には雨天が集中し、作業が思うようにはかどらないこともあったが、3月29日に全作業を終了することができた。なお南西側の調査終了時には現地説明会を開催し、市民約130名の参加を得た。

本調査の具体的な調査日程は次のとおりである。

第1表 発掘調査作業工程表

作業内容		日 程	
		2 月	3 月
調査区 南西半	表土剥ぎ	2/1	
	遺構検出	2/1	
	実測図作成	2/1	
	全体写真	2/1	
調査区 北東半	表土剥ぎ		3/1
	遺構検出		3/1
	実測図作成		3/1
	全体写真		3/1

2月1日～3日 発掘機材搬入。重機を使用し調査区南西側の表土剥ぎ。遺構検出開始。

2月6日～24日 遺構検出。遺構図、遺物出土状況図、土層図など関係図面を随時作成。

2月25日 現地説明会を開催する。周辺住民を中心とする市民約130名が参加。

2月27日 高所作業車を使用し調査区南西側の全体写真撮影。

2月28日 関係図面作成。

3月1日～3日 重機を使用し調査区北東側の表土剥ぎ。遺構検出開始。

3月4日～27日 遺構検出。関係図面を随時作成。途中降雨などにより作業を数日休む。

3月28日 高所作業車を使用し調査区北西側の全体写真撮影。発掘機材搬出開始。

3月29日 関係図面作成。機材搬出。発掘作業終了。

現地は調査終了後、ガソリンスタンド建設工事に移行しており、すでに完成し営業を行っている。

注 調査区南側には縄文時代晩期の王ヶ崎貝塚が隣接することから、本調査時までは調査区を王ヶ崎貝塚の一部として扱い、調査前の必要書類、調査中の遺物取り上げなどすべて同名を使用してきた。しかし本調査の結果、当該地は中・近世を中心とする遺跡であり、貝塚関連遺構・遺物がほとんど確認されなかったため、別個の遺跡として扱うことにした。名称は、遺跡自体の広がり隣接する王ヶ崎町字王郷の磯辺王塚古墳付近まで及ぶため、「王郷遺跡」とした。

第3章 遺構

今回の調査区で検出された遺構には、掘立柱建物を中心に、溝、土壇などが見られる。これらは大半が中世から近世に属するものである。

検出された遺構には、掘立柱建物、柵（塀）、溝、大型廃棄土壇をはじめとする多数の土壇などがある。建物は主軸の違いから7時期以上の群が想定され、検出された柱穴は800を超えることから、今回の検討分よりも実際の建物数は更に多いと考えられる。建物は地山面の標高が2～3mの緩傾斜面に集中しており、その集中箇所はおよそ南北25m×東西13m以上の範囲内に収まる。また標高3m以上の高所で、比較的平坦な調査区南西側は遺構の分布は散漫である。溝は12～13世紀のもの1条、ほか近世の溝が4条検出されており、通例に従えば屋敷地などの区画溝と考えられる（第5～7図）。

ここでははじめに調査区の基本層序について説明し、次いで掘立柱建物（SB）、柵・塀（SA）、溝（SD）、土壇（SK）の順で各遺構について種類毎に説明を行う。但し土壇については大型のもの、掘立柱建物と有機的な関係が想定されるもの、遺物が比較的まとまって出土したもののみを取り上げる。なお各遺構の規模は検出面（地山面）で測った数値である。

1. 基本層序（第8図）

調査区はかつて宅地として使用され、また調査直前まで碎石を敷き駐車場として利用されていたところである。そのため調査前の地表面は盛土・碎石敷などにより、ほぼ水平であった。

調査の結果、調査区の基本的な堆積層序は3つの層（第8図3～5層）からなり、造成前の旧地表面、地山面とも南から北へ向け緩やかな下り傾斜となっていることが判明した。

3層は調査地全域を覆うものである。暗灰褐色砂質土からなり、わずかに貝殻が含まれる。断面観察によれば全ての遺構がこれに覆われており、形成時期は江戸時代以降と考えられる。造成前の旧地表面はこの層の上面であり、数十年前まで調査地は畑地として利用されていた（注1）ことから近・現代の耕作土と考えられる。

4・5層は調査区の中央から北にかけ緩やかに傾斜する面上に堆積する。4層は茶褐色砂質土からなり、江戸時代以後の掘立柱建物の柱穴が上から掘り込まれ、また14世紀前葉までの遺構を覆っている。よってその形成時期は14世紀から江戸時代の間と考えられ、江戸時代の遺構面は正確にはこの上面（以上）であるといえる。

5層は暗茶褐色砂質土からなり、砂礫、焼土、および13世紀後葉～14世紀初頭の遺物を多量に含む。遺物の出土状況は調査地の中央やや北寄りに集中しており、その分布に粗・密が認められることから5層上から掘り込まれた同時期の遺構が存在すると考え上面を精査した。しかし上面および断面観察による限り、鎌倉時代の遺構はすべてこの層の下（地山面）から掘り込まれており、5層中に遺構は確認できなかった。むしろこの所見から、5層の堆積時に鎌倉時代の遺構が大きく削平を受けていた状況が想定される。調査区が柳生川河口の海浜部に位置し、また標高2～3mという低地に所在するこ



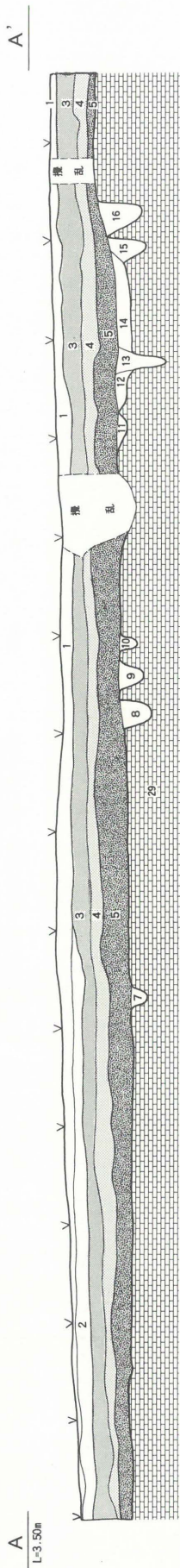
第5図 遺構全体図 (1/150)



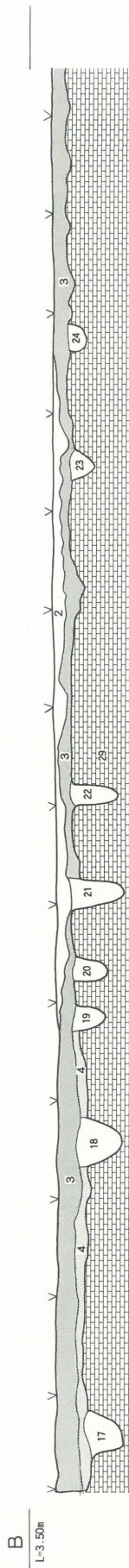
第6图 掘立柱建物・柵(塀)位置图 (1/150)



第7图 土壤位置图 (1/150)



A-A' ライン土層



B-B' ライン土層

- | | | | |
|--|---|---|--|
| <p>1. 碎石層</p> <p>2. 環代造成土層</p> <p>3. 暗灰褐色砂質土層① (貝殻が混じる)</p> <p>4. 茶褐色砂質土層①</p> <p>5. 暗茶褐色砂質土層① (砂礫、焼土、土器を含む)</p> <p>6. 暗茶褐色砂質土層② (SD-3埋土)</p> <p>7. 暗茶褐色砂質土層③ (柱穴埋土)</p> <p>8. 暗茶褐色砂質土層④ (柱穴埋土)</p> <p>9. 暗茶褐色砂質土層⑤ (柱穴埋土)</p> <p>10. 暗茶褐色砂質土層⑥ (柱穴埋土)</p> | <p>11. 暗茶褐色砂質土層⑦ (柱穴埋土)</p> <p>12. 暗茶褐色砂質土層⑧ (SD-5埋土)</p> <p>13. 暗茶褐色砂質土層⑨ (柱穴埋土)</p> <p>14. 灰褐色砂質土層 (地山土を含む・土壌埋土)</p> <p>15. 暗茶褐色砂質土層⑩ (黄色粒を含む・柱穴埋土)</p> <p>16. 暗茶褐色砂質土層⑪ (焼土を含む・柱穴埋土)</p> <p>17. 茶褐色砂質土層⑫ (地山土を含む・柱穴埋土)</p> | <p>18. 茶褐色砂質土層⑬ (地山土を含む・柱穴埋土)</p> <p>19. 暗灰褐色砂質土層⑭ (地山土を含む・柱穴埋土)</p> <p>20. 暗灰褐色砂質土層⑮ (地山土を含む・柱穴埋土)</p> <p>21. 暗灰褐色砂質土層⑯ (炭、焼土を含む・柱穴埋土)</p> <p>22. 暗灰褐色砂質土層⑰ (地山土を含む・柱穴埋土)</p> <p>23. 暗灰褐色砂質土層⑱ (地山土を含む・柱穴埋土)</p> | <p>24. 茶褐色砂質土層⑲ (柱穴埋土)</p> <p>25. 暗茶褐色砂質土層⑳ (柱穴埋土)</p> <p>26. 暗灰褐色砂質土層㉑ (SD-3埋土)</p> <p>27. 暗灰褐色砂質土層㉒ (貝殻混じる)</p> <p>28. 茶褐色砂質土層㉓ (土壌埋土)</p> <p>29. 明茶褐色砂質土層㉔ (茶褐色砂質土層㉕)
茶褐色砂質土層㉖
茶褐色砂質土層 (以上地山)</p> |
|--|---|---|--|



第8図 調査区東壁土層図 (1/80)

とから、高波、洪水などの水害による堆積を想定する必要がある。ただし遺構面を砂層が覆うといった明瞭な水害痕跡は認められなかった。

2. 掘立柱建物 (第9～21図)

掘立柱建物は総数で33棟分が確認されている。これらは鎌倉時代後半、戦国時代、江戸時代のもので、主軸・重複状況から7時期以上の建物群の存在が推定される。ただし検出された柱穴は他にも多数あり、実際の建物数は更に多くなると考えられる。なお、文中で使用する「P○」とは柱穴番号を示し、各実測図に対応するものである。

SB-1 (第9図)

AA-1区、A-1区で検出された1間以上×1間の建物で、一部が調査区外となっている。主軸方位はN-7°-Eを測る。規模は桁行1.3m以上×梁間1.6mを測り、柱間は桁行1.2m、梁間1.6mである。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.4～0.55mとやや大きめであり、深さは0.1～0.25mほどと削平を受けたためか浅い。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物は無いが、建物時期は主軸方位を考慮して14世紀前葉と考えられる。

SB-2 (第10図、第28図)

AA-1・2区、A-1・2区、B-2区の広範囲にわたって検出された10間×5間の建物で、南東角が調査区外となっている。主軸方位はN-4°-Eを測る。中央に3カ所の間仕切りがあり、南端にも庇または縁が取り付く。規模は桁行11.4m×梁間6.0mをそれぞれ測り、柱間は1.0・1.2mで比較的一定している。柱穴は円形・楕円形を呈し、径0.25～0.45m、深さ0.3～0.5mと一定していないが、側柱には径0.5mの比較的大きめのもの、間仕切りには径0.3mほどの小ぶりなものが目立つ。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土である。遺物にはP41から出土した古瀬戸の折縁深皿(第32図3)や、中世陶器の小皿(第32図1)などがあり、建物時期は主軸なども考慮して14世紀前葉と考えられる。

SB-2は規模が大きいのに関わらず、柱穴があまり大きくないことや、中央の間仕切りが一間ごとという、非常に狭い間隔であることなどから、あるいは南側に庇・縁を持ち、南北に直列する2棟の建物となる可能性もある。しかし柱穴列がよく揃い、建物間隔がちょうど1間となるため、ここでは1棟の大型建物と理解した。

なお、P41出土の折縁深皿と同一品の破片がB-3区SK-30から出土しており、同時期に存在したと考えられる。またSB-20と重複しているが、主軸方位が一致することから両者は比較的近い時期のものと思われる。

SB-3 (第9図)

AA-2区で検出された1間以上×2間の建物で、一部が調査区外となっている。主軸方位はN-41°-Eを測る。規模は桁行1.75m以上×梁間2.4mをそれぞれ測り、柱間は桁行1.75m(?)、梁間

1.2～1.3mである。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.3～0.5m、深さは0.1～0.25mほどと一定していない。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には中世陶器の碗などがあり、建物時期は主軸方位などを考慮して13世紀中葉～後葉と考えられる。

S B - 4 に接して建てられており、主軸方位の一致から両者は同時期に存在したと考えられる。

S B - 4 (第9図・第28図)

A A - 2 区、A - 2 区で検出された3間×2間以上の建物で、一部が調査区外となっている。主軸方位はN-41°-Eを測る。規模は桁行3.7m以上×梁間4.45mをそれぞれ測り、柱間は1.2～1.8mである。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.3～0.7m、深さは0.1～0.4mほどで、南の梁間側は深い。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物にはP5から出土した中世陶器の碗(第35図88)などがあり、建物時期は主軸方位も考慮してS B - 3 と同時期の13世紀中葉～後葉と考えられる。

S B - 5 (第9図)

A A - 2 区、A - 2 区で検出された2間以上×2間の建物で、一部が調査区外となっている。主軸方位はN-14°-Eを測る。規模は桁行3.7m以上×梁間3.4mをそれぞれ測り、柱間は1.6・1.8・2.0mである。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.4～0.7m、深さは0.1～0.3mほどで、底のレベルは比較的一定している。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物はないが、主軸方向を考慮して建物時期は江戸時代と考えられる。

S B - 6 と一部重複しているが、主軸方位がほぼ一致していることから、両者は近い時期の建物と考えられる。

S B - 6 (第11図)

A A - 2 区、A - 2 区で検出された4間×1間以上の建物で、一部が調査区外となっている。主軸方位はN-15°-Eを測る。規模は桁行6.2m×梁間2.2m以上をそれぞれ測り、柱間は桁行が1.6m、梁間が2.2mである。柱穴は平面形が円形を呈し、径0.45m前後、深さは0.2～0.45mほどでありあまり一定していない。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には江戸時代の陶器片があり、主軸方位なども考慮して建物時期は江戸時代と考えられる。

S B - 7 (第11図)

A A - 1・2区、A - 1・2区で検出された4間×3間の建物である。主軸方位はN-28°-Eを測る。北・南にはそれぞれ庇または縁が付き、幅は南側に比べ北側は広い。規模は桁行5.05m×梁間4.8mをそれぞれ測り、柱間は桁行が0.8・1.3・1.45m、梁間が1.6mである。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.6～0.7mと大きめのものが揃い、また深さも0.4～0.5mほどのものが多い。ただし北側梁の柱穴は他に比べ浅いものが目立つ。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には中世陶器の碗(第32図4・5)などがあり、建物時期は主軸方位を考慮して13世紀後葉と考えられる。

S B - 10 と重複しているが、主軸方位が一致することから両者は近い時期のものと思われる。なお、

調査区で検出された建物の内、二面に庇（縁）を持つのは当建物のみである。

SB-8 (第12図)

A-2区で検出された3間×2間の建物に、1間以上×1間の小建物が付随する。主軸方位はN-43°-Wを測る。小建物は玄関口あるいは倉庫などの簡易な施設と考えられる。規模は桁行6.5m（小建物を除く）×梁間4.25mをそれぞれ測り、柱間は桁行・梁間とも2.0mほどである。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.3~0.7m、深さは0.1~0.4mほどであり一定していないが、0.25mほどのものが多い。柱穴の埋土は淡茶褐色砂質土・暗茶褐色砂質土である。出土遺物は無く、建物時期は主軸方位を考慮しても不明である。

SB-9 (第12図)

A-1・2区で検出された3間×2間の建物である。主軸方位はN-42°-Eを測る。建物内には方形の浅い土壇が設けられ、また北東側の柱は確認されないことから、そちらは開放されていたと考えられる。規模は桁行3.35m×梁間2.4mをそれぞれ測り、柱間は桁行1.1m、梁間1.2mほどである。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.3~0.45m、深さは0.2~0.5mほどで、小規模な建物のわりに深いものが多い。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土である。建物内には方形の土壇（A-2区SK-10）が存在する。規模は2.05×1.9m、深さ0.12mを測り、埋土は暗茶褐色砂質土のみからなる。土壇の西側の一部は北西に向け張り出している。遺物にはA-2区SK-10から中世陶器の碗（第34図85）・小皿（第34図86）、土錘（第34図87）などが出土しており、建物時期は主軸方位なども考慮して13世紀中葉~後葉と考えられる。

SB-10 (第12図)

A-2区で検出された4間×2間の建物である。主軸方位はN-30°-Eを測る。規模は桁行3.8m×梁間2.05mをそれぞれ測り、柱間は桁行1.2・1.6m、梁間1.0mほどである。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.5~0.6m、深さは0.1~0.5mほどであり一定していない。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には中世陶器の小皿（第32図8）などがあり、建物時期は主軸方位なども考慮して13世紀後葉と考えられる。

SB-11 (第13図)

A-2区で検出された2間×2間の建物である。主軸方位はN-36°-Eを測る。規模は桁行4.2m×梁間3.3mをそれぞれ測り、柱間は桁行2.1m、梁間1.65mである。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.4~0.5m、深さは0.1~0.55mほどである。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には中世陶器片などがあり、建物時期は主軸方位なども考慮して13世紀後葉と考えられる。

SB-12 (第13図)

A-2区で検出された2間以上×2間の建物である。主軸方位はN-26°-Eを測る。規模は桁行

3.4m以上×梁間3.4mをそれぞれ測り、柱間は桁行・梁間とも1.7mである。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.5～0.6m、深さは0.1～0.55mほどであり一定していない。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には中世陶器片などがあり、建物時期は主軸方位なども考慮して江戸時代と考えられる。

SB-13 (第13図)

A-1区で検出された1間以上×1間の建物である。主軸方位はN-18°-Eを測る。規模は桁行2.6m以上×梁間2.6mをそれぞれ測り、柱間は桁行で2.0・2.6m、梁間で2.6mである。梁間については柱間が広いことから、中間に未検出の柱穴が存在する可能性がある。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.3～0.45m、深さは0.2～0.4mほどである。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物はないが、建物時期は主軸方位などを考慮して江戸時代と考えられる。

SB-14 (第13図・第28図)

A-2区、B-2区で検出された3間×2間の建物である。主軸方位はN-42°-Wを測る。規模は桁行5.45m×梁間2.95mをそれぞれ測り、柱間は桁行で1.8m、梁間で1.5mである。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.4～0.5m、深さは0.4～0.5mほどである。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物にはP2から出土した中世陶器の碗(第35図96)などがあり、建物時期は主軸方位なども考慮して13世紀中葉～後葉と考えられる。

SA-1・2と重複しているが、主軸方位が近似することから両者は近い時期のものと考えられる。

SB-15 (第14図)

A-1・2区、B-1・2区で検出された7間×2間の建物である。主軸方位はN-33°-Eを測る。規模は桁行11.6m×梁間2.7mをそれぞれ測り、柱間は桁行で1.6～1.75m、梁間で1.35mである。南東から3間分は総柱構造をとる。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.3～0.6m、深さは0.4～0.7mと比較的深い。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には中世陶器の碗(第32図9・10)・小皿(第32図11)、青磁蓮弁文碗(第32図12)、土師器の皿(第32図13・14)などがあり、建物時期は13世紀後葉と考えられる。

SB-18・19と重複しているが、主軸方位が近似することから両者は近い時期のものと考えられる。

SB-16 (第15図)

B-1区で検出された6間×2間の建物である。主軸方位はN-35°-Eを測る。規模は桁行5.1m×梁間2.55mをそれぞれ測り、柱間は桁行で0.8・1.1・1.4m、梁間で1.3mで、桁は柱間が不揃いである。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.3m、深さは0.3～0.6mである。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には中世陶器の碗(第32図15)などがあり、建物時期は主軸方位なども考慮して13世紀中葉～後葉と考えられる。

S B-17 (第15図)

B-1・2区で検出された4間×2間の建物である。主軸方位はN-16°-Eを測る。規模は桁行5.4m×梁間3.15mをそれぞれ測り、柱間は桁行で1.2m、1.4m、梁間で1.55mで、桁側は柱が立て混んでいる。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.3~0.5m、深さは0.2~0.6mである。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土・暗灰褐色砂質土である。出土遺物は無いが、建物時期は主軸方位などを考慮して江戸時代と考えられる。

S B-18 (第16図)

A-2区、B-2区で検出された4間×2間の建物である。主軸方位はN-29°-Eを測る。規模は桁行3.1m×梁間2.15mをそれぞれ測り、柱間は桁行0.8m、梁間1.05mで、桁は柱間が狭く立て混んでいる。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.4~0.5m、深さは0.2~0.6mで、南桁側が浅い。柱穴の埋土は茶褐色砂質土・暗灰褐色砂質土である。出土遺物には土錘(第32図16)、中世陶器片などがあり、建物時期は主軸方位なども考慮して13世紀後葉と考えられる。

S B-15・19と近接あるいは重複しているが、主軸方位が近似することから両者は近い時期のものと考えられる。

S B-19 (第16図)

A-2区、B-2・3区で検出された3間×2間の建物である。主軸方位はN-33°-Eを測る。建物中央は桁に沿って仕切られている。規模は桁行4.5m×梁間3.7mをそれぞれ測り、柱間は桁行1.4・1.6m、梁間1.75・1.95mである。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.45~0.5m、深さは0.2~0.4mで、南の梁間側が浅い。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土・暗灰褐色砂質土・暗灰色砂質土である。出土遺物には中世陶器片があり、建物時期は主軸方位なども考慮して13世紀後葉と考えられる。

S B-20 (第16図)

A-2区、B-2・3区で検出された2間以上×2間の建物である。主軸方位はN-7°-Eを測る。規模は桁行3.8m以上×梁間3.5mをそれぞれ測り、柱間は桁行1.9m、梁間1.75mである。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.4~0.5m、深さは0.15~0.95mであまり一定していないが、深いものが目立つ。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土・暗灰褐色砂質土である。出土遺物には常滑窯産の甕(第32図17)などがあり、建物時期は主軸方位なども考慮して14世紀前葉と考えられる。

S B-21 (第17図)

A-2区、B-2・3区で検出された5間×4間の建物で、一部が調査区外となっている。主軸方位はN-20°-Eを測る。規模は桁行7.1m×梁間5.2mをそれぞれ測り、柱間は桁行が1.4・1.6m、梁間が1.2・1.4mである。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.4~0.6m前後、深さは0.1~0.9mほどである。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土・暗灰褐色砂質土である。遺物には中世陶器の碗(第32図18~20)などがあるが、B-3区S K-30と重複することから、建物時期は主軸方位を考慮して14世紀

中葉以降と考えられる。

S B-24と近接あるいは重複しているが、主軸方位が近似することから両者は近い時期のものといえる。

S B-22 (第18図・第28図)

B-1・2区で検出された建物で、主軸方位はN-33°-Eを測る。2間×2間の総柱建物部分(P1~P9)と、4間×1間の長屋状の側柱建物部分(P10~P18)とに性格が分かれ、それぞれが別の建物とも考えられたが、柱の間隔などから同一建物と判断した。

総柱建物部分は、規模は桁行4.2m×梁間1.7mをそれぞれ測り、柱間は桁行が2.0・2.15m、梁間が0.8・0.95mである。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.3~0.5m前後、深さは0.3~0.45mほどである。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土・暗灰褐色砂質土である。側柱建物部分は、規模は桁行8.55m×梁間1.9mをそれぞれ測り、柱間は桁行が2.0・2.25m、梁間が1.9mである。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.5~0.75m、深さは0.45~0.85mほどで、総柱建物部分よりも大きい。柱穴の埋土は淡茶褐色砂質土・暗茶褐色砂質土・暗灰色砂質土である。総柱建物部分と側柱建物部分との間の距離は1.1mであり、S B-22の南北長は4.7mである。遺物にはP13から出土した中世陶器の碗(第32図22)などがあり、建物時期は主軸方位なども考慮して13世紀後葉と考えられる。

S B-23 (第19図)

B-3区で検出された5間×4間の建物である。主軸方位はN-27°-Eを測る。東から2間目の所で1カ所間仕切りが見られる。規模は桁行9.0m×梁間4.45mをそれぞれ測り、柱間は桁行1.8m、梁間1.0・1.2mである。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.4~0.7m、深さは0.55~0.65mであまり一定していない。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土・暗灰色砂質土・暗灰褐色砂質土である。出土遺物には瀬戸美濃窯産の摺鉢(第32図26)、土錘(第32図27)などがあり、建物時期は18世紀前葉以降と考えられる。

S B-24 (第17図)

B-3区で検出された1間以上×2間の建物で、一部は調査区外となっている。主軸方位はN-23°-Eを測る。規模は桁行1.2m以上×梁間2.9mをそれぞれ測り、柱間は桁行1.2m、梁間1.45mである。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.4m、深さは0.3~0.5mであまり一定していない。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土・暗灰褐色砂質土である。出土遺物は無いが、建物時期は主軸方位などを考慮して14世紀中葉以降と考えられる。

S B-25 (第17図)

B-2区で検出された2間×2間の建物である。主軸方位はN-5°-Wを測る。規模は桁行4.1m×梁間3.5mをそれぞれ測り、柱間は桁行1.9・2.0m、梁間1.75mである。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.35~0.4m、深さは0.35~0.65mであまり一定していない。柱穴の埋土は暗茶褐色砂

質土である。出土遺物には中世陶器片などがあり、建物時期は主軸方位なども考慮して14世紀前葉と考えられる。

S B-26と重複しているが、主軸方位が近似することから両者は近い時期のものといえる。

S B-26 (第19図)

B-2区、C-2区で検出された3間×2間の建物である。主軸方位はN-1°-Eを測る。規模は桁行4.8m×梁間3.3mをそれぞれ測り、柱間は桁行・梁間とも1.6mである。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.3~0.8m、深さは0.15~0.65mであまり一定していない。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には中世陶器の碗(第32図28)などがあり、建物時期は主軸方位などを考慮して14世紀前葉と考えられる。

S B-27 (第20図)

B-1区、C-1区で検出された2間×1間の建物である。主軸方位はN-25°-Eを測る。規模は桁行3.75m×梁間1.8mをそれぞれ測り、柱間は桁行1.9m、梁間1.8mである。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.3~0.5m、深さは0.2~0.55mであまり一定していない。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には中世陶器片などがあり、建物時期は主軸方位なども考慮して14世紀中葉以降と考えられる。

S B-28 (第20図)

B-3区、C-3区で検出された4間以上×1間以上の建物で、一部は調査区外となっている。主軸方位はN-15°-Eを測る。規模は桁行7.6m以上×梁間2.5m以上をそれぞれ測り、柱間は桁行1.9m、梁間2.5mである。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.45~0.6m、深さは0.4~0.65mであまり一定していない。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土・暗灰色砂質土・暗灰褐色砂質土である。出土遺物には江戸時代の陶器、土師器などがあり、建物時期は主軸方位なども考慮して江戸時代と考えられる。

S B-29 (第20図)

B-3区で検出された1間以上×2間の建物で、一部は調査区外となっている。主軸方位はN-31°-Eを測る。規模は桁行1.3m以上×梁間2.6mをそれぞれ測り、柱間は桁行・梁間とも1.3mである。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.5~0.6m、深さは0.1~0.6mであまり一定していない。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土・暗灰色砂質土である。出土遺物には北宋銭の元豊通寶、土師器片などがあり、建物時期は主軸方位なども考慮して13世紀後葉と考えられる。

S B-30 (第21図)

C-2・3区で検出された4間×2間の建物である。主軸方位はN-13°-Eを測る。規模は桁行7.5m×梁間3.7mをそれぞれ測り、柱間は桁行1.6・1.75・1.9・2.2m、梁間1.85mである。柱穴は平面

形が円形・楕円形を呈し、径0.4～0.8m、深さは0.3～0.55mであまり一定していない。柱穴の埋土は柱痕が暗灰褐色砂質土、周囲の埋土は濁茶褐色砂質土が多い。出土遺物には瀬戸美濃窯産の天目茶碗(第32図31)、江戸時代の土師器片などがあり、建物時期は主軸方位なども考慮して16世紀後葉以降と考えられる。

S B-31 (第20図)

C-1・2区で検出された3間×1間の建物である。主軸方位はN-31°-Eを測る。規模は桁行6.4m×梁間1.9mをそれぞれ測り、柱間は桁行2.2・2.4m、梁間1.9mである。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.3～0.5m、深さは0.1～0.5mで南側桁行が一様に浅い。柱穴の埋土は不明である。出土遺物は無いが、建物時期は主軸方位などを考慮して14世紀前葉と考えられる。

S B-32 (第21図)

C-1区、D-1区で検出された2間×1間の建物である。主軸方位はN-37°-Wを測る。規模は桁行4.9m×梁間2.7mをそれぞれ測り、柱間は桁行2.1～2.6m、梁間2.7mである。柱穴は平面形が円形を呈し、径0.3～0.45m、深さは0.15～0.6mであまり一定していない。柱穴の埋土は不明である。出土遺物は無く、建物時期は主軸方位を考慮しても不明である。

S B-33 (第21図)

D-3区で検出された1間以上×1間の建物である。主軸方位はN-43°-Eを測る。規模は桁行3.35m×梁間1.8mをそれぞれ測り、柱間は桁行3.35m、梁間1.8mであるが、桁についてはその中心に溝で削平された柱穴の存在が推定され、実際は桁行2間、柱間は1.7m程度と考えられる。柱穴は平面形が円形を呈し、径0.35～0.4m、深さ0.15～0.25mで比較的浅い。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土である。なおP1と示したものは後世(江戸時代)に掘り込まれた土壌で、実際の柱穴はすでに失われている。出土遺物は無いが、建物時期は主軸方位などを考慮して13世紀後葉と考えられる。

3. 柵(塀) (第22・23図)

建物としては確認できなかったが、一直線に柱穴が並ぶものについては柵(塀)と判断した。現状で11例が確認されている。これらは鎌倉時代後半、および江戸時代のもので、主軸方向から掘立柱建物の各群との対応が可能である。

S A-1 (第22図)

A-2区で検出された4間以上の柵(塀)で、調査区外まで続くと考えられる。主軸方位はN-45°-Eを測る。規模は6.8m以上を測り、柱間は1.3・1.8・2.0mである。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.25～0.4m、深さは0.2～0.5mであまり一定していない。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には中世陶器の碗などがあり、時期は主軸方位なども考慮して13世紀中葉～後葉と

考えられる。

S A-2と並行しており、柱間隔も近似することから、両者は同時期のものと推定される。また両者はS B-14と重複しているが、この建物の主軸方位はS A-1・2と近似することから、S B-14とも近い時期関係にあると考える。

S A-2 (第22図)

A-2区で検出された4間以上の柵(塀)で、調査区外まで続くと考えられる。主軸方位はN-45°-Eを測る。規模は6.8m以上を測り、柱間は1.3・1.6・2.4mで対面するS A-1と柱間隔が近似している。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.3~0.5m、深さは0.1~0.45mであまり一定していない。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には中世土師器片などがあり、時期は主軸方位なども考慮して13世紀中葉~後葉と考えられる。

S A-3 (第22図)

A-1・2区、B-2区で検出された4間の柵(塀)である。主軸方位はN-9°-Eを測る。規模は9.0mを測り、柱間は1.6・1.8・2.2・2.8mである。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.5~0.6m、深さは0.4~0.8mである。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には青磁蓮弁文碗(第33図33)、土錘(第33図34)などがあり、時期は主軸方位なども考慮して14世紀前葉と考えられる。

S A-4 (第22図)

A-2区、B-2区で検出された5間の柵(塀)である。主軸方位はN-15°-Eを測る。規模は8.0mを測り、柱間は1.6mである。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.4~0.5m、深さは0.15~0.6mであまり一定していない。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物は無いが、時期は主軸などを考慮して江戸時代と考えられる。

S A-5 (第22図)

B-2区で検出された4間の柵(塀)である。主軸方位はN-25°-Eを測る。規模は6.5mを測り、柱間は1.6mである。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.4m、深さは0.25~0.8mであまり一定していない。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には中世陶器片などがあるが、時期は主軸方位なども考慮して江戸時代と考えられる。

S A-6 (第23図)

B-1・2・3区で検出された7間以上の柵(塀)で、調査区外まで続くと考えられる。主軸方位はN-37°-Wを測る。規模は13.6m以上を測り、柱間は1.5・1.7・1.8・2.0・2.2mで、P1~P5の間隔は不定だが、P5~P8では間隔が広くなり、またよく揃っている。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.3~0.55m、深さは0.2~0.7mであまり一定していない。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土

である。出土遺物には中世陶器の碗（第33図36）などがあるが、出土状況から当遺構に伴うものではない可能性があり、時期は主軸方位を考慮しても不明である。

S A-7と並行しており、柱間隔も一部近似することから両者は同時期のものと推定される。

S A-7（第23図）

B-1・2・3区で検出された7間以上の柵（塀）で、調査区外まで続くと考えられる。主軸方位はN-37°-Wを測る。規模は15.3m以上を測り、柱間は1.6・1.8・2.8mで、P1～P5間とP5～P8とでは間隔が大きく異なる。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.4～0.55m、深さは0.1～0.65mであまり一定していない。柱穴の埋土は暗灰色砂質土である。出土遺物は無く、時期は主軸方位などを考慮しても不明である。

S A-8（第23図・第28図）

B-2区、C-1・2区で検出された7間の柵（塀）であり、途中2カ所で直角に屈曲している。主軸方位はN-1°-Eを測る。規模は全長12.6m、南北3.8m、東西8.8mを測り、柱間は1.8mである。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.25～0.4m、深さは0.2～0.45mであまり一定していない。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土・暗灰褐色砂質土である。出土遺物には中世陶器・碗などがあり、時期は主軸方位などを考慮して14世紀前葉と考えられる。なおP5から江戸時代の土師器・皿（第33図37）1点が出土しているが、これについては近世遺構の重複と理解している。

S A-9（第23図）

C-2区で検出された4間の柵（塀）であり、途中で直角に屈曲している。S B-30の西に沿って設けられており、これに付随する目隠し塀的なものと思われる。主軸方位はN-18°-Eを測る。規模は全長6.55m、南北2.9m、東西3.65mを測り、柱間は南北で1.4m、東西で1.8mである。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.25～0.3m、深さは0.1～0.3mであまり一定していない。柱穴の埋土は暗茶褐色砂質土・暗灰褐色砂質土である。出土遺物には近世陶器片などがあり、時期はS B-30と同時期の16世紀後葉以降と考えられる。

S A-10（第22図）

B-1・2区で検出された5間の柵（塀）である。主軸方位はN-40°-Eを測る。規模は7.3mを測り、柱間は1.4～1.5mである。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.25～0.3m、深さは0.25～0.6mで西へ行くほど深くなっている。柱穴の埋土は茶褐色砂質土・暗茶褐色砂質土である。出土遺物には中世陶器片などがあり、時期は主軸方位なども考慮して13世紀中葉～後葉と考えられる。

S A-11（第23図）

D-2・3区で検出された4間の柵（塀）である。主軸方位はN-32°-Eを測る。規模は6.0mを測り、柱間はほぼ1.4m程とほぼ均一だが、P4～P5間は1.75mである。柱穴は平面形が円形・楕円

形を呈し、径0.35m、深さは0.2～0.8mである。柱穴の埋土は茶褐色砂質土・暗茶褐色砂質土である。出土遺物には中世陶器片などがあり、時期は主軸方位なども考慮して13世紀後葉と考えられる。

4. 溝 (第26・27図)

溝は5条が確認されている。これらは鎌倉時代後半、および江戸時代のもので、多くが屋敷地などの区画溝と考えられる。これらの中には数回の掘り直しが行われ、長期の使用が想定されるものもある。なお、ここでは溝として明らかなもののみを対象としており、溝状の長い落ち込みについては後述する土壌に含めた。

SD-1 (第26図)

D-1・2区で検出され、北西～南東に向かって延びる溝である。一部は調査区外に続いている。また北西端は1段深く掘り込まれるほか、東側に拡張部分が見られる。検出長は10.0m、幅は平均0.9m、深さ0.15mほどで、断面形は浅いU字状を呈する。底のレベルはほぼ一定で、流水は意識していないようである。埋土は暗茶褐色混貝土で、東側拡張部分についても同様である。出土遺物には瀬戸美濃窯産の碗(第33図38)、土師器の鍋(第33図39)などがあり、遺構の時期は18世紀中葉と考えられる。

南東端はSD-2に接続しており、SD-1・2は同時存在した遺構といえる。

SD-2 (第27図)

調査区を北東～南西にかけ貫通するかたちで検出された。AA・A区は1条のみ(以下単条部)であるが、B区～D区にかけては掘り直しによると考えられる2条以上の溝の複合(以下複条部)からなる。断面観察によれば、単条部および複条部西側は同一の溝であり、複条部東側の溝の埋土を掘り込んでいた。またB-1区において溝は西側に拡張し、浅く平坦な張り出し部を形成している。SD-2の検出長は38.5m、幅、深さは単条部で0.6m、0.3m、複条部で2.05m、0.25・0.4mほどである。断面形は台形状を呈する。底のレベルは地形に従って北が低く、南から北に向け水を流す排水溝としても使用されたようである。埋土は暗茶褐色砂質土・暗灰褐色砂質土である。出土遺物には瀬戸美濃窯産摺鉢(第33図41・42・44)、肥前系陶器の鉢(第33図43)、土師器の皿(第33図45～49)・鍋(第33図50～52)、キセルの吸口(第33図53)、砥石(第33図55)などがあり、遺構の時期は17世紀後葉～18世紀中葉と考えられる。

SD-3 (第27図)

D-2・3区で検出され、北西～南東に向かって延びる溝である。1度掘り直しが行われており、検出長は5.7m、幅は1.2～1.45m、深さは0.25～0.35mほどで、断面形はU字状を呈する。底のレベルは北西端が南東端に比べ0.1mほど低く、東から西に向け排水するよう意図されている。埋土は最初の溝が濁茶褐色砂質土、掘り直し後の溝が暗灰褐色砂質土である。出土遺物には瀬戸美濃窯産の摺鉢

(第33図56)、水注(第33図57)、磁器の碗(第33図59)、土師器の皿(第33図60)・鍋(第33図61)などがあり、溝の時期は江戸時代と考えられる。

なお北東端はSD-2に接続しており、SD-2・3は同時存在した遺構といえる。

SD-4 (第27図)

D-2区で検出され、北西～南東に向かって延びる溝である。検出長は4.5m、幅は0.45～0.6m、深さは0.05～0.1mほどである。断面形は浅いU字状を呈する。底のレベルはほぼ一定で、流水に対する意図は見受けられない。埋土は暗茶褐色混貝土である。出土遺物には近世陶器片などがあり、また主軸方向がSD-1・3と同じことから、溝の時期はこれらと同じ江戸時代と考えられる。

なお北東端は後に掘り込まれたD-1区SK-1に切られており、SD-2との関係は不明である。また、位置や埋土の状況からSD-1の一部だった可能性がある。

SD-5 (第27図・第31図)

D-2区で検出され、北西～南東に向かって延びる溝である。検出長は16.7m、幅は0.8～1.6m、深さは0.2～0.3mほどである。断面形は浅いU字状を呈する。底のレベルはほぼ一定で、排水の意図は見受けられない。埋土には茶褐色砂質土・暗茶褐色砂質土・暗灰褐色砂質土があるが、主に暗茶褐色砂質土である。

溝には中世陶器の碗(第34図64～72)・片口碗(第34図73)・片口鉢(第34図74)、白磁口禿皿(第34図75)、伊勢型鍋(第34図76)などが投棄されており、いずれも溝の底から浮いた状態で出土している。出土遺物から溝の時期は12世紀後葉～13世紀後葉と考えられる。

なお、中世陶器と混在する形で用途不明の円礫(川原石)多数が出土した。これらの岩石種は花崗岩質片麻岩、安山岩、結晶片岩など、すべて豊川の河原で採取される(岩石構成は豊川右岸的な様相が強い)ものである。しかし、当地が柳生川河口部に位置する(柳生川上流部の山地の構成岩石はチャート)ことから、豊川からの搬入は想定しにくく、むしろ調査区の所在地は豊川により形成された河岸段丘面上であることから、付近の礫層の路頭でこのような円礫を採取したものと考えたい(註2)。ただしこの円礫の用途は不明で、加工痕、被熱痕も見られない。

5. 土壌 (第24～26図)

土壌は調査区全域で検出されている。これらの時期は他の遺構同様鎌倉時代後半から江戸時代が大半であり、その性格は建物位置を認定できなかった柱穴を始め、大型の廃棄土壌、性格不明の土壌など多様である。ここではこれらの内遺物がまとまって出土したもの、および比較的規模の大きなものを対象に説明する。

AA-2区SK-2 (第24図)

AA-1・2区で検出された、北東～南西に延びる溝状の土壌である。規模は長さ4.7m、幅0.6～

0.8m、深さ0.1mを測り、非常に浅い。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には中世陶器片があり、遺構の時期は鎌倉時代と考えられる。

なお、当遺構と後述するA-1区SK-10・A-2区SK-30はSB-7と重なるように検出されており、土壌の向きがSB-7の主軸に近似することから、それとのなんらかの関係が想定される。

A-1区SK-10 (第24図)

A-1区で検出された、南北に延びる溝状の土壌である。規模は長さ3.6m、幅0.55~1.0m、深さ0.05mを測り、非常に浅い。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には中世陶器の小皿(第34図80)などがあり、遺構の時期は13世紀後葉と考えられる。

A-1区SK-11 (第24図)

A-1区で検出された、3つの楕円形の土壌を連続させ、その間を掘りつなげたような土壌である。規模は長さ2.7m、幅は0.45~0.9m、深さは最大で0.45mである。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には条痕文土器片があり、遺構の時期は縄文時代晩期、紀元前3~2世紀頃と考えられる。

A-1区SK-20 (第24図・第29図)

A-1区で検出された、南北に延びる溝状の土壌である。規模は長さ3.05m、幅0.85~1.0m、深さ0.08mを測り、非常に浅い。埋土は暗茶褐色砂質土である。遺物には中世陶器の碗(第34図82)・片口鉢(第34図83)などがあり、いずれも底から0.05~0.1m程度浮いた状態で出土した。遺構の時期は遺物から13~15世紀と考えられる。

A-1区SK-36 (第24図)

A-1区で検出された土壌である。平面形は方形気味の円形で、中央は排水管によって攪乱を受けている。規模は0.85m×0.8m、深さ最大0.4mを測り、底のレベルは攪乱を挟んで0.15mほど異なる。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物は無く、遺構の時期は不明である。

A-2区SK-30 (第24図)

A-2区で検出された、南北に延びる溝状の土壌である。規模は長さ2.4m、幅0.8m、深さ0.1mを測り、非常に浅い。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には中世陶器片などがあり、遺構の時期は鎌倉時代と考えられる。

A-2区SK-131・132 (第24図・第31図)

A-2区で検出された土壌で、中央は排水管によって攪乱を受けている。調査当初は攪乱を挟んだ別遺構と考えそれぞれに遺構名を付けたが、後に同一遺構と判明したものである。平面形は楕円形で、規模は長さ1.2m、幅0.8m、深さ最大0.3mを測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。遺物として、口縁の約1/3が打ち欠かれた中世陶器の碗(第35図90)が、伏せた状態で出土しており、遺構の時期は

遺物から13世紀中葉と考えられる。

A-2区SK-135・140 (第24図)

A-2区で検出された土壙である。当初は柱穴を挟んだ南北を別の遺構と考え、それぞれに遺構名を付けたが、後に同一遺構と判明したものである。平面形は楕円形で、規模は長さ1.7m、幅0.7~1.0m、深さ0.15mを測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には中世陶器の碗(第35図92)・小皿(第35図93)などがあり、また当土壙は切り合い関係からSD-5よりも時代が新しいといえることから、遺構の時期は13世紀後葉と考えられる。

A-2区SK-149 (第24図)

A-2区で検出された土壙で、北側はSD-5と重複している。平面形は隅丸方形で、規模は0.9m×0.6m以上、深さ0.1mを測る浅いものである。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には中世土師器片が出土しており、遺構の時期は室町時代と考えられる。

A-2区SK-188 (第24図)

A-2区で検出された土壙である。平面形は隅丸の長方形を呈し、規模は長さ1.5m、幅0.6m、深さ0.1mを測る浅いものである。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には中世土師器片があり、遺構の時期は鎌倉時代と考えられる。

B-1区SK-1 (第24図)

B-1区で検出された土壙である。平面形は楕円形を呈し、規模は長さ1.1m、幅0.7m、深さ0.15~0.3mを測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物は無く、遺構の時期は不明である。

B-1区SK-3 (第24図)

B-1区で検出された土壙である。平面形は円形を呈し、規模は1.6m×1.45m、深さ最大0.25mを測る。北西側と南東の底に0.1~0.2m程度の高低差が見られる。埋土は暗茶褐色砂質土で、焼土が混じる。出土遺物は無く、遺構の時期は不明である。

B-1区SK-40 (第29図)

B-1区で検出された土壙である。平面形は楕円形を呈し、規模は0.45m×0.35m、深さ0.05mを測る非常に浅いものである。埋土は暗灰色砂質土である。遺物として土師器・皿6点(第35図101~106)、銭貨1点(第35図107)が集積された状態で出土した。遺構は地山面よりも高い位置から掘り込まれているため、遺物自体は土壙よりも高い位置に浮いた状態で出土している。遺構の時期は室町時代と考えられる。

当遺構は明らかに柱穴とは異なるものである。また土師器の皿はほぼ完形品が埋められていたことから、室町~戦国時代などによく認められる、儀式・饗宴などハレの場で使用した土師器の皿を一括

廃棄する行為と同意義のものと考えられる。当遺構の場合は土師器の皿と共に、銭貨1点を伴うことから、屋敷を設ける際の地鎮祭の実施が想定される。

B-1区SK-66 (第24図)

B-1区で検出された溝状の土壌で、西端をSD-2に切られている。規模は長さ0.95m以上、幅0.55m、深さ0.15mを測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には土師器の伊勢型鍋(第35図111)・鍋(第35図112)、土錘(第35図113)などがあり、遺構の時期は13世紀前葉と考えられる。

B-1区SK-78 (第25図)

B-1区で検出された溝状の土壌で、西端は調査区外に続いている。規模は長さ4.5m、幅0.8~1.1m、深さ0.08mを測る非常に浅いものである。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には須恵器の壺(第36図117・118)があり、遺構の時期は古墳時代(?)と考えられる。

B-1区SK-79 (第25図)

B-1区で検出された溝状の土壌で、途中直角に折れ曲がり、南端はSD-2の張り出し部によって切られている。規模は長さ5.0m以上、幅0.6~1.0m、深さ0.05mを測る非常に浅いものである。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物は無い。当遺構は主軸が中世の掘立柱建物に沿っており、当時の建物に伴う雨落ち溝などの可能性がある。従って遺構の時期は鎌倉時代と考えられる。

B-2区SK-41 (第24図・第29図)

B-2区で検出された土壌である。多数の柱穴が複合しているため実際の形態は不明瞭だが、深さは残存部で0.05mを測り、非常に浅いものである。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には中世陶器の碗(第36図120)などがあり、遺構の時期は13世紀後葉と考えられる。

B-2区SK-53 (第25図)

B-2区で検出された溝状の土壌である。規模は長さ5.2m、幅0.65~0.7m、深さ0.1mを測り、非常に浅い。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には中世陶器の碗などがあり、遺構の時期は13世紀後半~14世紀前半と考えられる。

B-2区SK-61 (第24図)

B-2区で検出された土壌で、平面形は略方形を呈し、規模は1.45m×1.4m、深さ0.25mを測る。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。

B-2区SK-128・188 (第25図)

B-2区で検出された土壌で、西端はSD-2に切られている。調査当初は別遺構の複合と考え遺構名を付けたが、その後に同一遺構と判明したものである。規模は長さ3.3m以上、幅0.65m、深さ0.

5mを測る非常に浅いものである。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物は無く、遺構の時期は不明である。

B-2区SK-132 (第24図)

B-2区で検出された土壌で、西端はSD-2に切られている。規模は長さ2.0m以上、幅1.05m、深さ0.2mを測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物は無く、遺構の時期は不明である。

B-2区SK-156 (第28図)

B-2区で検出された土壌で、西端はSD-2に切られている。平面形は楕円形を呈し、規模は長さ0.6m以上、幅0.4m、深さ0.25mを測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。遺物には仏供(第36図129)が横転した状態で出土しており、遺構の時期は13世紀後葉と考えられる。

B-2区SK-160 (第31図)

B-2区で検出された土壌である。柱穴と考えられるが建物を特定できなかった。規模は他の遺構との切り合いが激しいので正確には不明だが、長さ0.55m、深さ0.45m程度を測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には中世陶器の碗(第36図130)などがあり、遺構の時期は13世紀中葉と考えられる。

B-3区SK-30 (第25図・第30図)

B-2・3区で検出された大型の廃棄土壌である。平面形は長方形気味だが北西側が不整形で、規模は長さ6.85m、幅3.4~4.95m、深さ0.3~0.45mを測る。

埋土の状況は、断面a-a'によれば、南東側から流れ込むようにして土が堆積しており、南東から廃棄が実施されたと想定される。堆積土層には混土貝層・破碎貝層・混貝土層・砂質土層などがあり、それぞれ互層をなしている。混土貝層・破碎貝層の存在は、当時の異なった貝の利用法の表れと言い換えることができる。なお、7. 茶褐色混土貝層および14. 暗茶褐色破碎貝層については、貝の種類、組成などを探ると共に、魚類など貝以外の生物遺体の検出を意図したブロックサンプリングを実施しており、その詳細については後述する。混貝土層、砂質土層については粘性が認められる部分があることから、人為的な埋め戻し土と考えるよりも、むしろ有機物の廃棄痕跡と考えられる。なお土壌北西側の埋土はほぼ2. 暗灰褐色砂質土層の1層からなっており、複雑な層をなした土壌南東側を切るようにして堆積している。従ってこの部分については再掘削の実施が想定され、これは土壌北西部分が不整形である点や、出土遺物に北西側と南東側とで若干の時期差が認められる点などからも裏付けられる。

出土遺物には、中世陶器の碗(第37図142~152)・小皿(第37図153・154)・片口鉢(第37図156)、甕(第37図157~161)、古瀬戸の折縁深皿(第32図3、第38図163)、青磁蓮弁文碗(第38図169)、伊勢型鍋(第38図172・173)、土師器の鍋(第38図174)、輸入銭(第38図170・171)などがある。ことに古瀬戸の折縁深皿(第32図3)はSB-2のP41から同一個体の破片が出土しており、SB-2

と当遺構の同時期性が証明される。遺物から想定される遺構の時期は、13世紀中葉～14世紀前葉である。またこれらとは別に、円礫数点や全面が被熱し赤化した石1点が出土している。

なお、1. 茶褐色砂質土層は当遺構上面に設けられた別の遺構の埋土で、瀬戸美濃窯産の筒形香炉(第38図168)が出土していることから、15世紀のものと考えられる。この他にも古瀬戸後期に属すると考えられる遺物がいくつか出土しているがその絶対量は少なく、当土層の継続時期を15世紀まで下げることができない。恐らく検出できなかった後世の遺構などに伴うものであろう。

B-3区SK-37 (第29図)

B-3区で検出された土層で、柱穴と考えられるが建物は特定出来なかった。平面形は円形を呈し、規模は0.3m×0.3m、深さ0.2mを測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には瀬戸美濃窯産の陶器・内禿皿(第38図175)があり、遺構の時期は16世紀後葉と考えられる。

B-3区SK-41 (第26図・第29図)

B-3区で検出された土層で、平面形は舌状を呈し、規模は長さ1.7m、幅1.0～1.3m、深さ0.1mを測る浅いものである。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には中世陶器の碗(第38図176)などがあり、遺構の時期は13世紀後葉と考えられる。

C-1区SK-22 (第25図)

C-1区で検出された土層で、平面形は長方形を呈し、規模は長さ2.95m、幅1.6m、深さ0.15～0.25mを測るものである。埋土は暗茶褐色混貝土である。出土遺物には土師器の鍋(第38図178)などがあり、遺構の時期は江戸時代と考えられる。

C-1区SK-30 (第25図)

C-1区で検出された土層で、平面形は長楕円形を呈し、南東端はSD-2に切られている。規模は長さ1.95m以上、幅1.15m、深さ0.2～0.4mを測るものである。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物無いが、C-1区SK-22と性格が近似しており遺構の時期は江戸時代と考えられる。

C-1区SK-43 (第26図)

C-1区で検出された土層で、平面形は円形を呈する。規模は1.0m×0.9m、深さ最大0.25mを測り、南側は1段深くなる。埋土は暗茶褐色砂質土で焼土を多く含む。

当例と同様に焼土を含む土層として、近在するC-2区SK-51、D-1区SK-5がある。これらはいずれも古墳～奈良時代、おそらく古墳時代の遺構と考えられるが、内部からの遺物は乏しく、その用途は不明である。

当例に出土遺物はないが、以上の理由から遺構の時期は古墳～奈良時代と考えられる。

C-2区SK-9 (第26図)

C-2区で検出された土壌で、SD-2と重複しているため上部は失われている。平面形は円形あるいは方形を呈し、規模は1.0m×1.0m、深さ0.35m以上を測る。埋土は茶褐色砂質土で焼土を多く含む。出土遺物には土師器の甕(第38図181)などがあり、遺構の時期は古墳～奈良時代と考えられる。

C-2区SK-51 (第26図)

C-2区で検出された土壌である。平面形はほぼ円形を呈し、規模は0.95m×0.8m、深さ0.2mを測る。埋土は茶褐色砂質土で焼土を多く含む。出土遺物には土師器の甕(第38図184)などがあり、遺物の特徴から遺構の時期は古墳時代と考えられる。

C-2区SK-118 (第26図)

C-2区で検出された溝状の土壌である。規模は長さ2.25m、幅0.8m、深さ0.25～0.4mを測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には中世陶器の碗などがあり、遺構の時期は13世紀と考えられる。

D-1区SK-1 (第26図)

D-1区で検出された土壌で、平面形は逆三角形を呈する。中央は近・現代の攪乱を受けている。中央北寄りに1石が置かれているが、その用途は不明である。規模は長さ2.2m、幅1.2m、深さ0.1～0.2mを測る。埋土は暗茶褐色砂質土で焼土を含む。出土遺物は無く、遺構の時期は不明である。

D-2区SK-1 (第26図・第29図)

D-2区で検出された貝殻廃棄土壌である。南・東側をSD-1・2に切られているため、平面形は現状で四半円形を呈する。規模は2.75m以上×1.85m以上、深さは最大0.2mを測り、北側は1段深くテラス状を成している。埋土は茶褐色混貝土である。遺物には中世陶器の碗(第39図185・186)・小皿(第39図187・188)などがあり、いずれも底からわずかに浮いた状態で出土した。遺構の時期は遺物から13世紀前葉～後葉と考えられる。

D-2区SK-2 (第26図)

C-2区、D-2区で検出された土壌である。平面形は長方形を呈し、南西側をSD-3に切られている。規模は長さ4.1m以上、幅2.3m、深さ0.35mを測る。

埋土は基本的に3層からなる。最上層の1・2、暗茶褐色混貝土層(以下Ⅰ層)、中間層の3、茶褐色砂礫層(以下Ⅱ層)、最下層の6、赤茶褐色砂質土層(以下Ⅲ層)である。Ⅲ層は土壌の床・壁面に貼られた土だが、軟質で簡単にはがすことができる。これをはがすと礫を多量に含んだ地山が露出するため、Ⅲ層は化粧土と理解している。遺物は全く含まれない。Ⅱ層は礫を多く含み、人為的な埋め戻し土と考えられる。遺物は僅かに含まれる。Ⅰ層は貝殻を含む有機物を投棄した痕跡と考えられ、恐らく当遺構を埋め戻した際に残った窪みをゴミの廃棄に利用したものと考えられる。ここから

はまとまった量の遺物が出土している。

出土遺物には染付磁器の蓋（第39図189）、常滑窯産の壺（第39図190）、寛永通寶（第39図191）などがあり、遺構の時期は18～19世紀と考えられる。

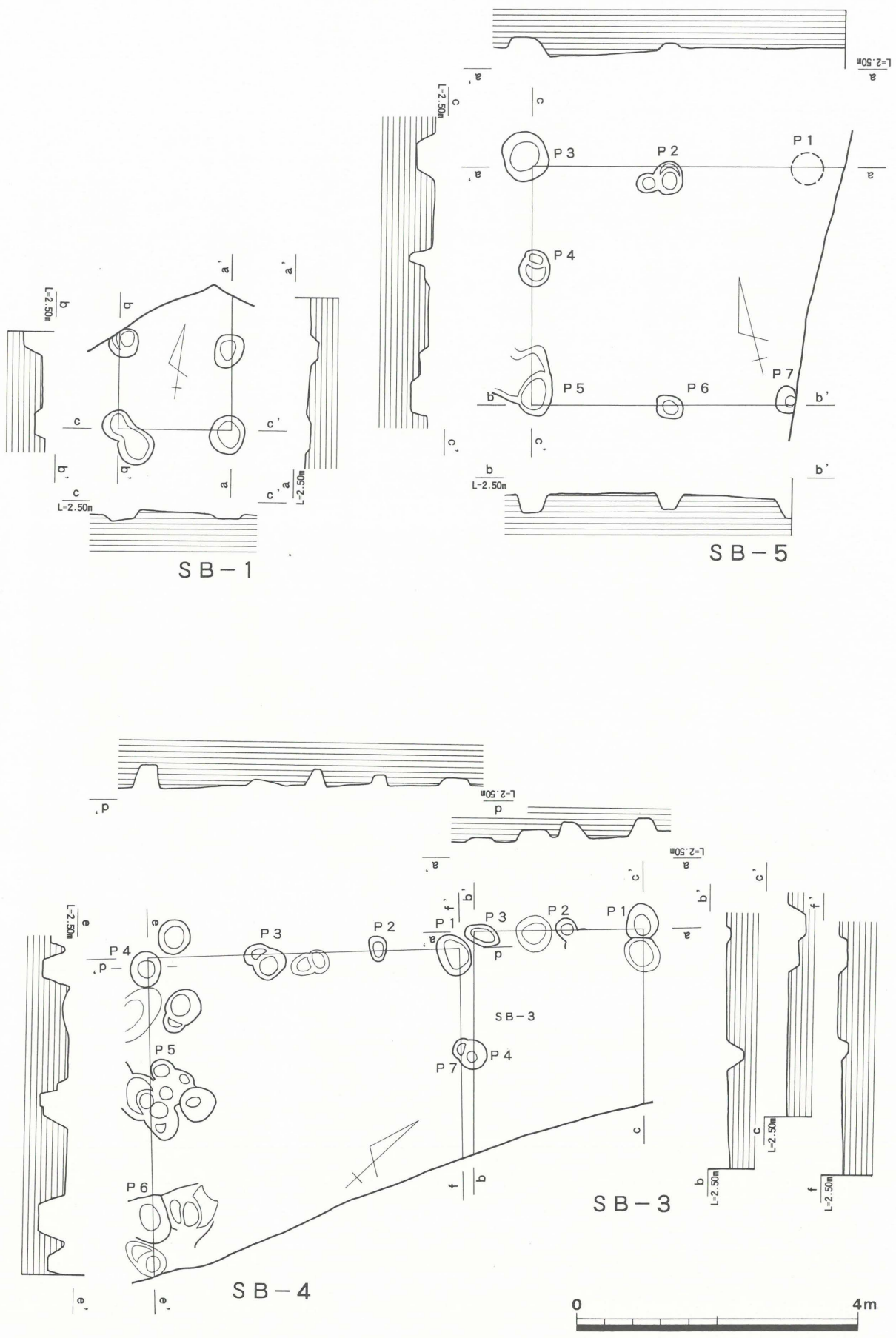
当土壌の性格について当初作業場、あるいは地下室などの遺構と考えたが、柱穴を伴わないことから上屋の存在が確言できず、その判断は困難である。一方で土層図に見られる4. 暗灰褐色砂質土層は水溜りの底に溜る泥状のもので、当土壌が滞水状態にあった可能性を示していることから、上屋の有無が不明である点を考慮して、水溜遺構と考える。

D-3区SK-2（第26図）

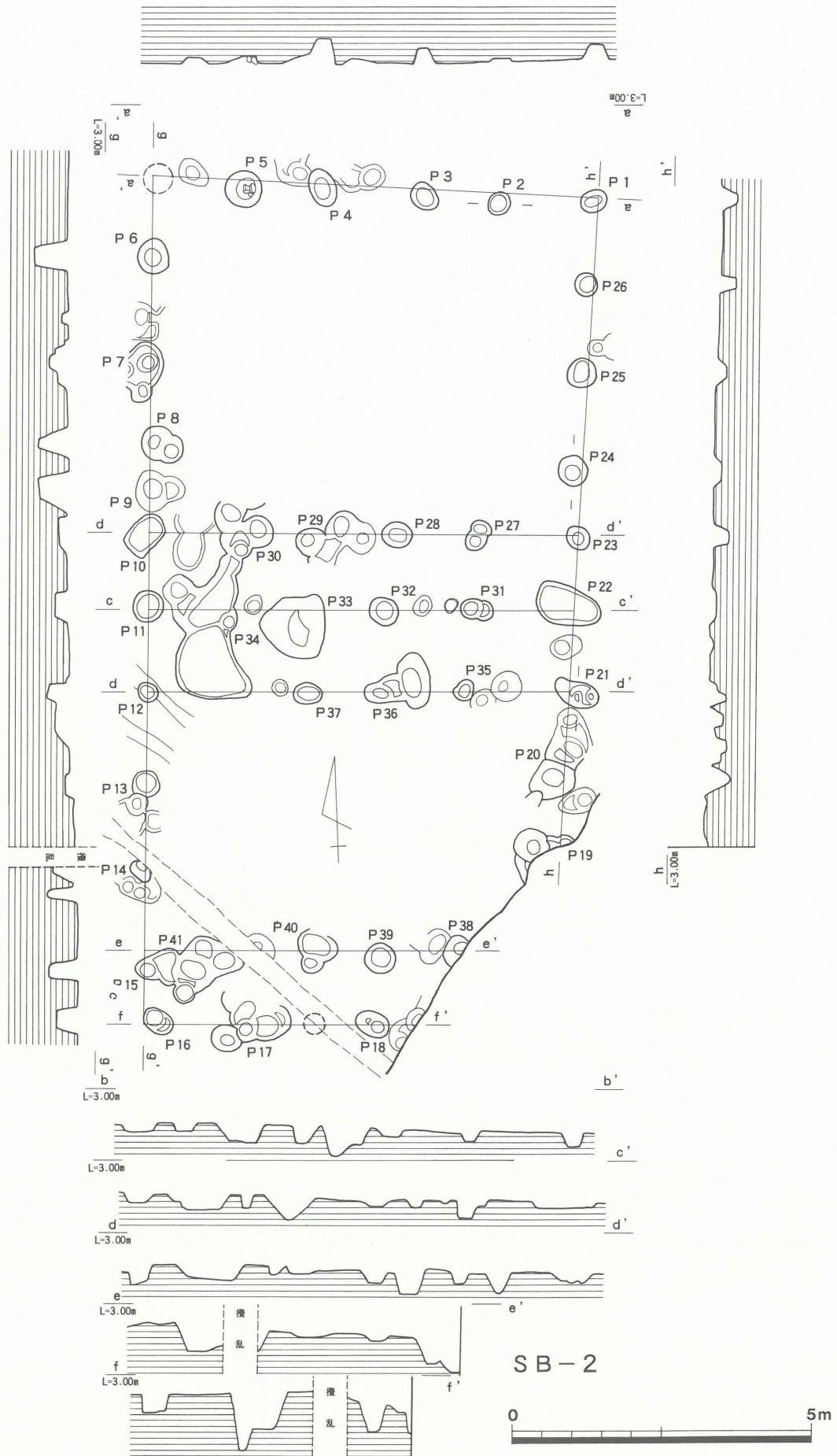
D-3区の調査区南端で検出された土壌で、平面形は不明だが、北西から南東にかけて長く延びることから溝の一部となる可能性がある。規模は長さ4.8m以上、検出幅最大0.7m、深さ最大0.2mを測る。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物には近世陶器片などがあり、遺構の時期は江戸時代と考えられる。

注1 地主の伊藤文夫氏から御教示を得た。

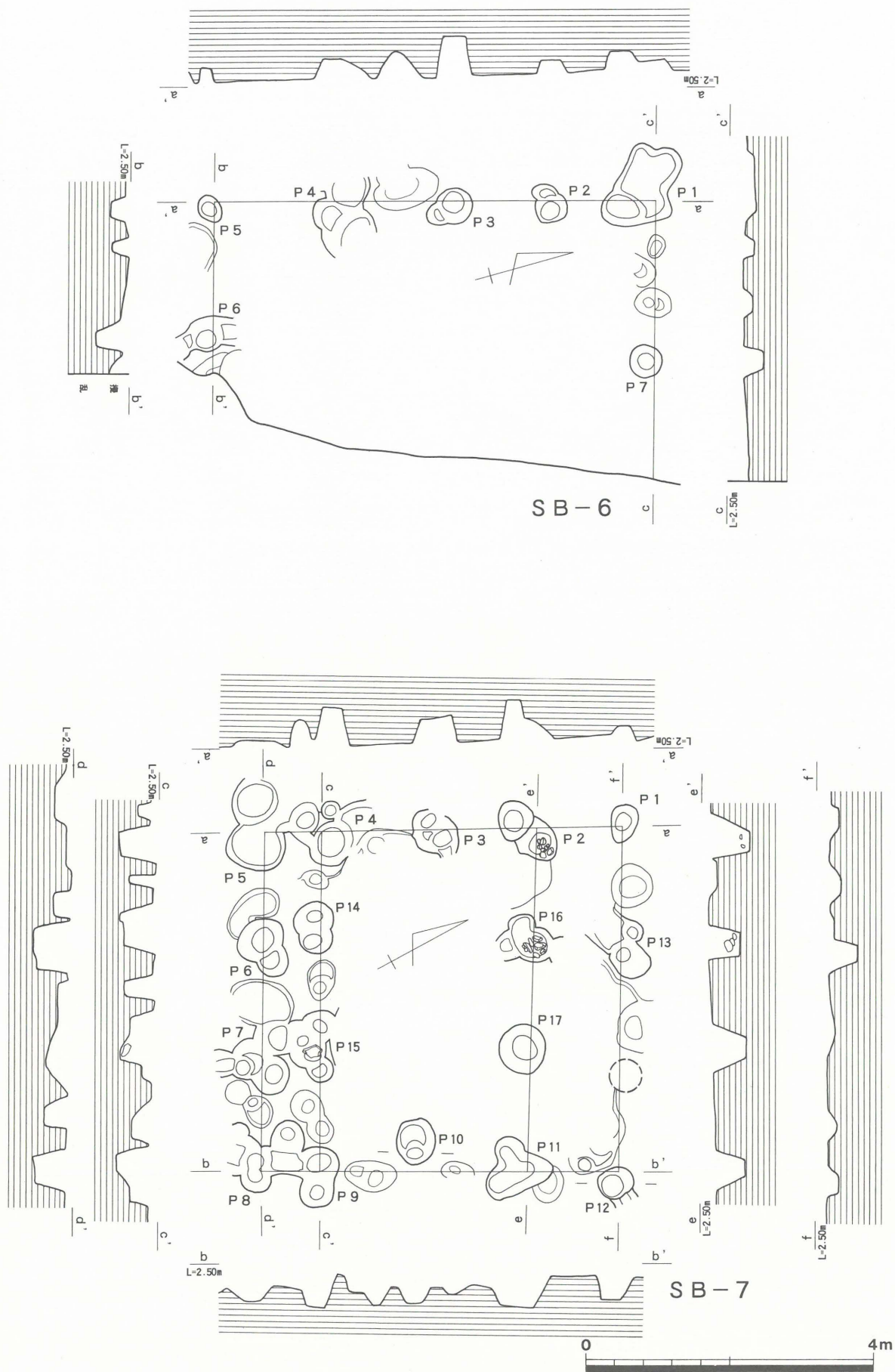
注2 石材鑑定、及び採集場所については、豊橋市自然史博物館の家田健吾氏からご教示を得た。



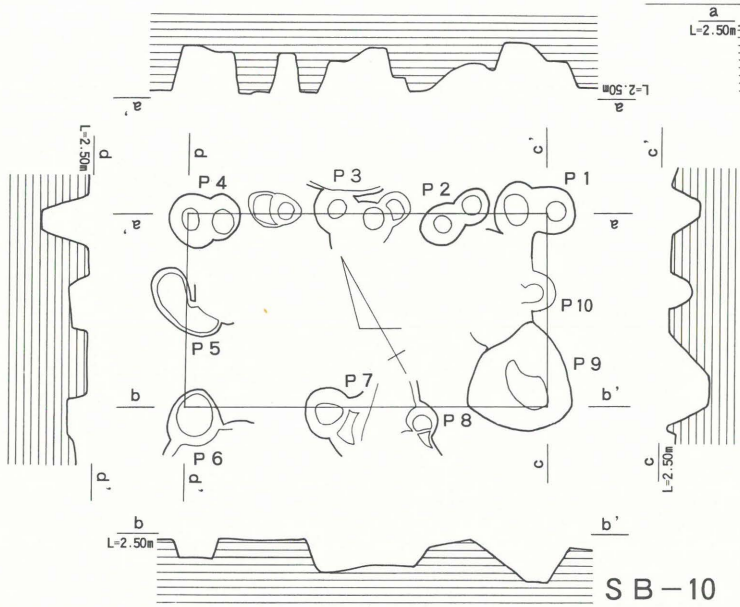
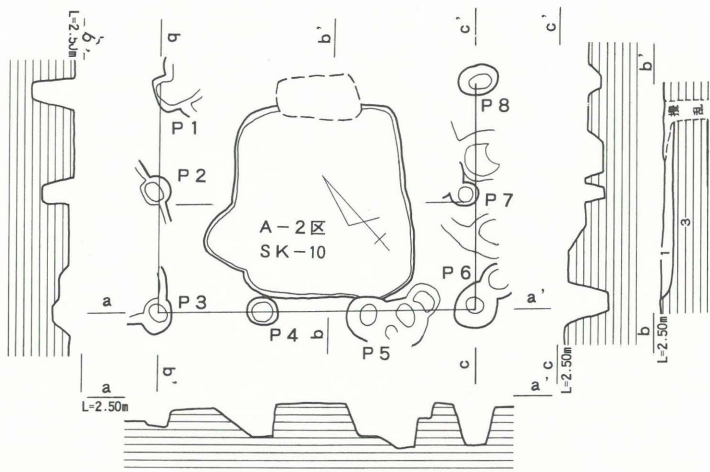
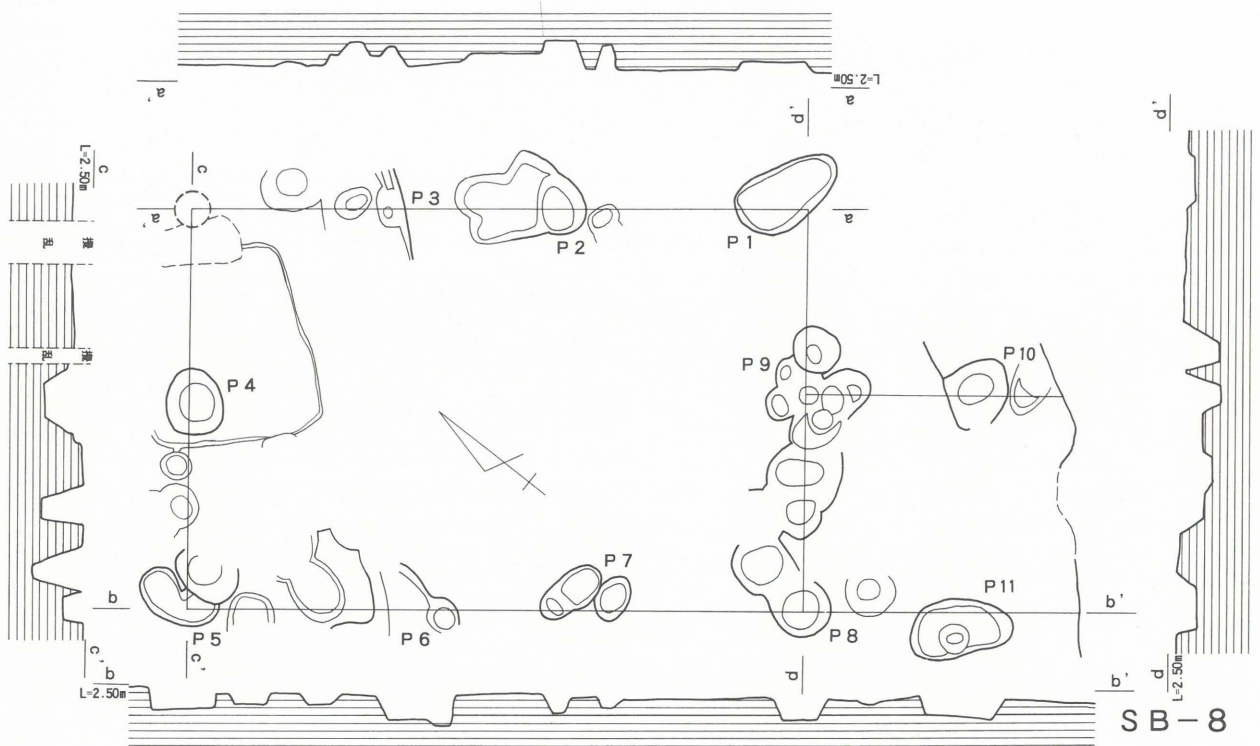
第9図 掘立柱建物実測図-1 (1/80)



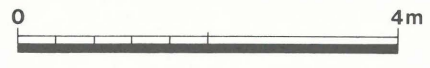
第10图 掘立柱建物実測图-2 (1/100)



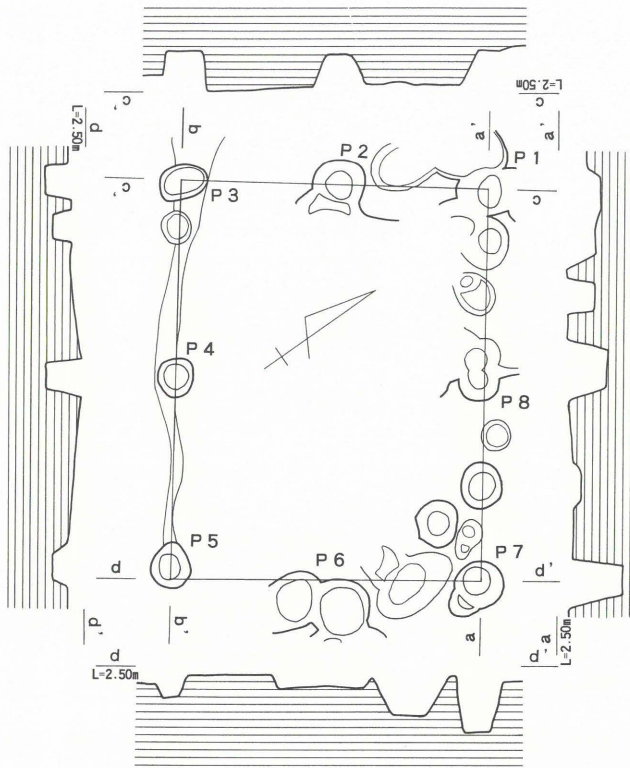
第11図 掘立柱建物実測図-3 (1/80)



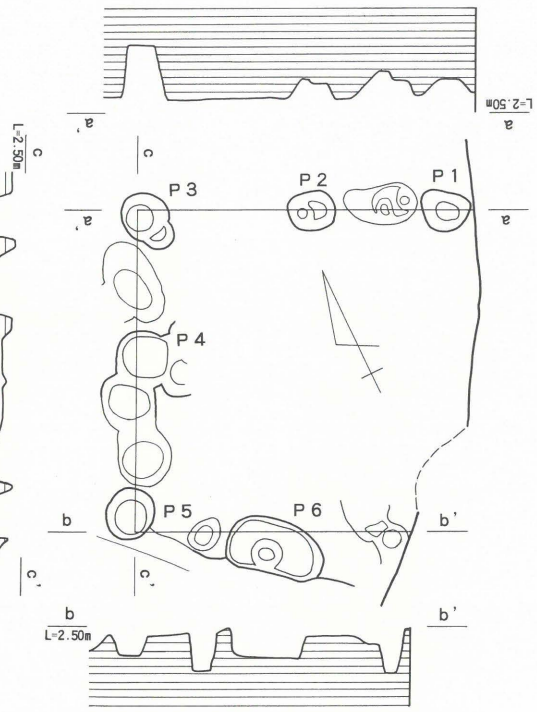
1. 暗茶褐色砂質土層① (白色粒を含む)
2. 暗茶褐色砂質土層② (柱穴埋土)
3. 茶褐色砂礫層 (地山)



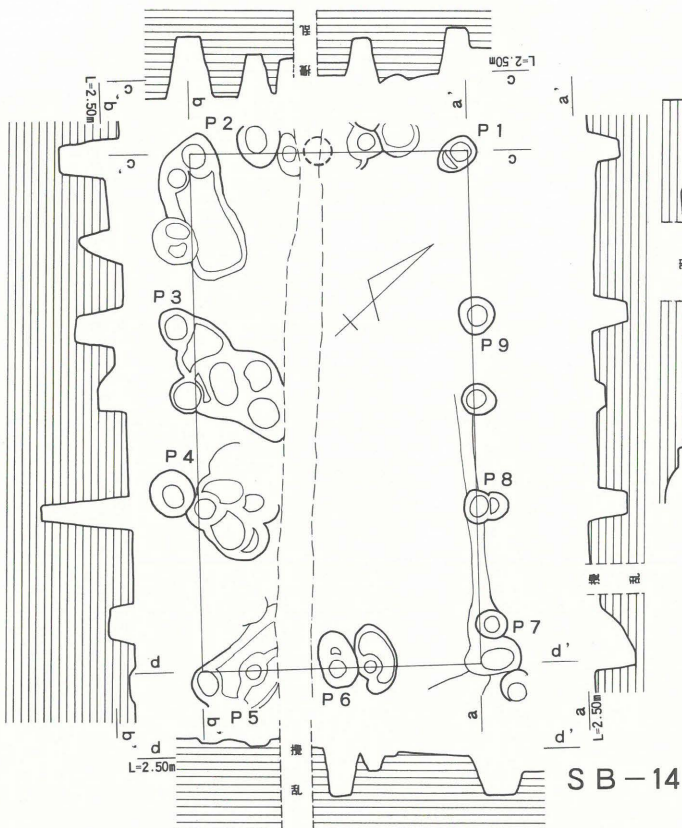
第12図 掘立柱建物実測図-4 (1/80)



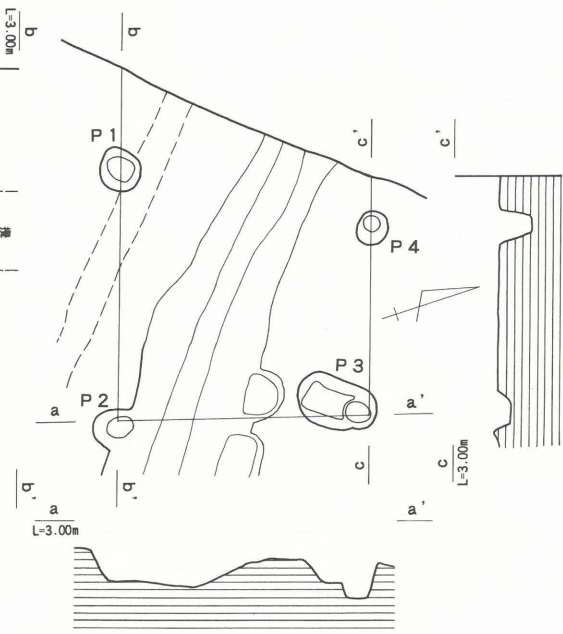
SB-11



SB-12



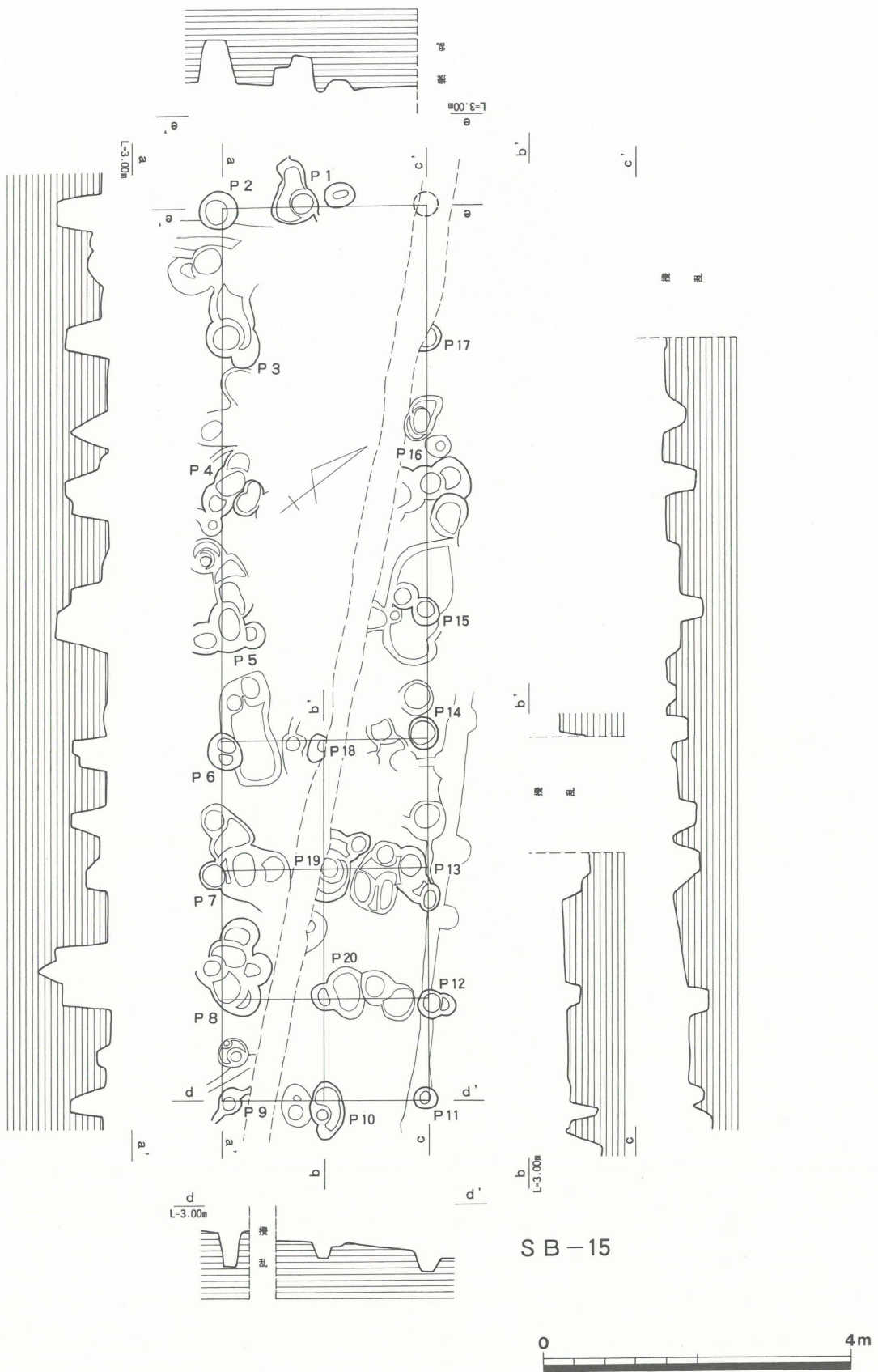
SB-14



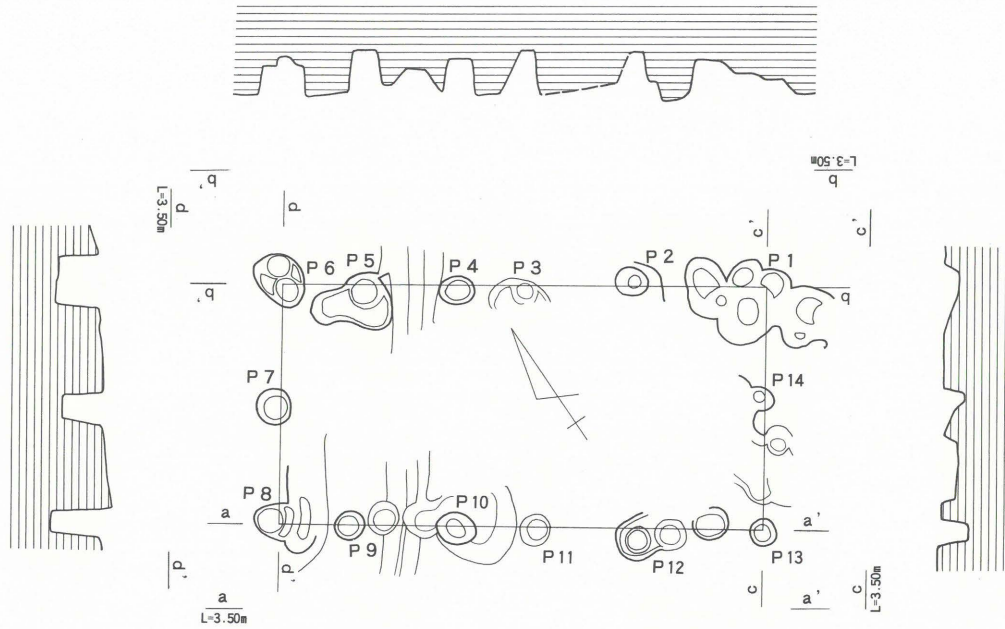
SB-13



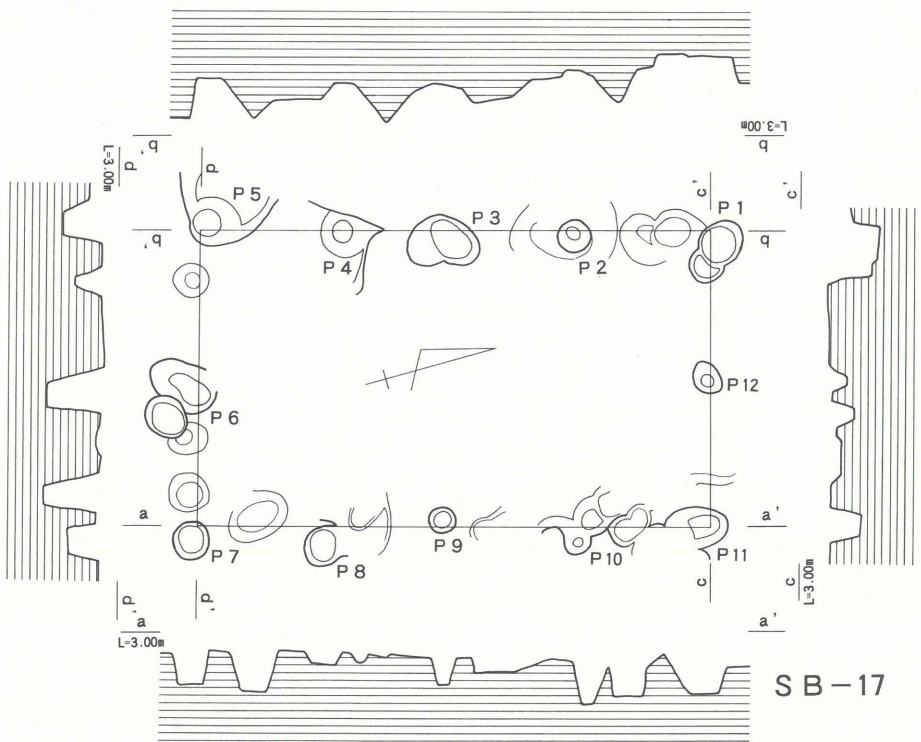
第13図 掘立柱建物実測図-5 (1/80)



第14図 掘立柱建物実測図-6 (1/80)



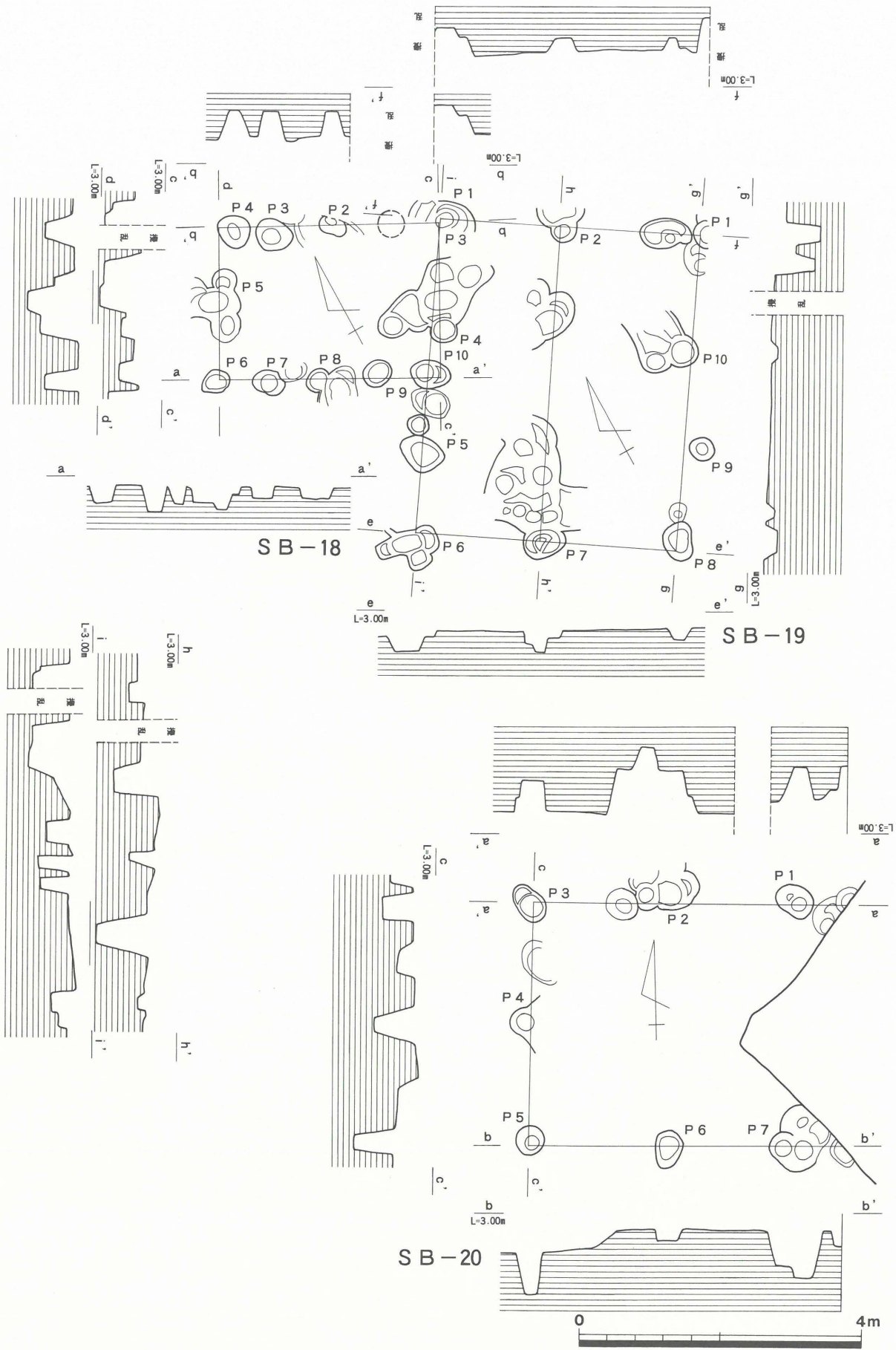
SB-16



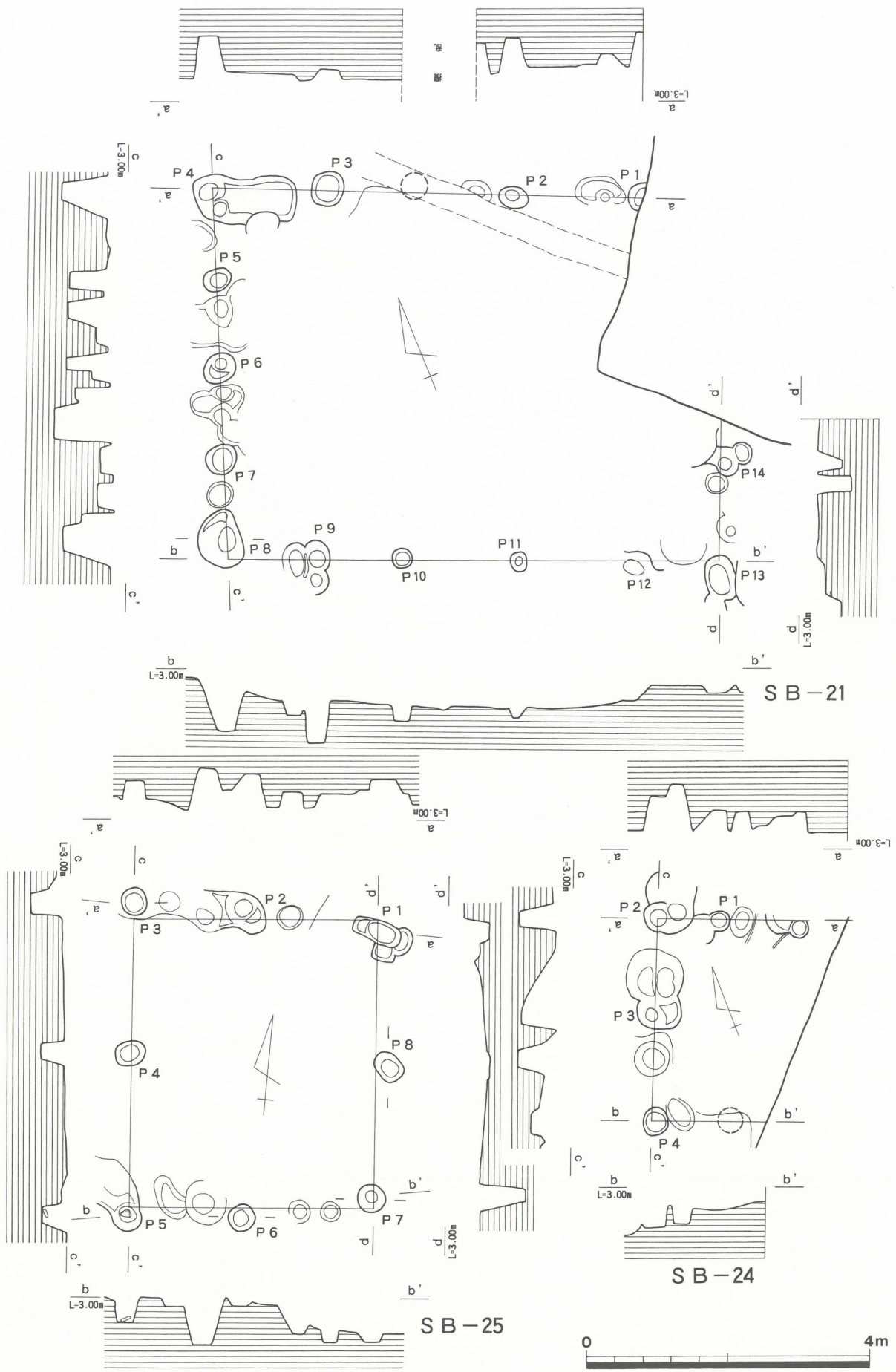
SB-17



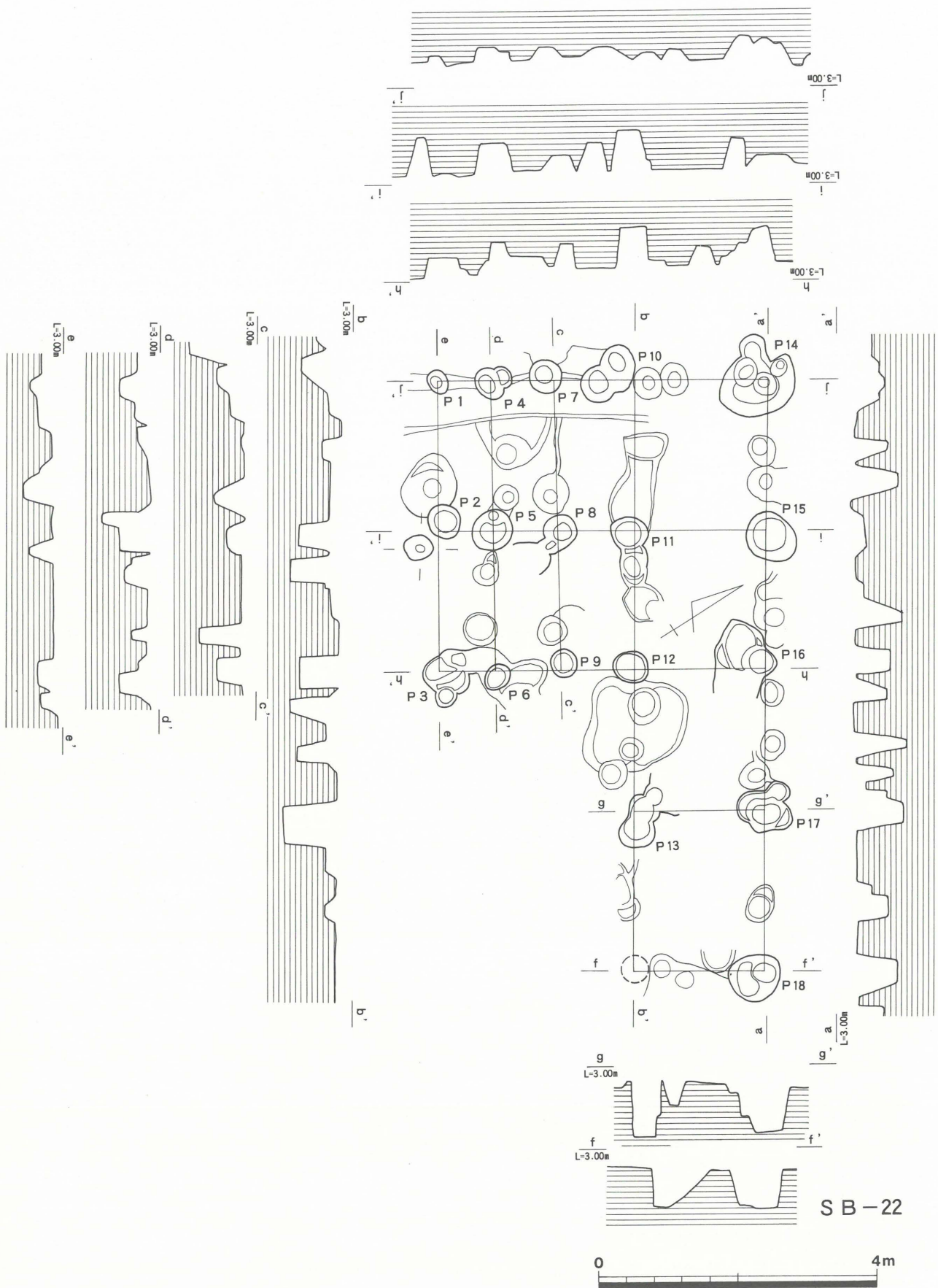
第15图 掘立柱建物実測図一7 (1/80)



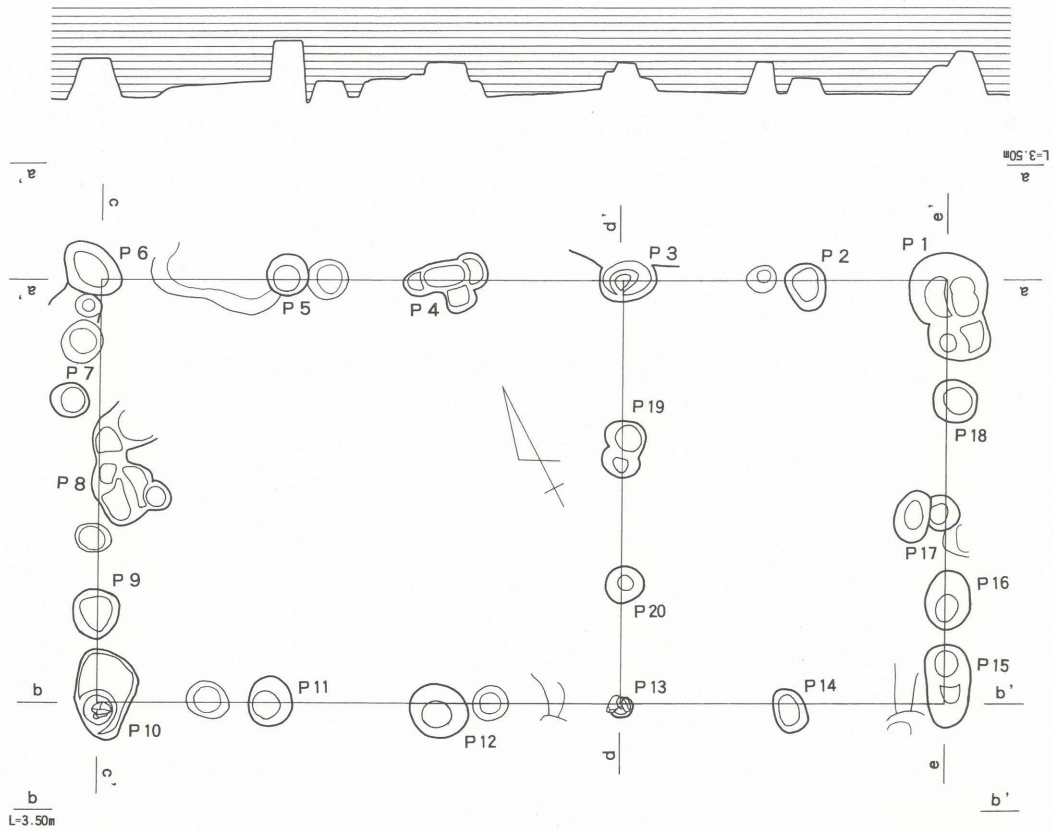
第16图 掘立柱建物実測图-8 (1/80)



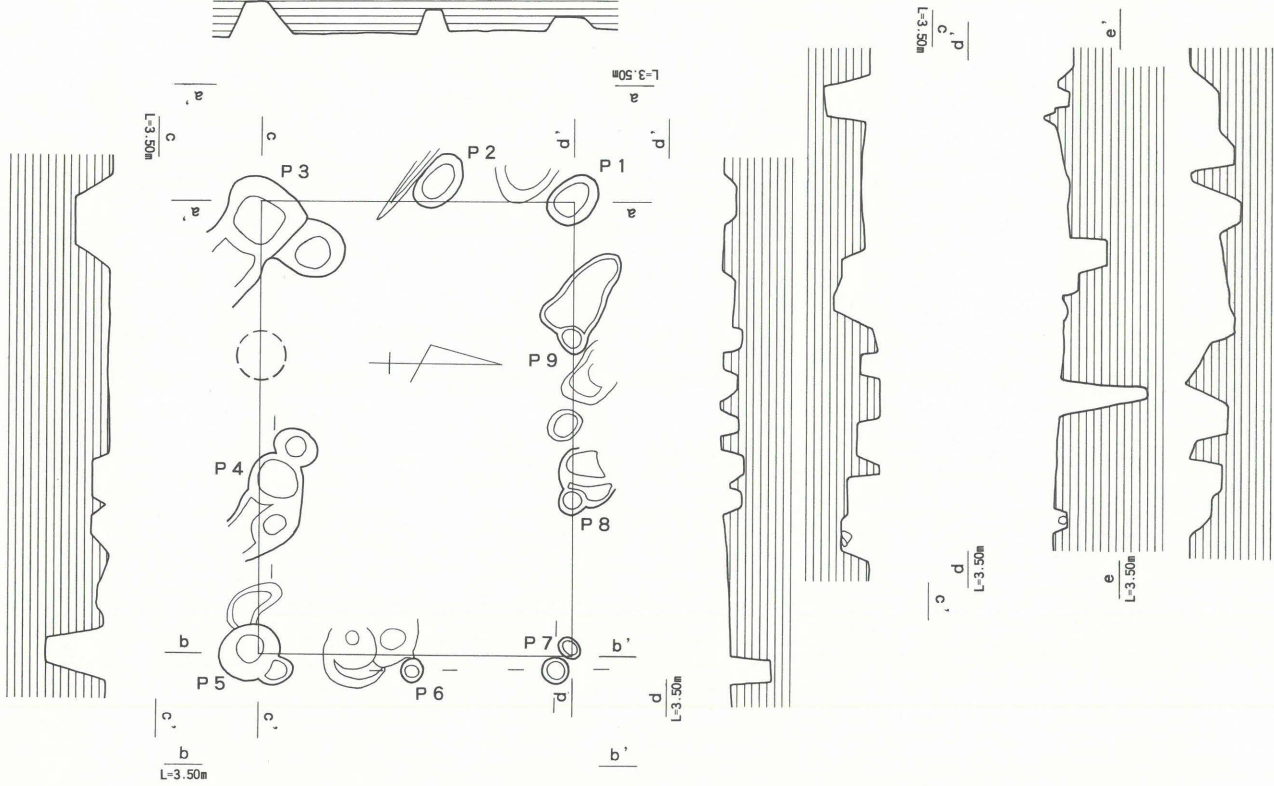
第17図 掘立柱建物実測図-9 (1/80)



第18図 掘立柱建物実測図-10 (1/80)



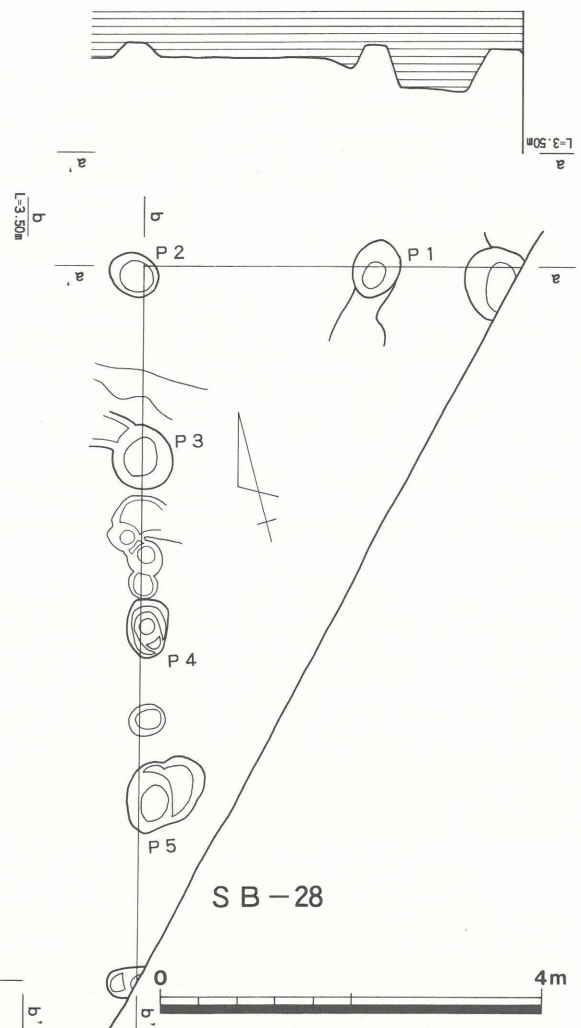
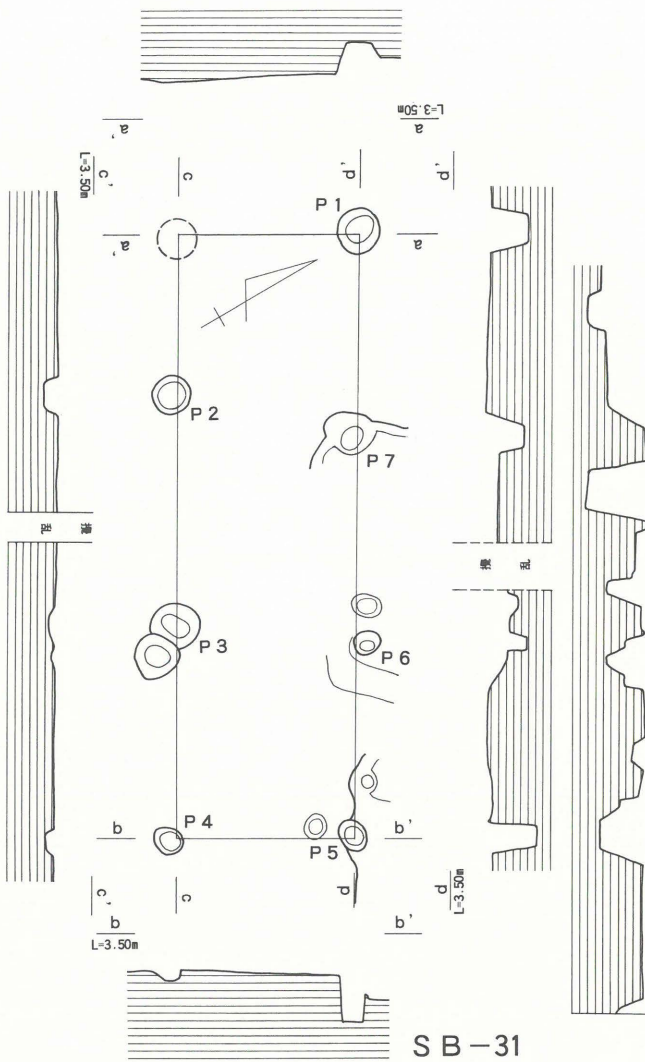
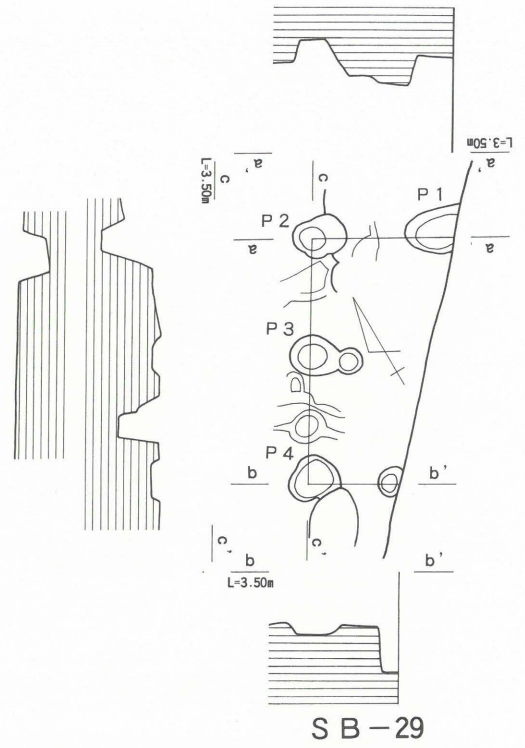
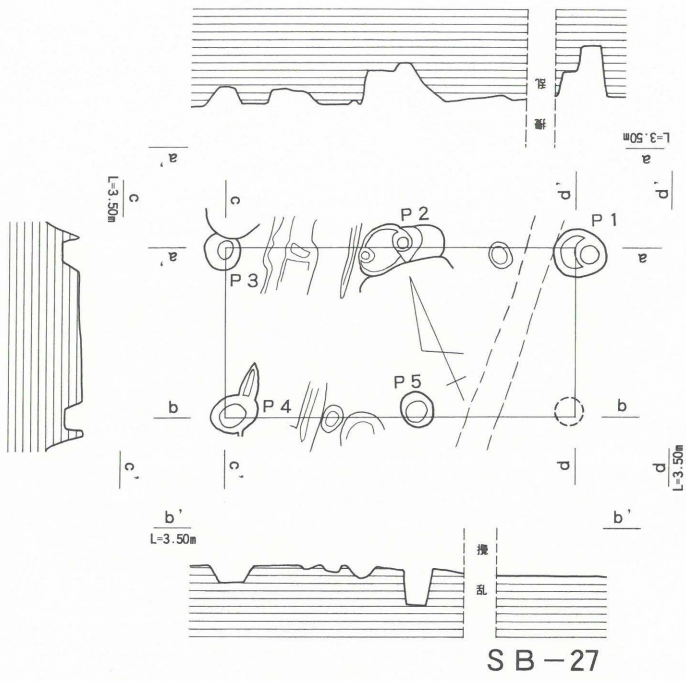
SB-23



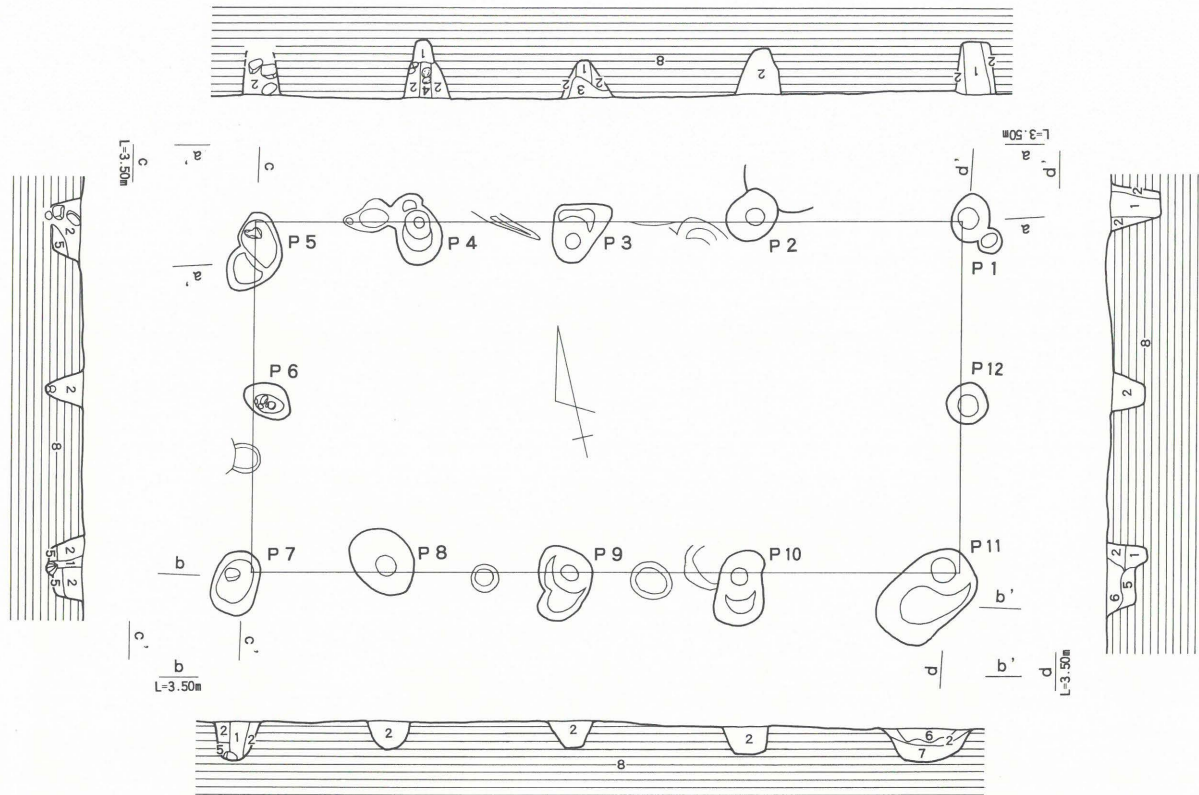
SB-26



第19图 掘立柱建物实测图-11 (1/80)

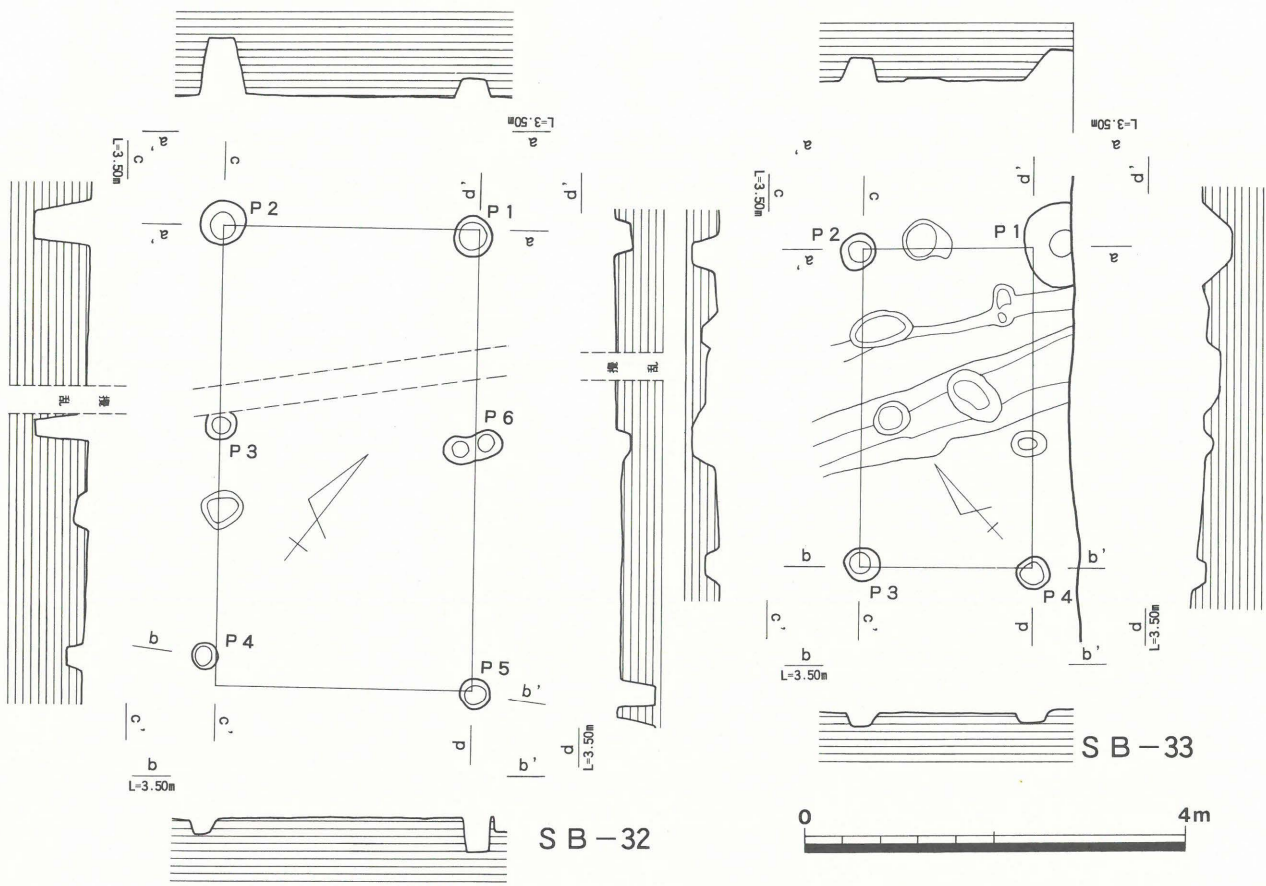


第20图 掘立柱建物实测图-12 (1/80)



- 1. 暗灰褐色砂質土層
- 2. 濁茶褐色砂質土層
- 3. 暗褐色砂質土層
- 4. 茶褐色砂質土層①
- 5. 茶褐色砂質土層②
- 6. 暗茶褐色砂質土層①
(破砕貝を含む)
- 7. 暗茶褐色砂質土層②
- 8. 茶褐色砂質土層③
(白色粒を含む・地山)

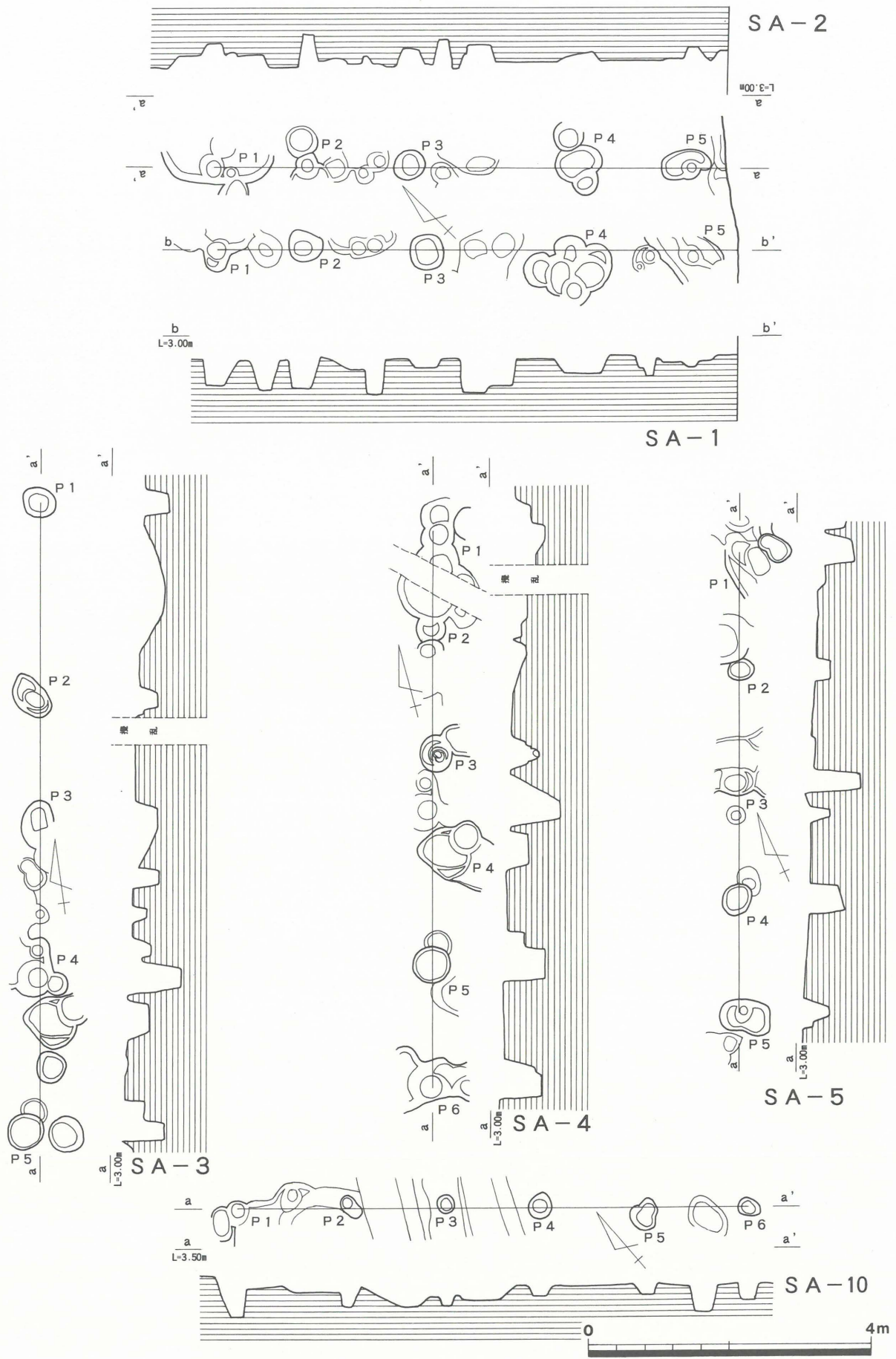
S B - 30



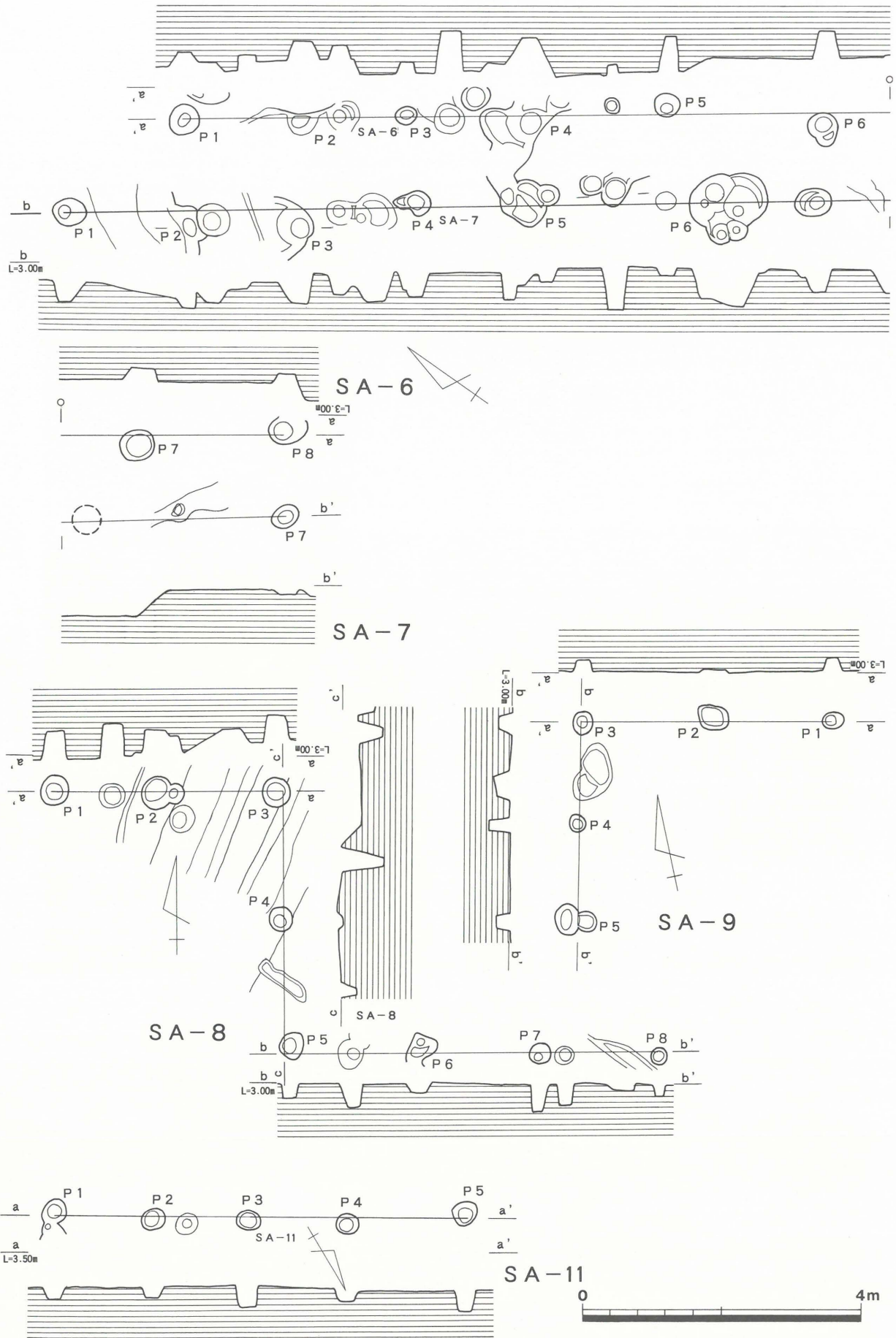
S B - 32

S B - 33

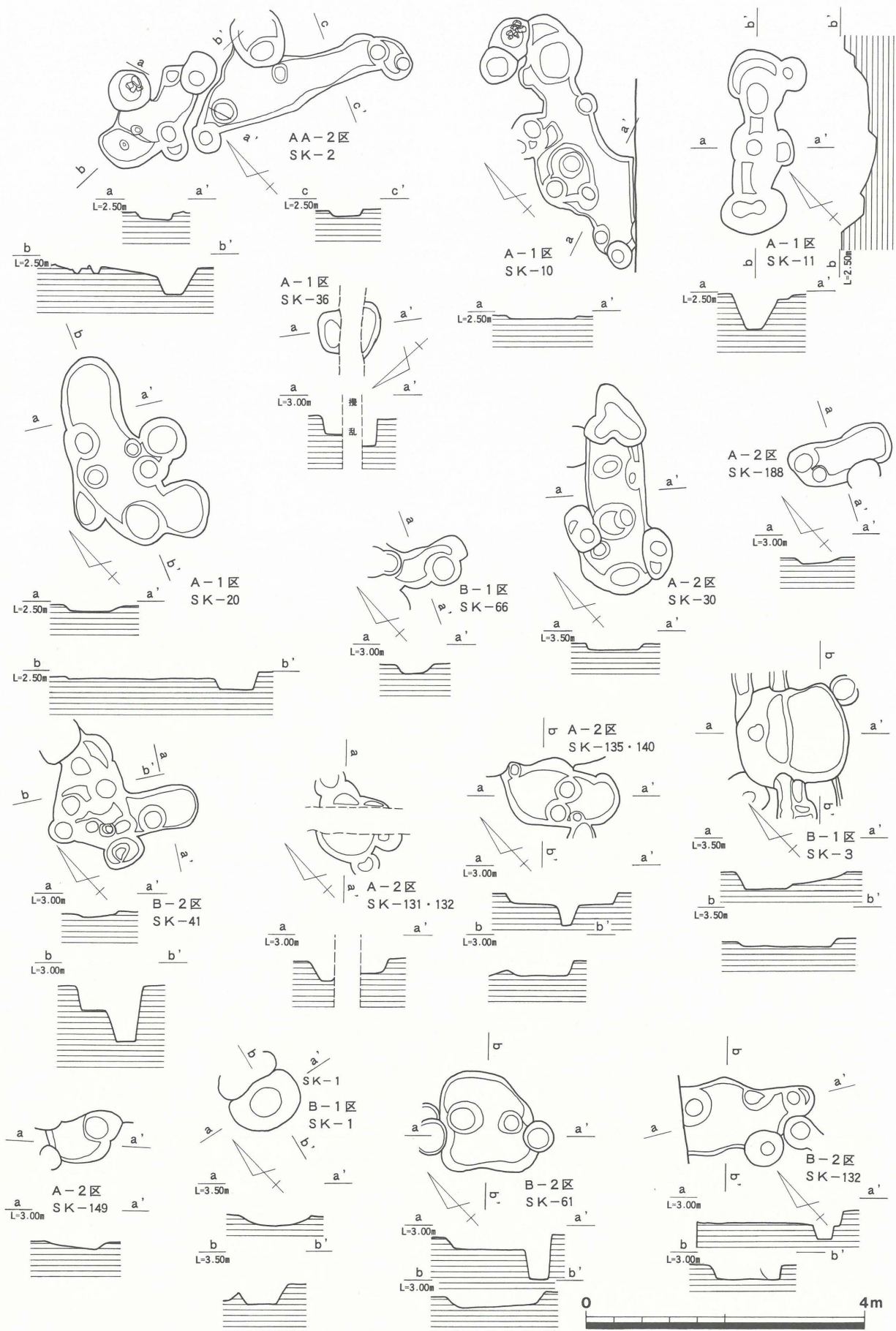
第21図 掘立柱建物実測図-13 (1/80)



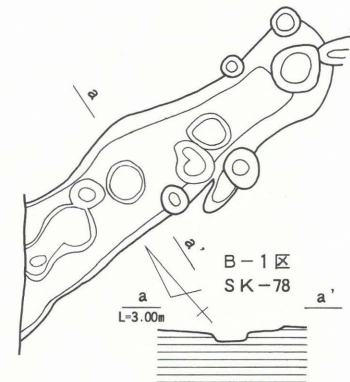
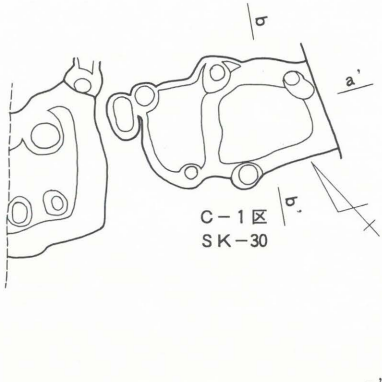
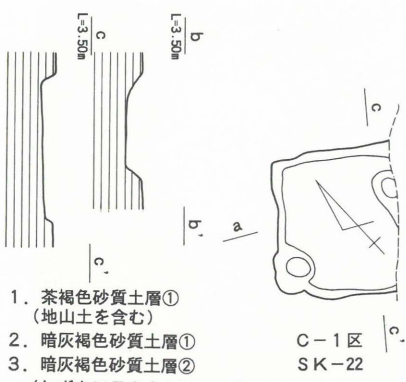
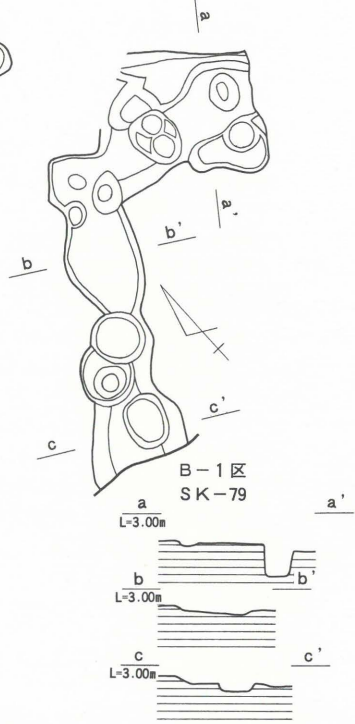
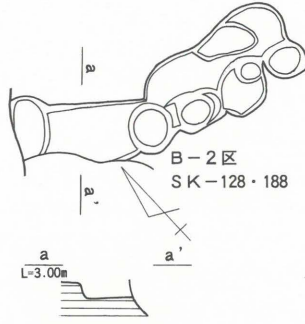
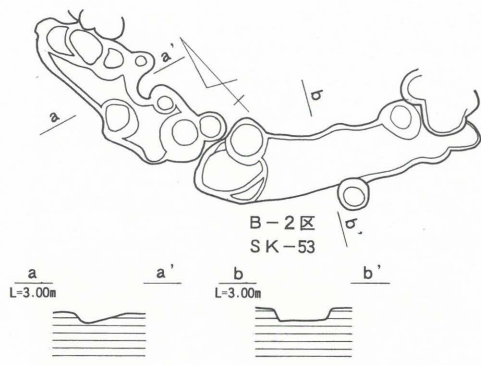
第22図 柵(塀)実測図-1 (1/80)



第23図 柵(塀)実測図-2 (1/80)



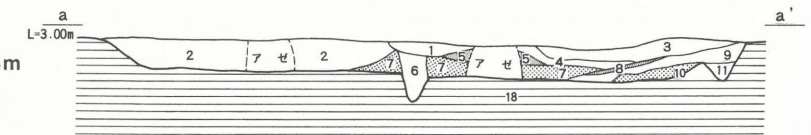
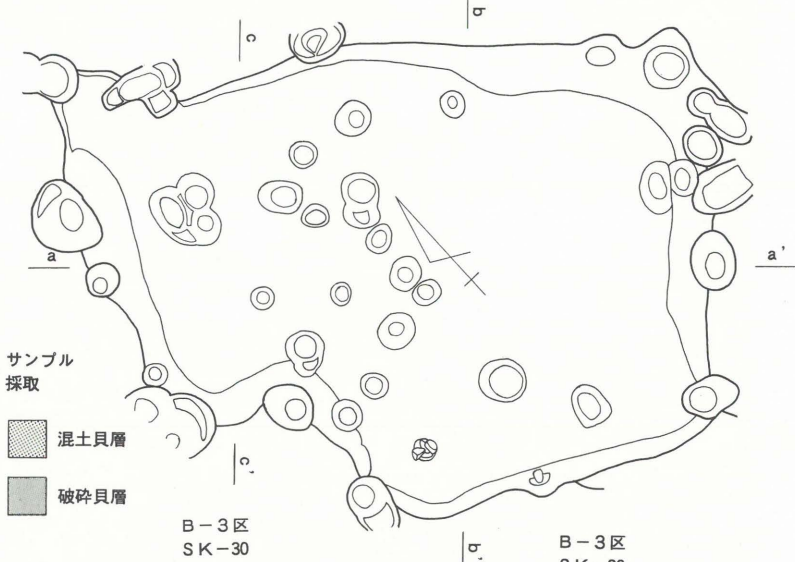
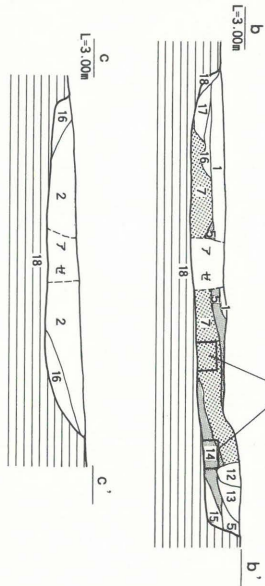
第24図 土壤実測図-1 (1/80)



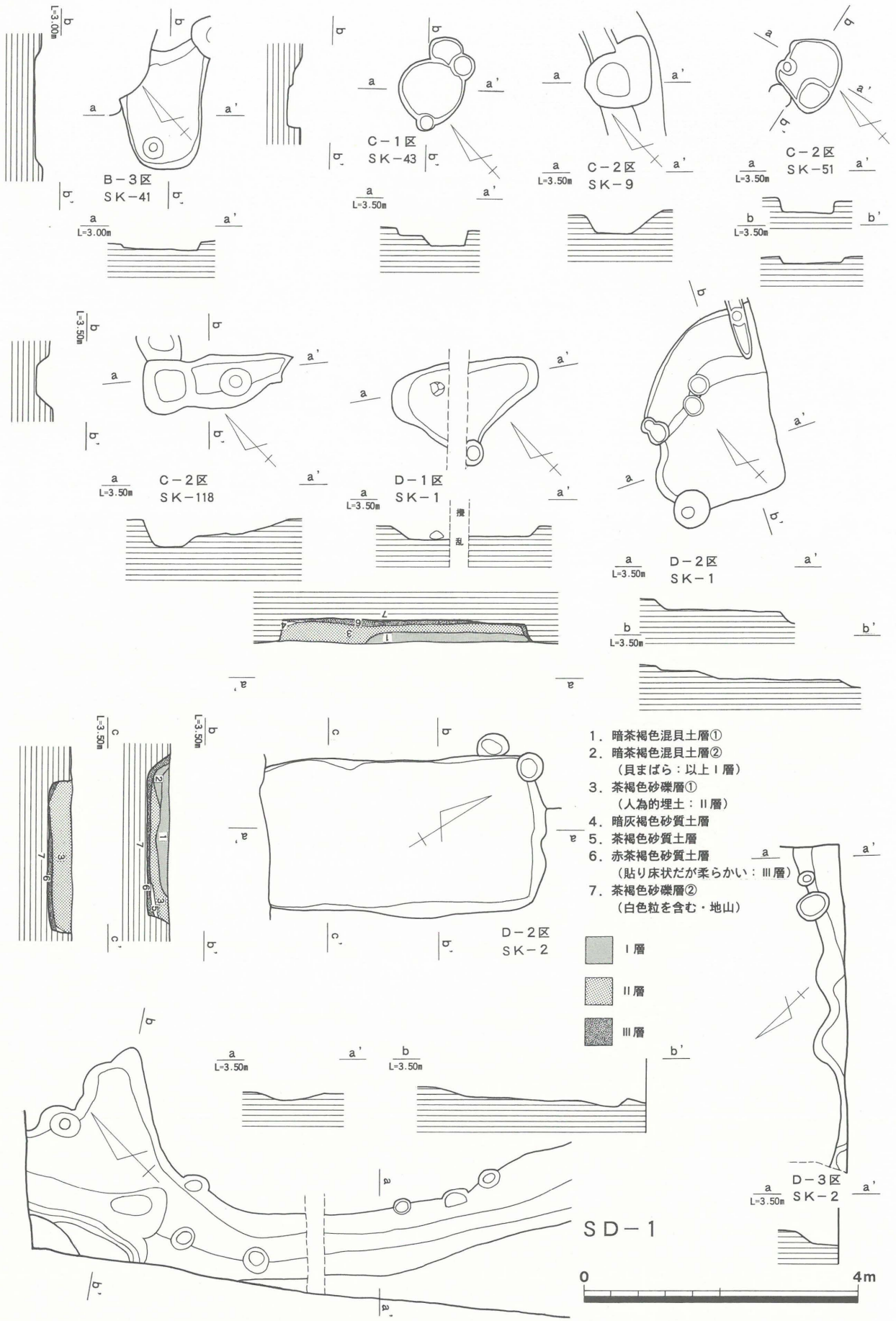
1. 茶褐色砂質土層① (地山土を含む)
2. 暗灰褐色砂質土層①
3. 暗灰褐色砂質土層② (わずかに貝を含む)
4. 茶褐色砂質土層② (地山ブロックを含む)
5. 暗茶褐色混貝土層①
6. 暗茶褐色混貝土層②
7. 茶褐色混土貝層①
8. 暗茶褐色破砕貝層①
9. 茶褐色砂質土層③
10. 茶褐色混土貝層②
11. 暗茶褐色砂質土層①

12. 暗褐色砂質土層 (柱穴埋土)
13. 暗茶褐色砂質土層② (柱穴埋土)
14. 暗茶褐色破砕貝層②
15. 暗茶褐色砂質土層②

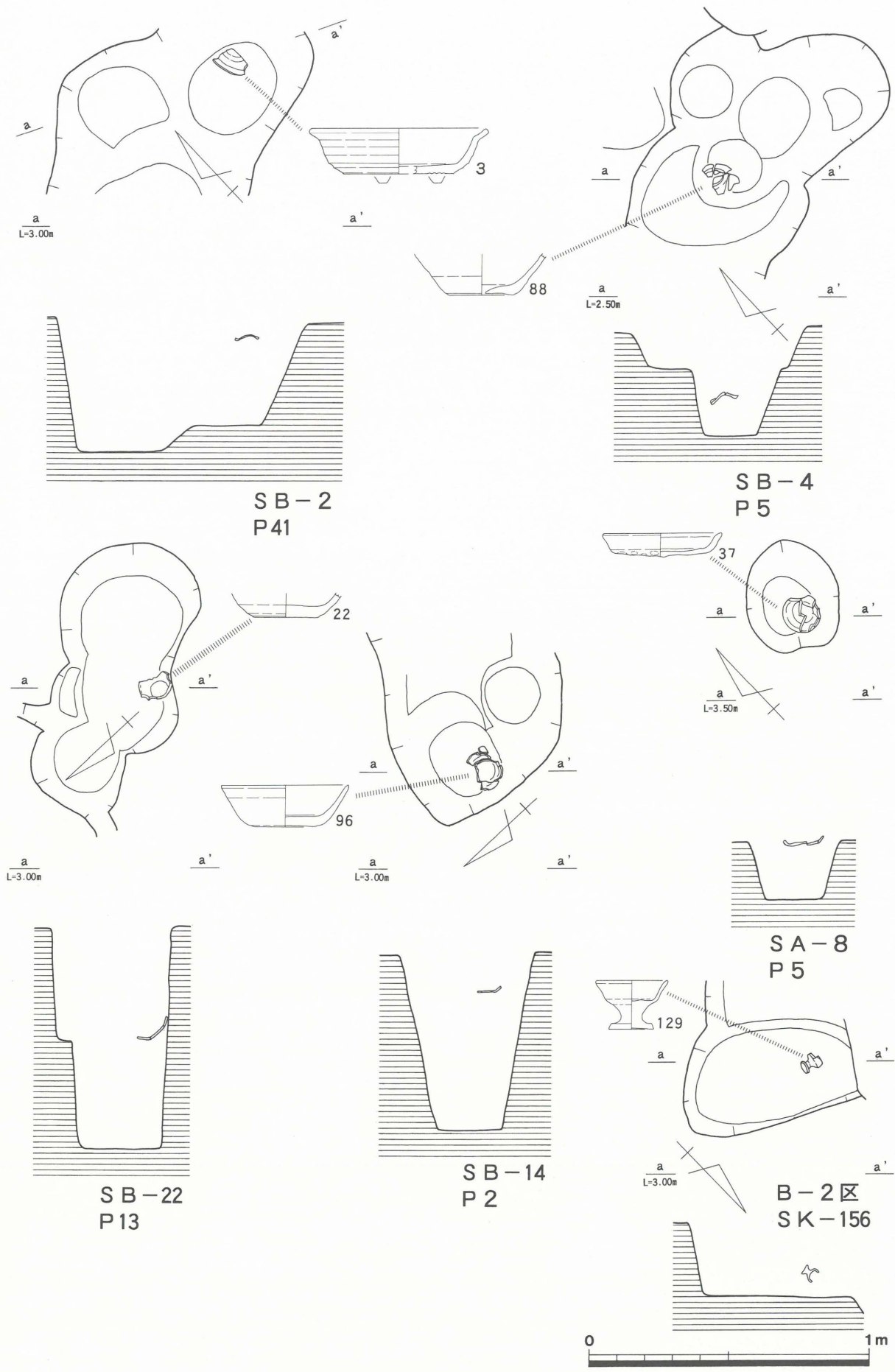
16. 明茶褐色砂質土層 (地山土を含む)
17. 暗茶褐色砂質土層③
18. 茶褐色砂質土層④ (白色粒を含む・地山)



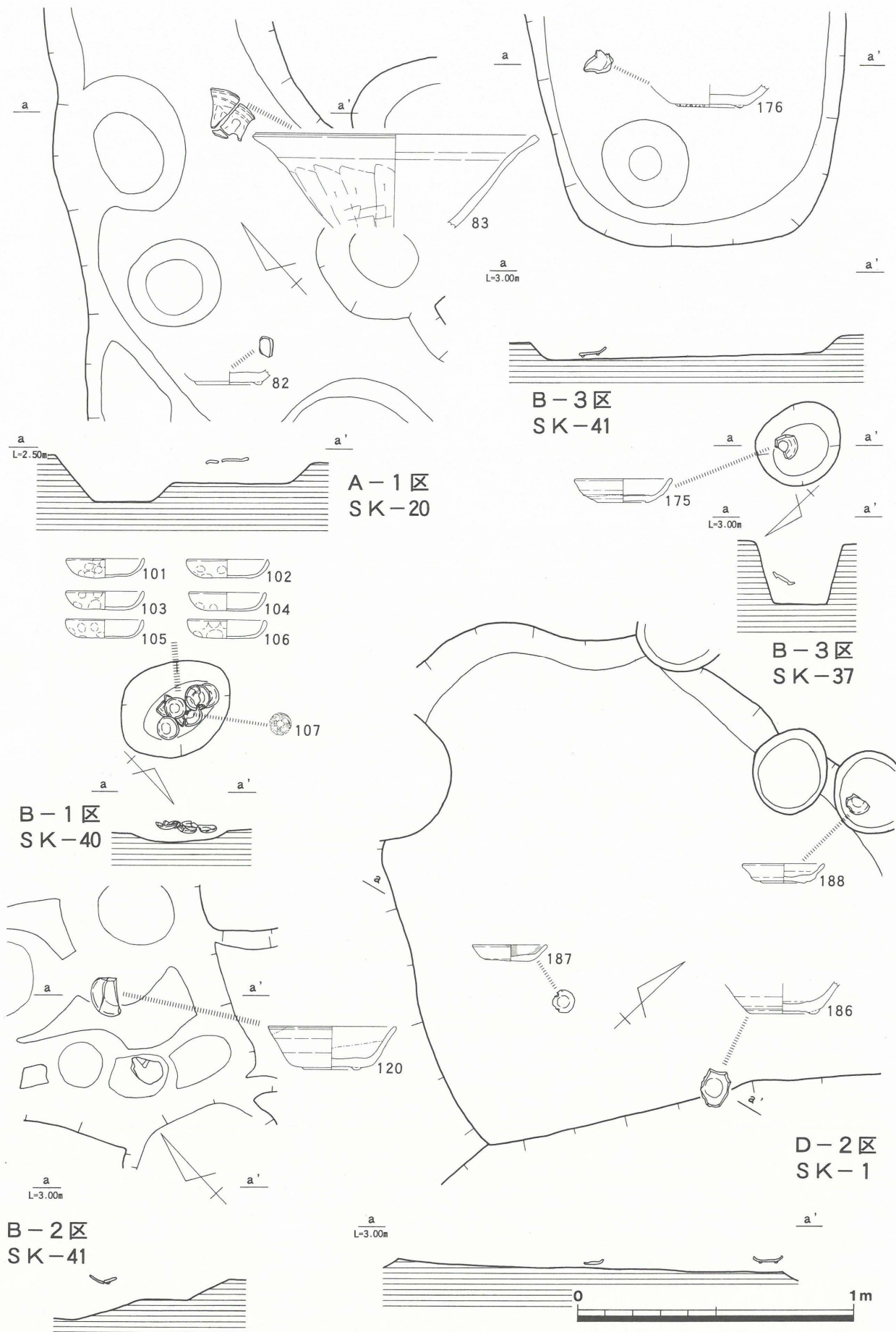
第25図 土壌実測図-2 (1/80)



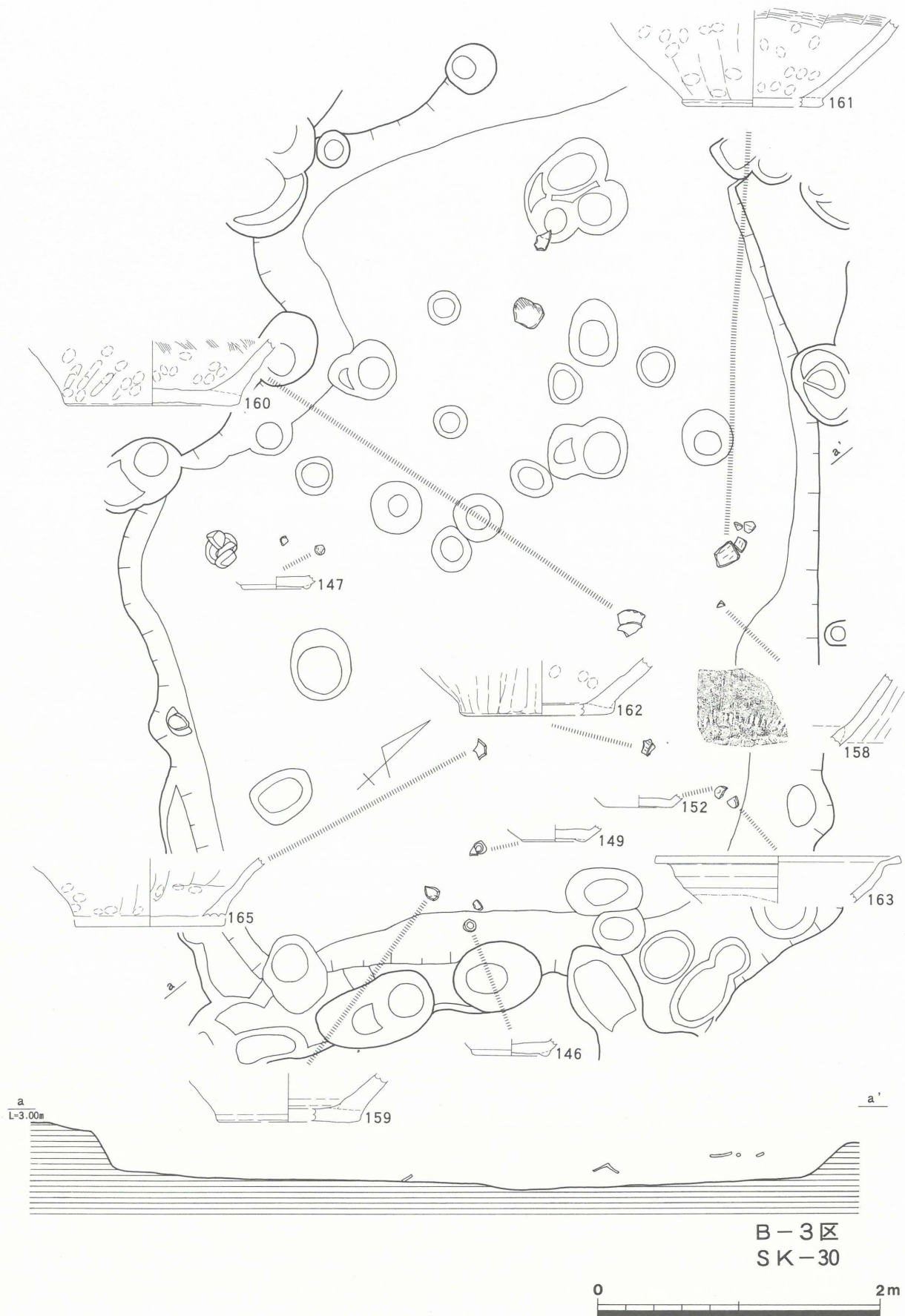
第26図 土壌実測図-3・溝実測図-1 (1/80)



第28図 遺物出土状況図-1 (1/20)



第29图 遺物出土状況図-2 (1/20)



第30図 遺物出土状況図-3 (1/40)

第2表 掘立柱建物一覧表

地区名	遺構名	桁 行		梁 間		方 位	時 期	備 考
		長さ	間数	長さ	間数			
AA-1	SB-1	(1.3)	(1)	1.6	1	N-7°-E		
AA-1	SB-2	11.4	10	6.0	5	N-4°-E	14世紀前葉	2棟分の可能性有。
AA-2	SB-3	(1.75)	(1)	2.4	2	N-41°-E		
AA-2	SB-4	(3.7)	(2)	4.45	3	N-41°-E	13世紀後葉	
AA-2	SB-5	(3.7)	(2)	3.4	2	N-14°-E		
AA-2	SB-6	6.2	4	(2.2)	(1)	N-15°-E		
AA-1	SB-7	5.05	4	4.8	3	N-28°-E	13世紀中葉以降	二面庇(縁)。
A-2	SB-8	6.5	3	4.25	2	N-43°-W		小建物が付随。
			(1)		1			
A-1	SB-9	3.35	3	2.4	2	N-42°-E	13世紀中葉以降	方形の土壇を伴う。
A-2	SB-10	3.8	4	2.05	2	N-30°-E	13世紀中葉以降	
A-2	SB-11	4.2	2	3.3	2	N-36°-E		
A-2	SB-12	(3.4)	(2)	3.4	2	N-26°-E		
A-1	SB-13	(2.6)	(1)	2.6	1	N-18°-E		梁間2間の可能性有。
A-2	SB-14	5.45	3	2.95	2	N-42°-W	13世紀中葉以降	
A-1	SB-15	11.6	7	2.7	2	N-33°-E	13世紀後葉	3間分は総柱建物。
B-1	SB-16	5.1	6	2.55	2	N-35°-E	13世紀前葉以降	
B-1	SB-17	5.4	4	3.15	2	N-16°-E		
A-2	SB-18	3.1	4	2.15	2	N-29°-E		
A-2	SB-19	4.5	3	3.7	2	N-33°-E		
A-2	SB-20	(3.8)	(2)	3.5	2	N-7°-E	13世紀前葉以降	
A-2	SB-21	7.1	5	5.2	4	N-20°-E	13世紀中葉以降	
B-1	SB-22	4.2	2	1.7	2	N-33°-E	13世紀後葉	総柱建物部分。
		8.55	4	1.9	1			側柱建物部分。
B-3	SB-23	9.0	5	4.45	4	N-27°-E	18世紀前葉以降	間仕切り1カ所。
B-3	SB-24	(1.2)	(1)	2.9	2	N-23°-E		
B-2	SB-25	4.1	2	3.5	2	N-5°-W		

地区名	遺構名	桁 行		梁 間		方 位	時 期	備 考
		長さ	間数	長さ	間数			
B-2	S B-26	4.8	3	3.3	2	N-1°-E	13世紀前葉以降	
B-1	S B-27	3.75	2	1.8	1	N-25°-E		
B-3	S B-28	(7.6)	(4)	(2.5)	(1)	N-15°-E		
B-3	S B-29	(1.3)	(1)	2.6	2	N-31°-E	11世紀後葉以降	
C-2	S B-30	7.5	4	3.7	2	N-13°-E	16世紀後葉以降	
C-1	S B-31	6.4	3	1.9	1	N-31°-E		
C-1	S B-32	4.9	2	2.7	1	N-37°-W		
D-3	S B-33	3.35	(1)	1.8	1	N-43°-E		桁行2間か。

※規模はm、()内は残存する数値。

時期は、出土遺物から導かれる遺構の最も遡り得る時期を示しており、本文の時期とは異なる場合もある。

第3表 柵(塀)一覧表

地区名	遺構名	長さ	間数	方 位	時 期	備 考
A-2	S A-1	(6.8)	(4)	N-45°-E		S A-2と同時期か。
A-2	S A-2	(6.8)	(4)	N-45°-E		
A-1	S A-3	9.0	4	N-9°-E	13世紀後葉以降	
A-2	S A-4	8.0	5	N-15°-E		
B-2	S A-5	6.5	4	N-25°-E		
B-1	S A-6	(13.6)	(7)	N-37°-W	13世紀中葉以降	S A-7と同時期か。
B-1	S A-7	(15.3)	(7)	N-37°-W		
B-2	S A-8	12.6	7	N-1°-E		2カ所で直角に曲がる。
C-2	S A-9	6.55	4	N-18°-E		S B-30に伴う。
B-1	S A-10	7.3	5	N-40°-E		
D-2	S A-11	6.0	4	N-32°-E		

※規模はm、()内は残存する数値。

時期は、出土遺物から導かれる遺構の最も遡り得る時期を示しており、本文の時期とは異なる場合もある。

第4表 溝一覧表

地区名	遺構名	長さ	幅	深さ	時期	備考
D-1	SD-1	(10.0)	0.9	0.15	18世紀中葉	埋土は混貝土層。区画溝か。
AA-1	SD-2	(38.5)	0.6~ 2.05	0.25~ 0.4	17世紀後葉~ 18世紀中葉	1回以上の掘り直しがあり、単条部と複条部からなる。区画と排水を兼ねる。
D-2	SD-3	(5.7)	1.2~ 1.45	0.25~ 0.35	江戸時代	1回掘り直しが行われている。区画溝か。
D-2	SD-4	(4.5)	0.45~ 0.6	0.05~ 0.1	江戸時代	埋土は混貝土。
D-2	SD-5	(16.7)	0.8~ 1.6	0.2~ 0.3	12世紀後葉~ 13世紀中葉	中世陶器・円礫がまとめて出土。区画溝か。

※ 規模はm、()内は残存する数値。
 時期は出土遺物の所属時期を示す。

第5表 土壌一覧表

地区名	遺構名	長さ	幅	深さ	時期	備考
AA-2	SK-2	4.7	0.6~0.8	0.1	鎌倉時代	SB-7に関連か。
A-1	SK-10	3.6	0.55~1.0	0.05	13世紀後葉	SB-7に関連か。
A-1	SK-11	2.7	0.45~0.9	最大0.45	BC3~2世紀	条痕文土器片出土。
A-1	SK-20	3.05	0.85~1.0	0.08	13~15世紀	
A-1	SK-36	0.85	0.8	最大0.4		
A-2	SK-10	2.05	1.9	0.12	13世紀中葉	SB-9に伴う。
A-2	SK-30	2.4	0.8	0.1	鎌倉時代	SB-7に関連か。
A-2	SK-131 132	1.2	0.8	最大0.3	13世紀中葉	中世陶器1点が伏せられた状態で出土。
A-2	SK-135 140	1.7	0.7~1.0	0.15	13世紀後葉	
A-2	SK-149	0.9	(0.6)	0.1	室町時代	
A-2	SK-188	1.5	0.6	0.1	鎌倉時代	
B-1	SK-1	1.1	0.7	0.15~0.3		
B-1	SK-3	1.6	1.45	最大0.25		埋土に焼土を含む。

※ 規模はm、()内は残存する数値。
 時期は出土遺物の所属時期を示す。

地区名	遺構名	長さ	幅	深さ	時期	備考
B-1	SK-40	0.45	0.35	0.05	室町時代か	土師器皿、銭貨が一括出土。
B-1	SK-66	(0.95)	0.55	0.15	13世紀前葉	
B-1	SK-78	(4.5)	0.8~1.1	0.08	古墳時代か	
B-1	SK-79	(5.0)	0.6~1.0	0.05		
B-2	SK-41	不明	不明	(0.05)	13世紀後葉	
B-2	SK-53	5.2	0.65~0.7	0.1	鎌倉時代	
B-2	SK-61	1.45	1.4	0.25		
B-2	SK-128 188	(3.3)	0.65	0.15		
B-2	SK-132	(2.0)	1.05	0.2		
B-2	SK-156	(0.6)	0.4	0.25	13世紀後葉?	仏供が横転した状態で出土。
B-2	SK-160	(0.55)	不明	(0.45)	13世紀中葉	
B-3	SK-30	6.85	3.4~4.95	0.3~0.45	13C中~14C前	大型廃棄土壇。貝層が見られる。
B-3	SK-37	0.3	0.3	0.2	16世紀後葉	初山窯産内禿皿1点が出土。
C-1	SK-1	2.5	(0.65)	0.05	13世紀前葉	埋土は混貝土。
B-3	SK-41	1.7	1.0~1.3	0.1	13世紀後葉	
C-1	SK-22	2.95	1.6	0.15~0.25	江戸時代	埋土は混貝土
C-1	SK-30	(1.95)	1.15	0.2~0.4	江戸時代	
C-1	SK-43	1.0	0.9	最大0.25	古墳~奈良	埋土に焼土を多く含む。
C-2	SK-9	1.0	1.0	(0.35)	古墳~奈良	埋土に焼土を多く含む。
C-2	SK-51	0.95	0.8	0.2	古墳	埋土に焼土を多く含む。
C-2	SK-118	2.25	0.8	0.25~0.4	13世紀中~後	
D-1	SK-1	2.2	1.2	0.1~0.2	江戸時代	埋土に焼土を含む。
D-2	SK-1	(2.75)	(1.85)	最大0.2	13世紀中~後	貝殻を主に廃棄した土壇。
D-2	SK-2	(4.1)	2.3	0.35	18~19世紀	壁面に化粧土。
D-3	SK-2	(4.8)	(0.7)	(0.2)	江戸時代	溝の一部となる可能性有。

※本文中に取り上げたもののみを示す。規模はm、()内は残存する数値。
 時期は出土遺物の所属時期を示す。

第4章 遺物

1. 人工遺物 (第32～40図)

調査区から出土した人工遺物はコンテナ (34×54×20cm) 20箱程度とあまり多くない。これらの遺物のうち中世陶器の量が最も多く、碗、小皿、壺、甕などが見られる。その他条痕文土器や古墳時代の須恵器・土師器、近世の陶磁器など出土しており、調査区付近は王ヶ崎貝塚や磯辺王塚古墳の存在とも考え合わせ、縄文時代～現代まで、人々の生活が連綿と営まれた地域であったといえよう。

以下では、掘立柱建物 (SB)、柵・塀 (SA)、溝 (SD)、土壙 (SK) の順に遺構出土の遺物について説明し、次いで包含層及び表土出土遺物についての説明を加えることとする。なお各遺物の型式名、帰属時期などについては章末の参考文献によったが、中世陶器については特に断わりが無い限りすべて渥美・湖西窯の製品である。

SB-2 (第32図1～3)

1は中世陶器の小皿である。器形はやや偏平で、体部は内反り気味だが直線的に立ち上がる。内面中央は強く押しナデて窪ませる。松井編年のⅢ-2期に比定される。2は土師器の伊勢型鍋の口縁部で、端部を内側に折り返し、折り返し部分は僅かに窪む。伊藤編年の第1段階に比定される。3は古瀬戸の折縁深皿で、三足を持つと考えられる。柱穴から出土しており、B-3区SK-30からも同一品の破片 (接合可能) が出土している。口縁部は逆ハの字形に広がり、端部は断面形が丸みを帯びた方形に仕上げられている。底部付近はロクロヘラ削りが施され、足の剥離痕が認められる。藤澤編年の古瀬戸中期Ⅰ～Ⅱ期に比定される。

SB-7 (第32図4～6)

4・5は中世陶器の碗である。4は体部で直線的に伸び器壁は厚い。5は底部付近である。共に松井編年のⅢ期に比定される。6は須恵器の壺の口縁部である。端部の断面形は三角形で、外面には面を持つ。

7はSB-7、10、11いずれかに伴う遺物である。口縁端部は尖り気味で、体部は丸みを持つ。高台はつぶれて偏平である。松井編年のⅢ-2期に比定される。

SB-10 (第32図8)

8は中世陶器の小皿である。器形は偏平で、胎土から知多窯産と考えられる (注1)。中野編年の6a型式期に比定される。

SB-15 (第32図9～14)

9・10は中世陶器の碗である。9は無高台で、底部付近は僅かに下に突出する。10は体部で、内面

にはススがべったりと付着する。いずれも松井編年のⅢ-2・3期に比定される。11は中世陶器の小皿である。体部は緩く外反し、底部との境界は丸みを帯びる。内面に広く墨の痕跡が見られ、硯として転用された可能性がある。松井編年のⅢ-1・2期に比定される。12は輸入磁器の青磁蓮弁文碗で、龍泉窯系のものである。外面には小振りな鎬蓮弁文が見られ、横田・森田分類のⅢ類に比定される。13は土師器の皿で、摩滅が著しく詳細は不明である。14は土師器の皿で、手づくね整形により外面に指オサエ痕が明瞭に残る。器壁は著しく薄く、口縁部付近は著しく内湾する。形態から南伊勢系の土師器と考えられ、新田分類のⅢA 4に比定される。

S B-16 (第32図15)

15は中世陶器の碗である。高台は断面三角形を呈し、松井編年のⅢ期に比定される。

S B-18 (第32図16)

16は土鍾で、外面に指オサエ痕が明瞭に見られる。類似例から中世のものと考えられる。

S B-20 (第32図17)

17は常滑窯産の壺である。口縁端部は断面三角形を呈し、外面は面を形成する。中野編年の5型式期に比定される。

S B-21 (第32図18~20)

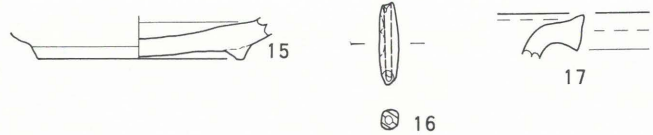
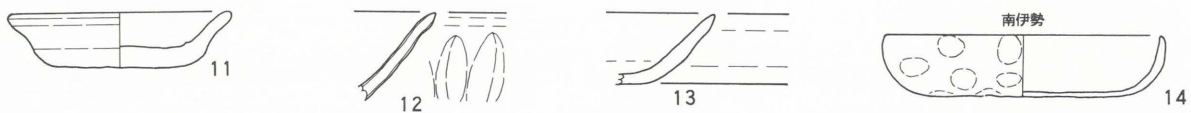
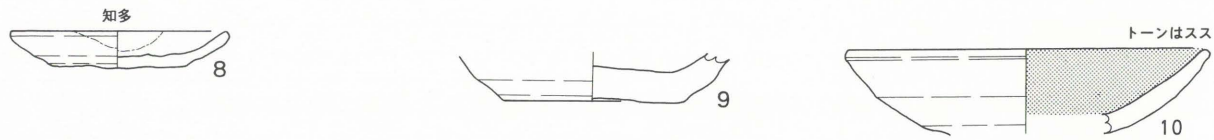
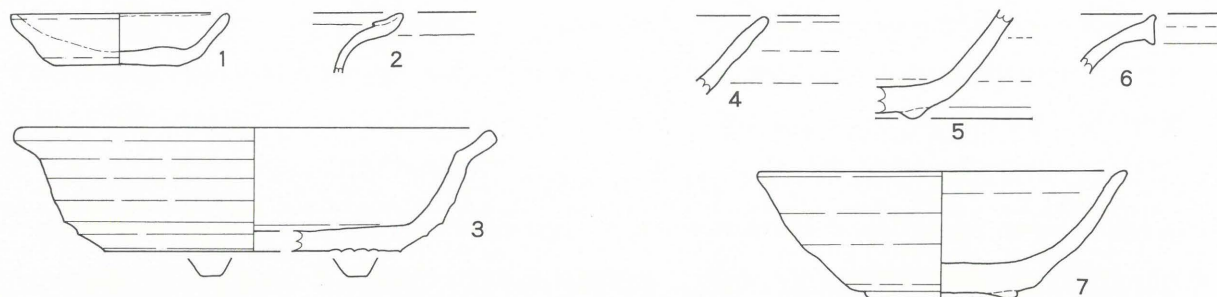
18~22は中世陶器の碗である。18・20は内面の体部と底部との境界が明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。18は松井編年のⅢ-2期に、20は同Ⅲ-2・3期に比定される。19は知多窯産で、体部の立ち上がりは直線状であり、高台は小さく刳殻痕が認められる。色調は渥美・湖西窯産のものに比較してやや白っぽく、器壁は滑らかで、胎土に黒色粒を多く含む。中野編年の6a型式期に比定される。

S B-22 (第32図21~25)

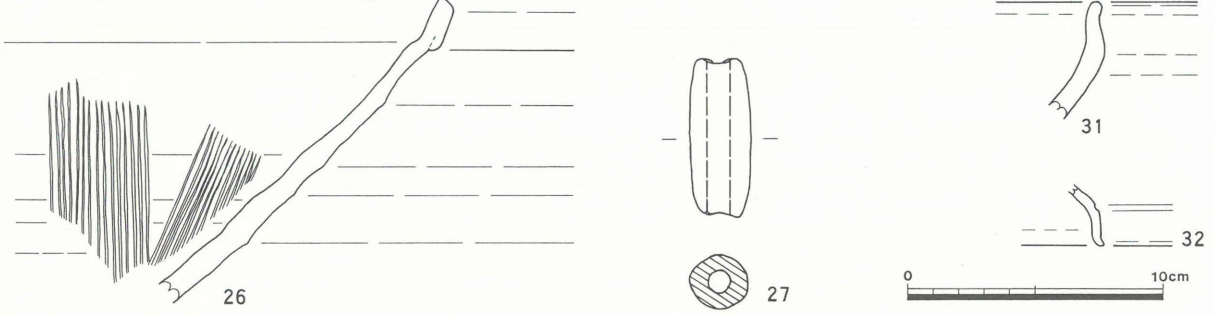
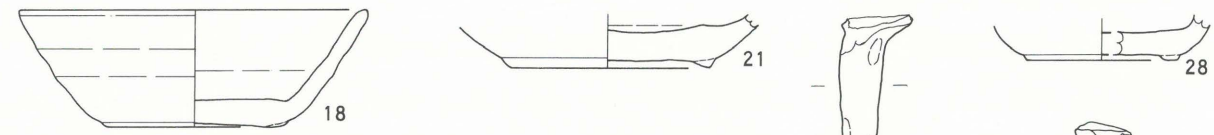
21・22は中世陶器の碗である。21は高台の断面が三角形を呈する。松井編年のⅢ-2期に比定される。22は無高台で、底部は下方に僅かに突出する。松井編年のⅢ-2・3期に比定される。23は輸入磁器の青磁蓮弁文碗である。龍泉窯系のもので、外面には片切彫りの大振りな鎬蓮弁文が見られることから横田・森田分類のⅠ-5b類に比定される。24・25は製塩土器の脚部で、いずれも坏部・脚端部は欠損している。外面には指オサエ痕が残るが、ナデにより平滑に仕上げられる。胎土は精良で、小石粒などをあまり含まない。奈良時代のものである。

S B-23 (第32図26・27)

26は瀬戸美濃窯産の摺鉢で、口縁部は外に折り返すことで縁帯を形成する。登窯6期に比定される。27は土鍾である。太形で、外面はナデが施される。近世のものとする。



- | | |
|--------------|---------------|
| 1~3 : SB-2 | 17 : SB-20 |
| 4~6 : SB-7 | 18~20 : SB-21 |
| 7 : SB-7 ? | 21~25 : SB-22 |
| 8 : SB-10 | 26·27 : SB-23 |
| 9~14 : SB-15 | 28·29 : SB-26 |
| 15 : SB-16 | 30 : SB-29 |
| 16 : SB-18 | 31·32 : SB-30 |



第32図 出土遺物実測図一1 (1/3)

S B - 26 (第32図28・29)

28は中世陶器の碗である。高台は底平で、断面方形気味である。松井編年のⅢ期に比定される。29は製塩土器の脚部である。外面には指オサエ痕が認められる。奈良時代のものである。

S B - 29 (第32図30)

30は錢貨の元豊通寶である。いわゆる北宋錢で、錆により文字面は不明瞭である。

S B - 30 (第32図31・32)

31は瀬戸美濃窯産の天目茶碗である。体部は屈曲が著しく、口縁端部は玉縁状に肥厚する。藤澤編年の大窯第3段階に比定される。32は須恵器の坏蓋である。体部と天井部との境界には一条の沈線が巡らされる。口縁端部は外側に僅かに開く。6世紀後葉のもので、小林編年の第Ⅲ期中葉に比定される。

S A - 3 (第33図33~35)

33は輸入磁器の青磁蓮弁文碗である。龍泉窯系のもので、外面には小振りな鎬蓮弁文が見られることから横田・森田分類のⅢ類に比定される。34は土錘である。外面には指オサエ痕が見られる。35は錢貨の皇宋通寶である。いわゆる北宋錢で、表面の錆漬れが著しい。

S A - 6 (第33図36)

36は中世陶器の碗で、松井編年のⅢ期に比定されるものである。

S A - 8 (第33図37)

37は土師器の皿である。体部は強いヨコナデが施されているため外反気味であり、口縁端部には面を持つ。内面における体部と底部の境には、強いヨコナデにより生じた稜が見られる。底部は指オサエ痕が顕著である。赤木分類の土皿Eに相当し、近世の混入品と考えられる。

S D - 1 (第33図38・39)

38は瀬戸美濃窯産の底部である。高台は削出しで、内外面には鉄釉が施されるが高台付近は露胎である。藤澤編年の登窯6・7期に比定される。39は土師器の鍋である。口縁部は窪んだ面を持ち、端部は内側に摘み出される。半球形、あるいは炮烙形を呈すると考えられる。

S D - 2 (第33図40~55)

40は須恵器の坏蓋である。つまみは偏平な宝珠形を呈する。41・42・44は瀬戸美濃窯産の摺鉢である。41は口縁端部を直立させて受口状を呈し、縁帯の垂下は弱い。42は口縁部を折り返して縁帯を形成するものである。前者は藤澤編年の登窯4期?、後者は同6期に比定される。44は摺鉢の底部で、内面のクシ目は細かい。内面全体にべったりとススが付着する。43は肥前陶器の鉢で、口縁は水平方

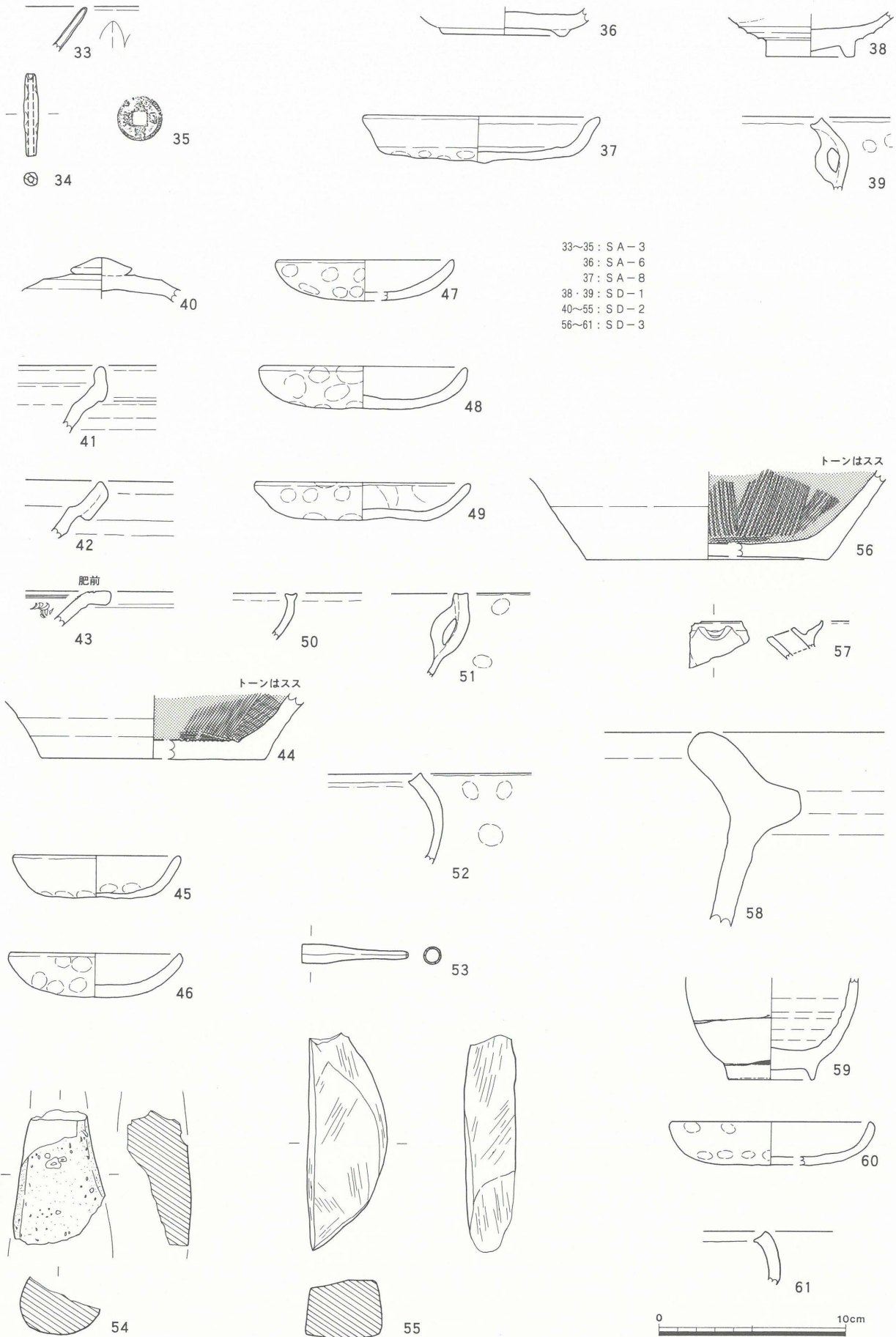
向に屈曲する。内面に白化粧土による象嵌が施された、いわゆる三島手のものである。45～49は土師器の皿である。いずれも内面はナデで、外面には指オサエ痕が明瞭に見られる。端部の形態は、45は丸く収められ、46～48は尖り気味であり、49は僅かに面を持つ。45～47は川井分類のD 1類、48は同D 2類、49は赤木分類の土皿Dにそれぞれ比定される。50～52は土師器の鍋である。50は口縁端部を窪ませるため、断面はY字状を呈する。口径は復元できないが通常の鍋に比べかなり小振りで、鍋以外の用途を考える必要もあろう。51・52は半球形の鍋で、52は口縁付近の内湾度が著しい。53は銅製のキセルの吸口である。側面には接合痕が残る。54は磨製石斧である。刃部付近を欠損しているが、表面は滑らかに加工される。石材は塩基性岩である。55は砥石である。いわゆる青砥と呼ばれるもので、表面には擦痕が認められる。石材は凝灰岩で、付近では北設楽郡鳳来町、東栄町などに産出するものである（注2）。

SD-3（第33図56～61）

56は瀬戸美濃窯産の摺鉢である。内面のクシ目の間隔は比較的粗く、内面全体にべったりとススが付着する。57は瀬戸美濃窯産の水注、あるいはひょうそくと考えられる。注口部は短いもので、内外面に灰釉が施される。登窯期のものである。58は常滑窯産の甕である。いわゆる「赤もの」で、口縁部には鏝状の張り出しが見られる。また内面には褐白色の付着物があることから肥甕として利用されたと考えられる。明治時代の製品で、当遺構上に存在した2基の甕の破片が混入したものである。59は国産磁器の染付碗である。内面にはロクロ目が明瞭に見られ、外面には呉須による横線が描かれる。60は土師器の皿で、川井分類のD 2類に比呈される。61は土師器の半球形鍋である。口縁端部は面を持ち、内側に僅かにつまみ出す。

SD-5（第34図62～76）

62は条痕文土器の底部と考えられる。胎土は粗く、全体に摩滅が著しい。63は須恵器の坏蓋で、恐らくつまみが存在したと思われる。64～72は中世陶器の碗である。64は体部が全体に緩やかに湾曲し、口縁部は外反する。口縁端部は外側に僅かに面を持つ。高台は比較的高く角形に近い。65・66は64に比べ外反度は弱い、高台は比較的しっかりとしている。67は器高が低く偏平気味で、口径も小さい。口縁端部外側には僅かに面を持つ。68は僅かに内湾し、69は体部が比較的まっすぐ立ち上がるもので、68の外面には一部にススが付着する。70は高台が比較的しっかりとしているのに対し、71・72は潰れている。71にはスス、あるいは墨状のムラが見られる。64は松井編年のⅠ～Ⅱ期、65・68は同Ⅱ期、66は同Ⅱ～Ⅲ-1期、67は同Ⅲ-2期、69は同Ⅲ期、70は同Ⅲ-1期、71・72は同Ⅲ-2・3期にそれぞれ比定される。73は片口碗で、口縁部はS字状を呈する。松井Ⅱ期と思われる。74は片口鉢である。体部は緩く湾曲し、底部には高台の剥離痕が見られる。松井編年のⅡ期に併行すると思われる。75は輸入磁器の白磁口禿皿である。口縁端部は尖り、釉をカキ取ること露胎となっている。横田・森田分類のⅨ類に比定される。76は土師器の伊勢型鍋である。頸部は長く、折り返しの幅は狭い。伊藤編年の第1段階に比定される。



第33図 出土遺物実測図一 2 (1/3)

A A - 1 区 S K - 20 (第34図78)

78は砥石である。欠損部を除き削痕が認められる。石材はホルンフェルスの可能性があり、豊川右岸に見られるものである。

A A - 2 区 S K - 12 (第34図79)

79は細形の土錘である。

A - 1 区 S K - 10 (第34図80)

80は中世陶器の小皿である。器形は浅く、口縁端部外側には沈線が巡り、底部は高台状に著しく突出する。松井編年のⅢ - 3期に比定される。

A - 1 区 S K - 11 (第34図81)

81は条痕文土器の深鉢で、口縁は逆ハの字状に広がる。全体に摩滅が著しい。

A - 1 区 S K - 20 (第34図82・83)

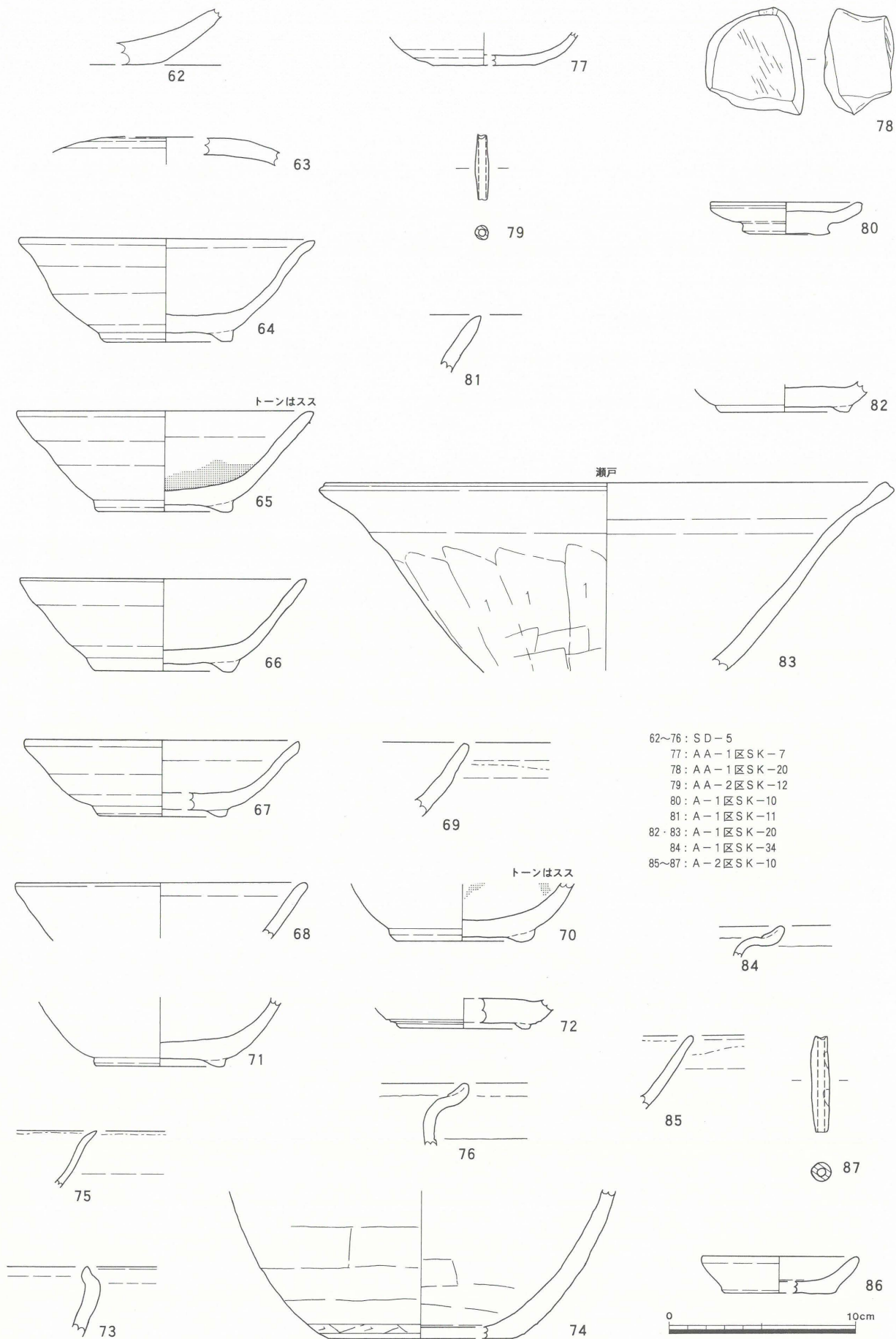
82は中世陶器の碗である。高台は低く偏平で、松井編年のⅢ - 2・3期に比定される。83は瀬戸窯産の片口鉢である。体部下半は内湾し、逆に口縁部は僅かに外反する。口縁端部には沈線を巡らせる。体部にはロクロナデ後に縦方向のヘラ削りが施され、またタール状の黒色物が付着している。色調は濃灰色で、長石の吹き出しが著しい。瀬戸窯産で、口縁端部の形態からは藤澤編年の第7型式に併行するといえるが、体部下方に施された縦方向のヘラ削りは古瀬戸後期の特徴である。ここでは調整技法を重視し古瀬戸後期の製品としておく。

A - 1 区 S K - 34 (第34図84)

84は土師器の伊勢型鍋である。口縁部の折り返しは僅かに窪み、幅はやや狭い。伊藤編年の第1段階に比定される。

A - 2 区 S K - 10 (第34図85~87)

85は中世陶器の碗で、体部は直線的に立ち上がる。松井編年のⅢ - 2・3期に比定される。86は中世陶器の小皿である。器形は偏平で、体部は直線的である。松井編年のⅢ - 1期?に比定される。87は土錘である。外面には指オサエ痕が見られる。



62~76: SD-5
 77: AA-1区SK-7
 78: AA-1区SK-20
 79: AA-2区SK-12
 80: A-1区SK-10
 81: A-1区SK-11
 82・83: A-1区SK-20
 84: A-1区SK-34
 85~87: A-2区SK-10

第34図 出土遺物実測図-3 (1/3)

A-2区SK-55 (第36図116)

116は陶丸で、表面にはナデが施されている。胎土から渥美・湖西窯の製品と考えられる。

A-2区SK-64 (第35図88)

88は常滑窯産の中世陶器・碗である。体部は高台から直線的に立ち上がり、高台は潰れて著しく退化している。底部内面の中央には強い押しナデを施した結果、割れて穴が空いてしまっている。外面には長石の吹き出しが顕著である。中野編年の6a型式期に比定される。

A-2区SK-79 (第35図89)

89は中世陶器の碗である。内面中央は押しナデによりわずかに窪む。底部外面には「一」という墨書が見られる。松井編年のⅢ-2・3期に比定される。

A-2区SK-132 (第35図90)

90は中世陶器の碗である。器形は偏平で、丸みが強く内面における底部と体部の境は不明瞭である。口縁部の一部が意図的に打ち欠かれており、その付近および口縁部の一部にはススが付着する。松井編年のⅢ-2期に比定される。

意図的に口縁部を打ち欠いた例には当遺跡出土遺物における第36図130が見られるほか、類例として豊橋市大膳古窯址群からヘラで体部の一部を切り取ったものが出土している。その使用法は不明確ながら、大膳例では灯火具としての使用法が想定されており(注3)、当遺跡例は、90のように内面に灯芯によるススが付着するものや、130のように内面全体にススが付くものが認められ、同様に灯火具としての使用が考えられる。

A-2区SK-139 (第35図91)

91は銭貨の天聖元寶である。いわゆる北宋銭である。

A-2区SK-140 (第35図92・93)

92は中世陶器の碗である。体部は直線的な立ち上がりである。松井編年のⅢ-2期に比定される。93は中世陶器の小皿である。器形は偏平で、底部は突出する。松井編年のⅢ-3期に比定される。

A-2区SK-175 (第35図94)

94は土錘である。表面には指オサエ痕が見られる。

A-2区SK-187 (第35図95・96)

95は中世陶器の小皿である。偏平で、ロクロナデにより底部内面が突出している。松井編年のⅢ-2期に比定される。96は中世陶器の碗である。無高台で、底部は僅かに突出する。松井編年のⅢ-2期に比定される。

A-2区SK-203 (第35図97)

97は中世陶器の碗である。無高台で、底部は僅かに突出する。底部には墨書が見られるが、判読不能である(注4)。松井編年のⅢ-2・3期に比定される。

B-1区SK-20 (第35図98)

98は中世陶器の小皿である。底部には墨書が見られるが、判読不能である。松井編年のⅢ-2期に比定される。

B-1区SK-23 (第35図99)

99は中世陶器の碗で、無高台のものである。体部は直線的に立ち上がり、底部は僅かに突出する。口径が小さく、松井編年のⅢ-3期に比定される。

B-1区SK-36 (第35図100)

100は中世陶器の小皿で、非常に扁平なものである。松井編年のⅢ-3期に比定される。

B-1区SK-40 (第35図101~107)

101~106は土師器の皿である。内面はナデが施され、外面は指オサエ痕が顕著である。口径は8cm、器高は2cmにほぼ統一された、胎土・色調とも一致する規格品である。川井分類のD2類に比定される。107は銭貨で、元□通寶と読めるが鋳潰れが著しく銭種は不明である。

B-1区SK-58 (第35図108・109)

108は中世陶器の小皿である。底部には墨書が見られるが、判読不能である。松井編年のⅢ-2期に比定される。109は土師器の伊勢型鍋である。口縁部は折り返され、端部は強いヨコナデにより尖る。伊藤編年の第1段階に比定される。

B-1区SK-63 (第35図110)

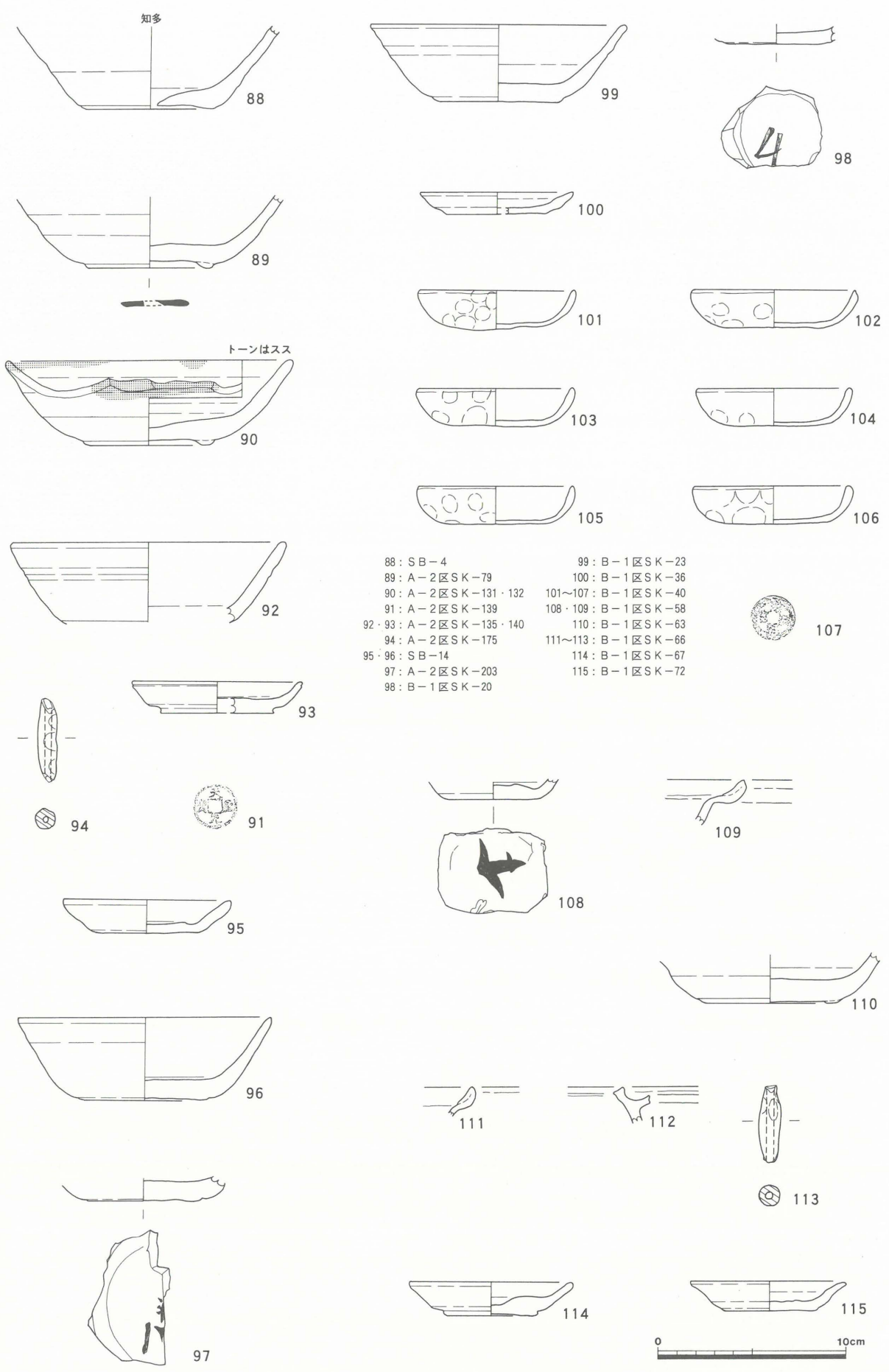
110は中世陶器の碗である。高台は著しく退化し一見無高台風である。松井編年のⅢ期に比定される。

B-1区SK-66 (第35図111~113)

111は土師器の伊勢型鍋である。口縁部の折り返しは幅が狭く、僅かに窪む。胎土には砂粒が目立つ。伊藤編年の第1段階に比定される。112は土師器の鍋で、羽釜形のものである。口縁端部は面を持ち、直下には罫を巡らせる。113は土錘である。外面には指オサエが見られる。

B-1区SK-67 (第35図114)

114は中世陶器の小皿である。器形は扁平で、底部は突出する。底部内面の中央は強い押しナデにより窪んでいる。松井編年のⅢ-2期に比定される。



- | | |
|------------------------|---------------------|
| 88 : SB-4 | 99 : B-1区SK-23 |
| 89 : A-2区SK-79 | 100 : B-1区SK-36 |
| 90 : A-2区SK-131・132 | 101~107 : B-1区SK-40 |
| 91 : A-2区SK-139 | 108・109 : B-1区SK-58 |
| 92・93 : A-2区SK-135・140 | 110 : B-1区SK-63 |
| 94 : A-2区SK-175 | 111~113 : B-1区SK-66 |
| 95 : SB-14 | 114 : B-1区SK-67 |
| 97 : A-2区SK-203 | 115 : B-1区SK-72 |
| 98 : B-1区SK-20 | |

第35図 出土遺物実測図一4 (1/3)

B-1区SK-72 (第35図115)

115は中世陶器の小皿である。体部は外反気味で、底部は僅かに突出する。松井編年の松井Ⅲ-3期に比定される。

B-1区SK-78 (第36図117・118)

117・118は須恵器の壺である。117は口縁部で、端部は断面三角形に肥厚する。全体に摩滅が著しい。118は体部で、外面には平行タタキ、内面にはナデが施される。

B-2区SK-30 (第36図119)

119は中世陶器の小皿である。器形は扁平で、松井編年のⅢ-2期に比定される。

B-2区SK-41 (第36図120~122)

120は中世陶器の碗である。器形は逆台形で、体部と底部との境界の屈曲は明瞭である。口縁端部には沈線が巡り、体部は直線的に立ち上がる。高台は断面方形を呈する。松井編年のⅢ-3期に比定される。121は銭貨の寛永通寶で、恐らく混入品である。122は土師器の伊勢型鍋である。口縁部の折り返しは幅が狭く、僅かに窪むことから伊藤編年の第1段階に比定される。

B-2区SK-45 (第36図123)

123は土師器の伊勢型鍋である。頸部の内面下部には指オサエ痕が見られ、口縁部は折り返しの幅が狭く僅かに窪むことから伊藤編年の第1段階に比定される。

B-2区SK-53 (第36図124・125)

124・125は土錘である。いずれも細形である。

B-2区SK-67 (第36図126)

126は陶丸である。外形は手づくねとナデにより多面体を呈する。胎土から渥美・湖西窯の製品と考えられる。

B-2区SK-97 (第36図127)

127は土師器の伊勢型鍋である。口縁部の折り返しは厚みが薄く、体部と境界はくの字に屈曲し前型式に見られたような頸部とは異なる。体部は外面に横方向のハケメ、内面に指オサエ及び板ナデが施される。全体に器壁が薄く胎土に小石粒が少ないことから、伊藤編年の第3段階に比定される。

B-2区SK-145 (第36図128)

128は銭貨の清和通寶である。いわゆる北宋銭で、遺存状況は良好である。

B-2区SK-156 (第36図129)

129は中世陶器の仏供で、瀬戸窯産のものと考えられる。坏部の器壁は薄く、体部は僅かに外反しており、内面底部は強い押しナデによって僅かに窪む。坏部から脚部への移行は滑らかで屈曲はあまり目立たない。脚部は円盤状の底部を持ち、回転糸切り痕が見られる。丁寧にロクロナデされ胎土は緻密で、他の中世陶器に比較して精製品とでも呼べるようなものである。無釉であるが、形態的には藤澤編年の古瀬戸中期の製品に類似し、それに近い時期のものと考えられる。

B-2区SK-160 (第36図130)

130は中世陶器の碗である。体部は直線的に立ち上がり、高台は潰れて断面形は半円形を呈し、接地面には刳殻痕がある。松井編年のⅢ-2期に比定されるものである。口縁部の一部が意図的に打ち欠かれており、内面全体、打ち欠きの破断面、及び外面の打ち欠き付近にスガが付着する。

B-2区SK-189 (第36図131)

131は土師器の伊勢型鍋である。口縁部の折り返しは幅が狭く、僅かに窪む。口縁端部には沈線を巡らせる。伊藤編年の第1段階に比定される。

B-2区SK-191 (第36図132)

132は常滑窯産の片口鉢である。口縁端部には面を持ち、内外面には板ナデが施される。中野編年の10型式期に比定される。

B-2区SK-197 (第36図133)

133は銭貨で、3枚が錆着している。銭種は不明だが、造りや重量などから輸入銭と考えられる。

B-2区SK-201 (第36図134)

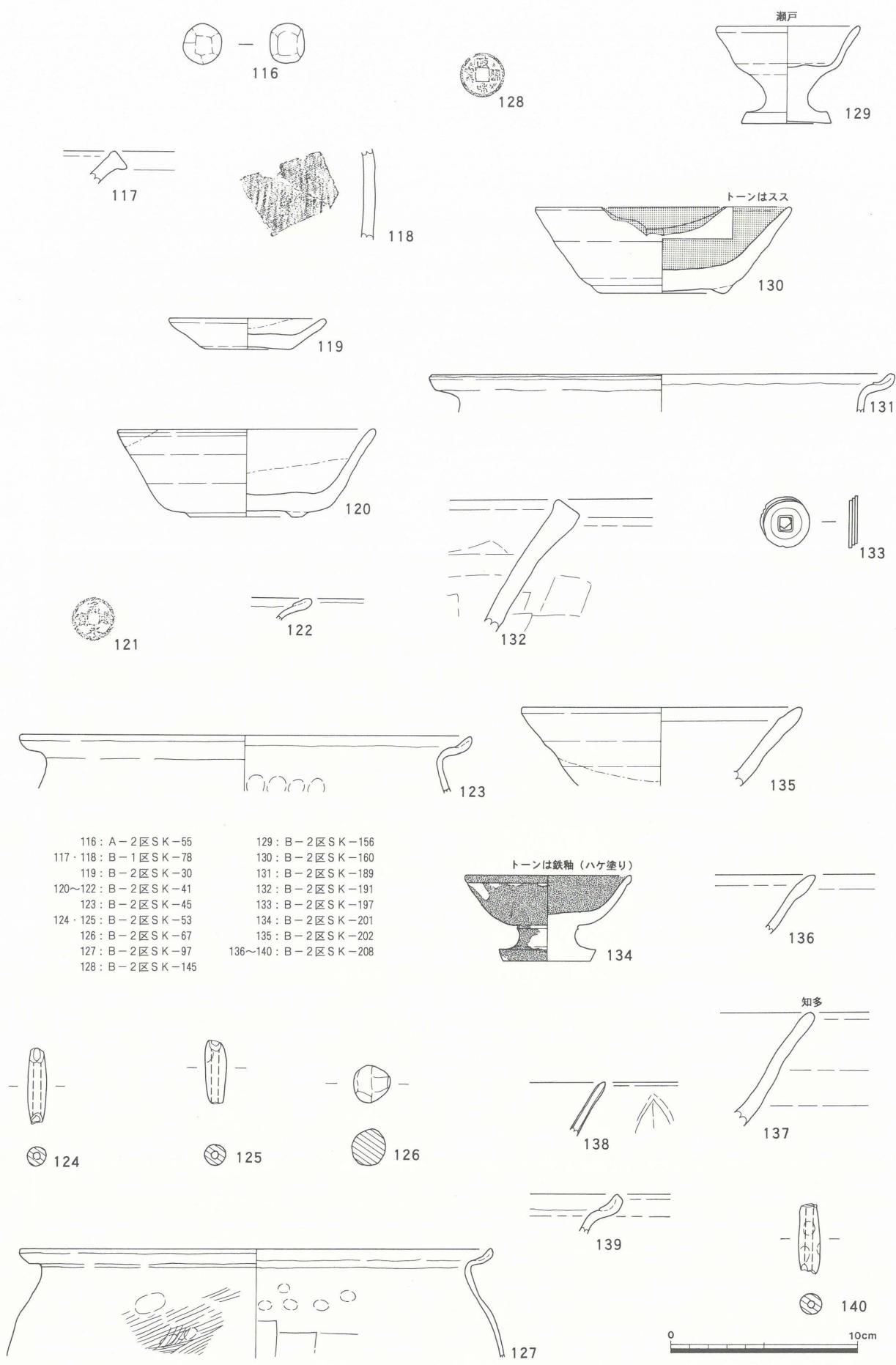
134は古瀬戸の仏供である。129に比較して坏部の立ち上がりは直線状で、坏部内面中央は押しナデにより窪む。脚部高は低く、円盤状の底部には回転糸切り痕が見られる。内外面には鉄（錆）釉がハケ塗りされており、完全に溶けきっていないため斑状を成している。古瀬戸後期Ⅱ期に比定される。

B-2区SK-202 (第36図135)

135は中世陶器の碗である。体部の立ち上がりは直線的で、外面には自然釉が広く掛かる。松井編年のⅢ-2期に比定される。

B-2区SK-208 (第36図136~140)

136は中世陶器の碗である。松井編年のⅢ-1期?に比定される。137は中世陶器の小型片口鉢である。内面はすり減り磨かれたような「使用痕」が認められる。知多窯産で、中野4型式期に比定される。138は輸入磁器の青磁蓮弁文碗である。龍泉窯系のもので、外面には片切彫りによる大きめの鎊



- | | |
|---------------------|----------------------|
| 116 : A-2区SK-55 | 129 : B-2区SK-156 |
| 117・118 : B-1区SK-78 | 130 : B-2区SK-160 |
| 119 : B-2区SK-30 | 131 : B-2区SK-189 |
| 120~122 : B-2区SK-41 | 132 : B-2区SK-191 |
| 123 : B-2区SK-45 | 133 : B-2区SK-197 |
| 124・125 : B-2区SK-53 | 134 : B-2区SK-201 |
| 126 : B-2区SK-67 | 135 : B-2区SK-202 |
| 127 : B-2区SK-97 | 136~140 : B-2区SK-208 |
| 128 : B-2区SK-145 | |

第36図 出土遺物実測図-5 (1/3)

蓮弁文が見られることから横田・森田分類のⅠ－5類に比定される。139は土師器の伊勢型鍋である。口縁部の折り返しは僅かに窪み、口縁端部はヨコナデにより面を形成する。伊藤編年の第1段階に比定される。140は土錘である。外面には指オサエ痕が見られる。

B－3区SK－30（第37図141～第38図174）

141は須恵器の壺の頸部～肩部付近である。外面には平行タタキ、内面にはナデが施されている。142～152は中世陶器の碗である。142は口縁部が僅かに外反し、143・144は直線的に立ち上がる。145は体部下半が緩く湾曲し、高台は方形気味である。強い口クロナデにより、底部内面が僅かに突出している。146～150はいずれも高台が潰れ気味である。146は底部内面の中央が押しナデにより僅かに窪む。150は底部に墨書が見られるが、判読不能である。高台には靱殻痕がある。151・152は無高台で、底部は内反り気味である。151の底部内面中央はわずかに窪む。142・143・145～152は松井編年のⅢ－2・3期、144は同Ⅲ期に比定される。153～155は中世陶器の小皿である。153は体部の立ち上がりが直線的であるのに対し、154は僅かに外反する。155は底部で、墨書が見られるが判読不能である。153・154は松井編年のⅢ－2期、155は同Ⅲ－2・3期に比定される。156は中世陶器の片口鉢で、口縁端部を丸く収めるものである。胎土から知多窯産と考えられ、中野編年の6a型式期に比定される。157～161は中世陶器の甕である。157・158は体部で、157には縦方向の板ナデと平行タタキが施され、明瞭な接合痕が観察される。158も外面には縦方向の板ナデが見られる。159～161は底部付近である。いずれも底部と体部との接合痕が明瞭である。160の外面には掌で押さえた際の指の跡が連続して見られ、内面には底部付近にナデが、上方にハケメ状の板ナデが施される。161は外面に縦方向のナデが施される。口縁部が遺存しないためこれらの年代は不明である。162は常滑窯産の甕で、色調は暗赤褐色を呈する。外面には縦方向のナデが施され、内面にはススが付着する。中野編年の9～11型式期に比定され混入品である。163は古瀬戸の折縁深皿である。口縁部は屈曲して水平に伸び、端部の断面形は丸味を帯びた方形を呈する。内外面に灰釉がハケ塗りされるが、底部外面付近は露胎である。古瀬戸前期末～中期初めに比定される。164・165は胎土から瀬戸窯産と考えられる鉢である。胎土・色調から同一個体と考えられるもので、口縁端部は僅かに窪んだ面を持ち、体部内面には板ナデ(?)が施される。166は常滑窯産の片口鉢である。口縁端部は肥厚し、面を持つ。注口部は幅広で張り出しが少なく、両脇に指オサエ痕が見られる。中野編年の10型式期に比定され、混入品であろう。167は古瀬戸の折縁皿である。器形は口縁部と体部との境で屈曲し、口縁部は指で押さえて波状にしている。内外面に灰釉が施される。古瀬戸後期に比定され、やはり混入品と考えられる。168は瀬戸美濃窯産の筒型香炉である。口縁部は肥厚し、端部に面を持つ。体部は直立し、外面及び内面の一部には黒褐色の鉄釉が施される。古瀬戸後期に比定され、当遺構上に掘り込まれた別遺構に伴うものである。169は輸入磁器の青磁蓮弁文碗である。170・171は銭貨で、共に北宋銭の元豊通寶である。170は1/3を欠損し、ねじ曲がっている。172・173は土師器の伊勢型鍋である。折り返しは幅が狭く、僅かに窪む。173は口縁端部に僅かに面を持つ。いずれも砂粒がやや目立ち、伊藤編年の第1段階に比定される。174は土師器の鍋で、羽釜形のものである。内外面にはヨコナデが施される。

B-3区SK-37 (第38図175)

175は瀬戸美濃系の内禿皿である。器形は比較的深く、体部は内湾し、底部内面には突出部を作る。高台は削り込みである。内外面に鉄釉が施されるが、底部内面の突出部ははぎ取られている。大窯第3段階に比定される。胎土が暗灰色を呈することから遠江の初山窯産と考えられる。

B-3区SK-41 (第38図176)

176は中世陶器の碗である。高台は潰れて扁平で、刳殻痕が見られる。松井編年のⅢ-2・3期に比定される。

C-1区SK-1 (第38図177)

177は中世陶器の小皿である。器形は扁平で、体部は直線的に立ち上がる。松井編年のⅢ-1期に比定される。

C-1区SK-22 (第38図178)

178は土師器の鍋で、半球形のものである。口縁端部は面を持ち、口縁付近は内湾する。

C-1区SK-38 (第38図179・180)

179は中世陶器の碗である。口縁端部は角張り、内側は僅かに窪む。口径から見て松井編年のⅢ-3期に比定される。180は土師器の皿である。摩滅が著しいが、ロクロ整形と思われ、色調は淡褐色を呈する。

C-2区SK-9 (第38図181)

181は土師器の甕である。外面には縦方向にハケメが、内面には横方向に板ナデが施される。胎土および調整から古墳～奈良時代のものと考えられる。

C-2区SK-21 (第38図182)

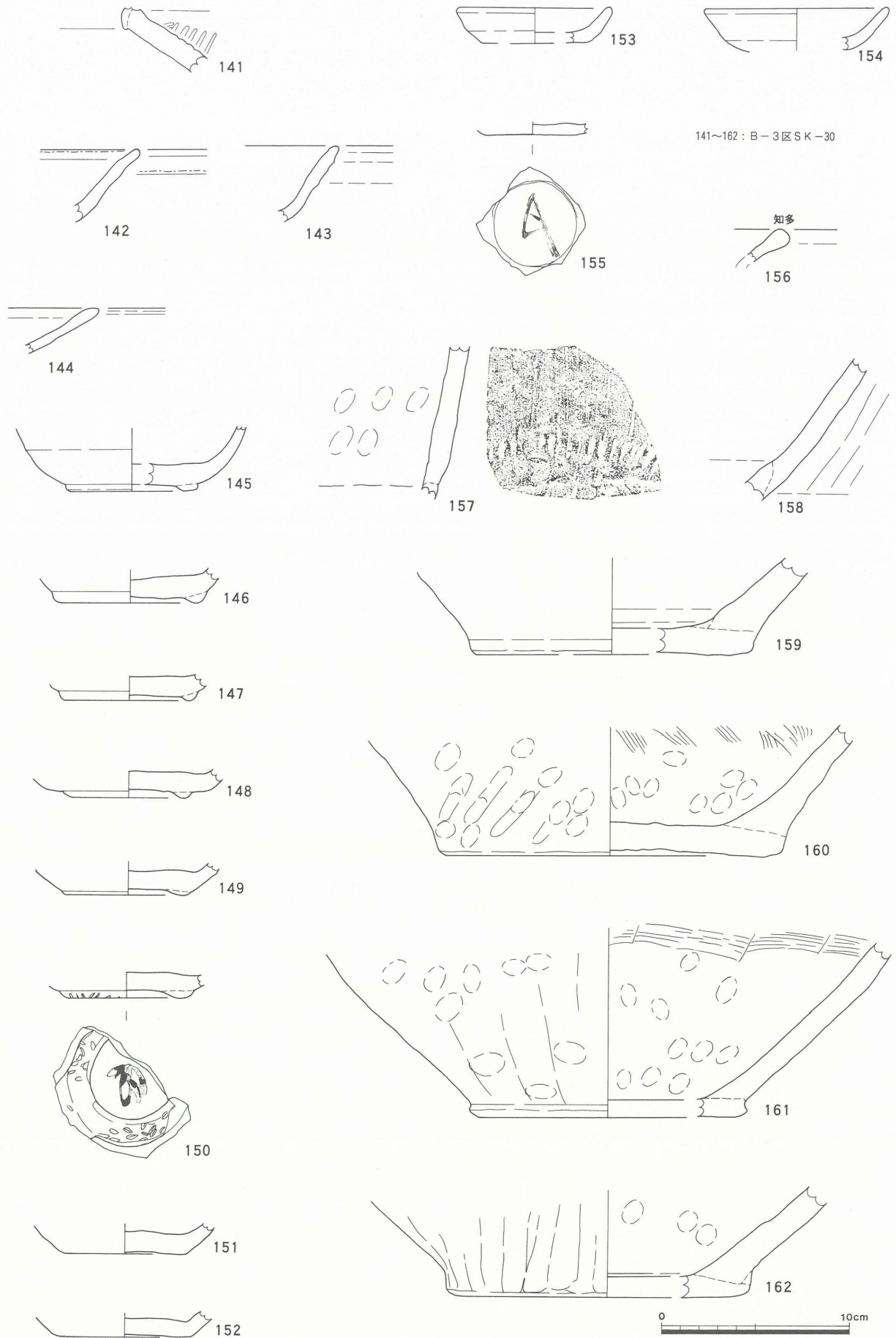
182は土師器の皿である。器形が深く器壁は厚めで、外面には指オサエ痕が明瞭に残り、内面口縁にも一部見られる。川井分類のD2類に比定され、その特徴から近世のものとする。

C-2区SK-79 (第38図183)

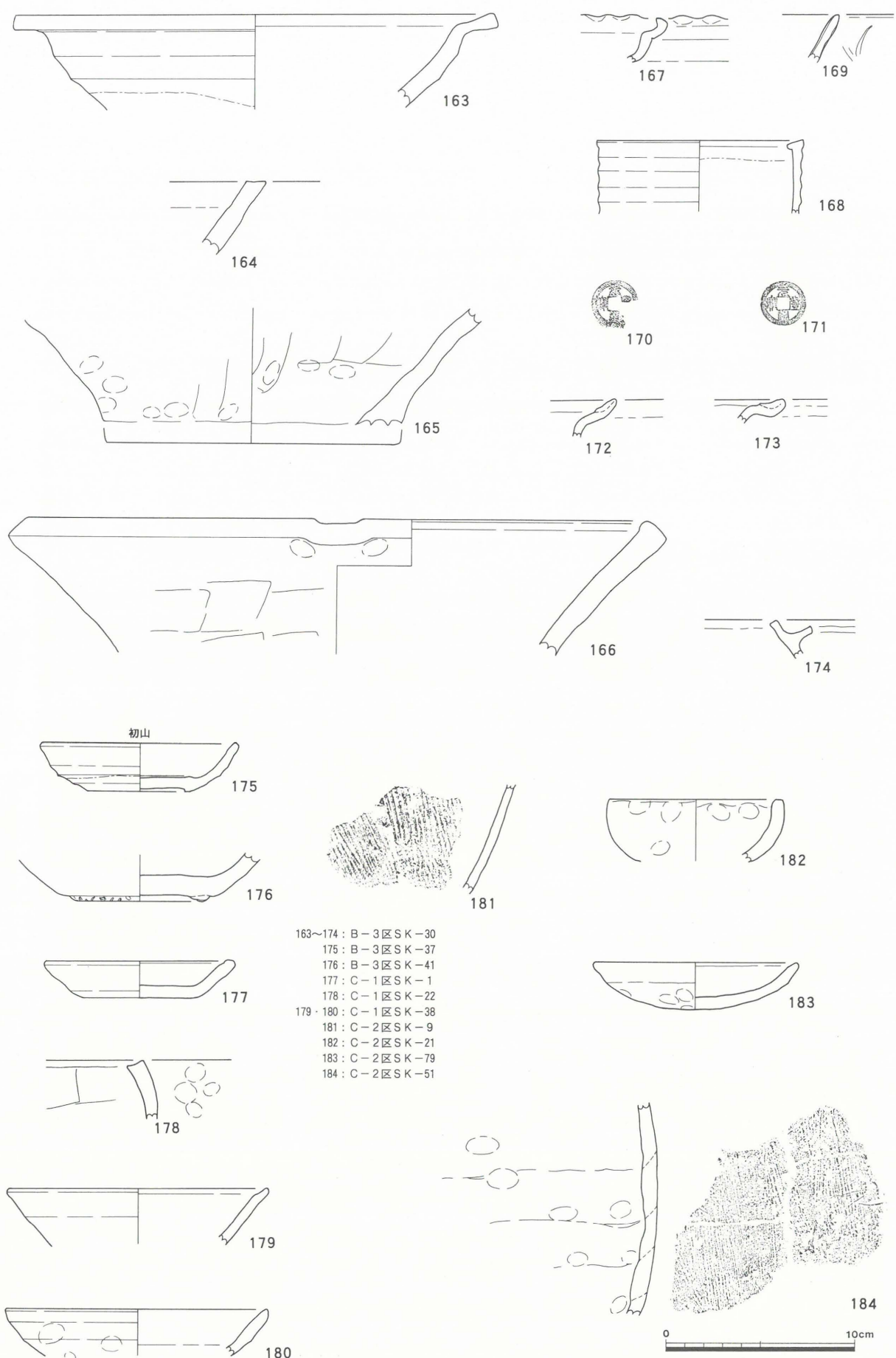
183は土師器の皿である。口縁部は強くヨコナデされて僅かに外反し、端部は面を持つ。底部外面には指オサエ痕が明瞭に見られる。赤木分類の土皿Dに比定され、近世のものと思われる。

C-2区SK-51 (第38図184)

184は土師器の甕の体部である。外面には縦方向にハケメが、内面にはナデが施される。また内面には粘土紐の輪積み痕が明瞭に見られる。胎土および調整から古墳時代のものと考えられる。



第37图 出土遺物実測図-6 (1/3)



- 163~174 : B-3区SK-30
- 175 : B-3区SK-37
- 176 : B-3区SK-41
- 177 : C-1区SK-1
- 178 : C-1区SK-22
- 179-180 : C-1区SK-38
- 181 : C-2区SK-9
- 182 : C-2区SK-21
- 183 : C-2区SK-79
- 184 : C-2区SK-51

第38图 出土遺物実測図-7 (1/3)

D-2区SK-1 (第39図185~188)

185・186は中世陶器の碗である。185は体部の立ち上がりが直線的で、口縁端部は僅かに面を持つ。高台は潰れて偏平である。186は高台から直線的に体部が立ち上がる。185は松井編年のⅢ-3期に、186は松井Ⅲ期にそれぞれ比定される。187・188は中世陶器の小皿である。187は偏平で、体部は直線的である。内面には灯芯の跡と考えられるススが付着しており、灯火具としての使用が推定される。188は体部が緩く外反し、底部は僅かに突出する。底部内面は押しナデにより僅かに窪む。187は松井編年のⅢ-2期に、188は同Ⅲ-1期にそれぞれ比定される。

D-2区SK-2 (第39図189~191)

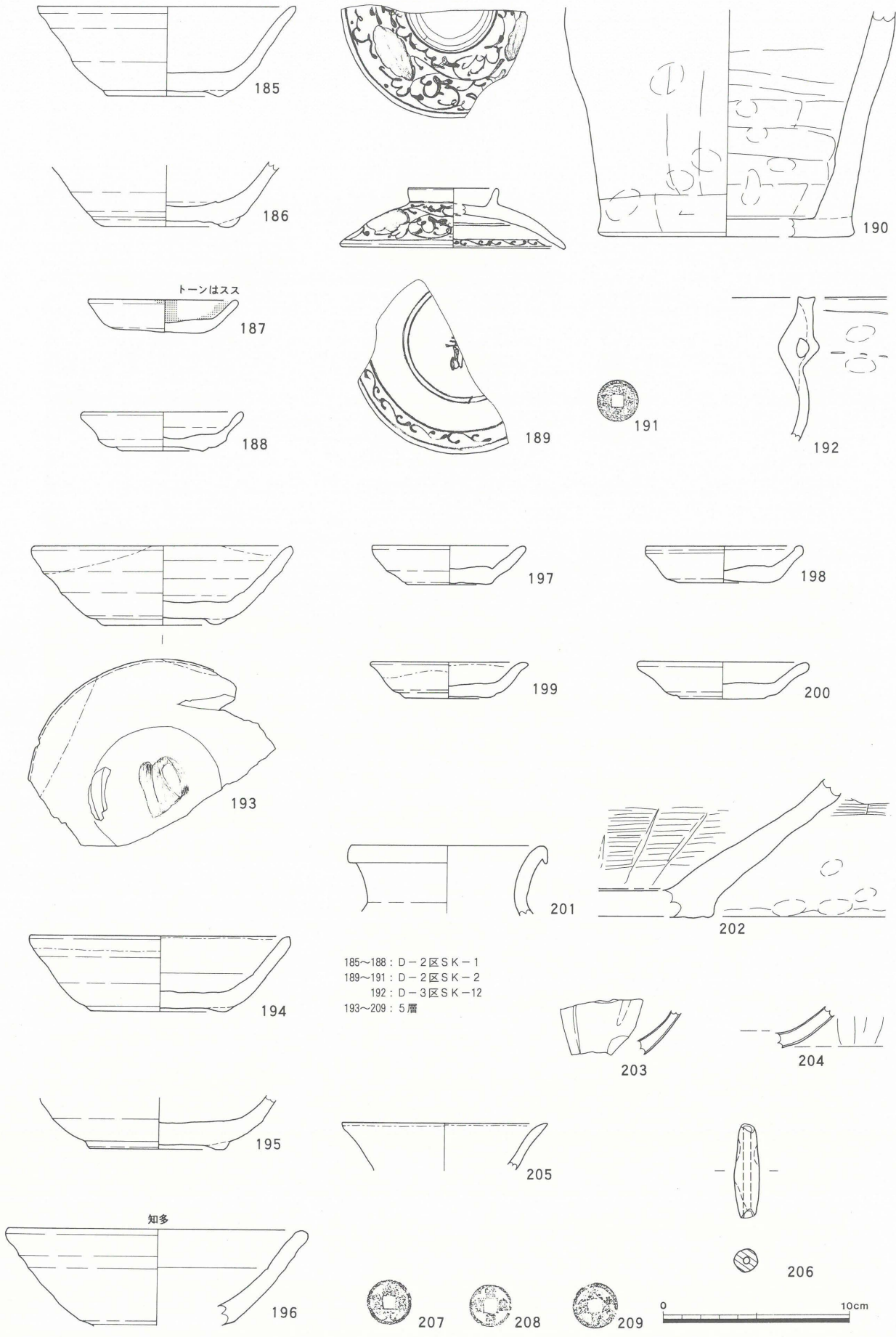
189は国産染付の蓋である。環状の紐を持ち、外面には雲状の表現が、内面には唐草模様と「寿」と考えられる文字が描かれる。190は常滑窯産の壺である。緩く湾曲した体部と平坦で大きな底部を持ち、外面には板ナデが、内面には横方向にナデが施される。色調が明茶褐色を呈するいわゆる赤もので、18~19世紀のものである。191は銭貨の寛永通寶で、鋳上がりは良好である。

D-3区SK-12 (第39図192)

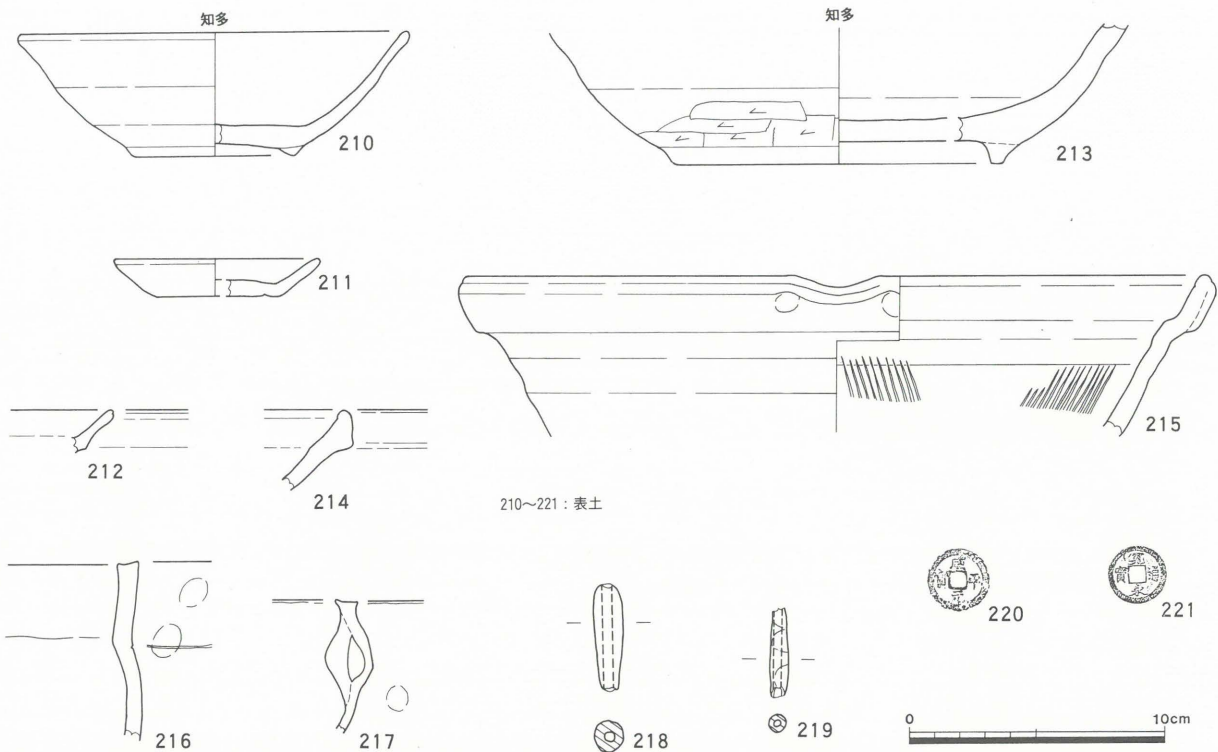
192は土師器の鍋で、内湾形口縁のものである。口縁端部は面を持ち、内耳を取り付ける際に指で押さえた痕跡が外面に残る。口縁部と頸部の2カ所に沈線が巡る。被熱のため外面の一部が赤く変色している。吉田城における出土傾向から16世紀後半のものとする(注5)。

5層 (第39図193~209)

193~196は中世陶器の碗である。193・194はいずれも偏平な器形で、高台は潰れて偏平であり、体部は器壁が厚手で直線的に立ち上がる。193の高台には粉殻痕が見られ、底部には墨書があるが判読不能である。195は高台の潰れが著しい。196は知多窯産で、器壁が厚く、色調は淡青灰色を呈する。長石・黒色粒を多く含む。193・194は松井編年のⅢ-3期に、195は同Ⅲ-2・3期に、196は中野編年の4型式期にそれぞれ比定される。197~200は中世陶器の碗である。197は体部が直線的で、底部は僅かに突出する。198は口縁端部に沈線が巡る。199・200は体部が外反し、底部は僅かに突出する。197~200はいずれも底部内面の中央が押しナデにより僅かに窪む。いずれも松井編年のⅢ-2期に比定される。201は中世陶器の四耳壺である。口縁は折り返して玉縁を成し、内外面には灰釉がハケ塗りされる。胎土から渥美窯産と推定される。施釉の状況から松井編年のⅠ期に併行するものであろうか。202は中世陶器の甕である。外面にはハケメ状の板ナデ及びナデが、内面にもハケメ状の板ナデが施される。203・204は輸入磁器の青磁蓮弁文碗である。いずれも龍泉窯系の製品で、外面に片切彫りの幅広な鎬蓮弁文があり、横田・森田分類のⅠ-5b類に相当する。205は輸入磁器の白磁内禿皿である。内外面に白磁釉が施されるが、口縁端部はカキ取られて露胎である。横田・森田分類のⅨ類に比定される。206は土錘である。外面には指オサエ痕が明瞭である。207~209は銭貨である。207は開元通寶で、唐銭である。摩滅が著しく文字面は潰れ判読しづらい。208は天聖元寶で、北宋銭である。やはり文字は潰れている。209は判読困難だが、元□通寶と読める。



第39図 出土遺物実測図-8(1/3)



第40図 出土遺物実測図-9 (1/3)

表土 (第40図210~221)

210は中世陶器の碗で、常滑窯産である。体部は緩く湾曲し、器壁は薄い。口縁端部はわずかに肥厚する。高台は断面形が小振りな三角形を呈する。中野編年の第5型式期に比定される。211・212は中世陶器の小皿である。211は非常に扁平で、底部は内反り気味である。212は体部が外反し、口縁端部には沈線が巡る。211は松井編年のⅢ-2期、212は同Ⅲ-1・2期に比定される。213は中世陶器の片口鉢で、胎土から見て知多窯産のものである。体部は緩く内湾し、高台は断面台形を呈する。調整は基本的にロクロナデであるが、底部外面付近には静止ヘラ削りが施される。中野4~5型式期に比定される。214・215は瀬戸美濃窯産の摺鉢である。214は口縁部の縁帯がまだ未発達なもので、外面には暗褐色の鉄釉が施される。215は口縁部を外側に折り返して縁帯を形成するもので、やはり内外面に鉄釉が施される。214は大窯第2段階、215は登窯6期にそれぞれ比定される。216・217は土師器の鍋である。216は内湾形口縁を持つもので、口縁端部は面を持ち、口縁部と体部との境(頸部)は内側では稜を成し、外側に一条の沈線を巡らせる。吉田城における出土傾向から16世紀後半のものとする(注6)。217は半球形のもので、口縁端部は面を成し、またヨコナデの際に端部を内側につまみ出している。218・219は土錘である。いずれも細形で、外面には指オサエ痕が見られる。220・221は銭貨である。220は北宋銭の咸平元寶で、遺存状況は良好である。221は寛永通寶で、鋳上がりは非常に良好である。

2. 自然遺物 (第41図、第6・7表)

B-3区SK-30は大型の廃棄土壌であり、埋土に混土貝層(破碎貝層)が存在する。これら採集貝類の種類を把握するため、7. 茶褐色混土貝層①、14. 暗茶褐色破碎貝層②の2カ所でサンプル採取

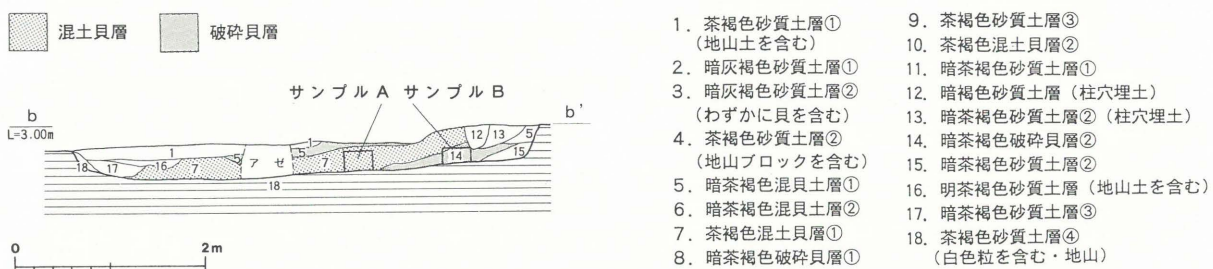
を実施した（第41図）。前者は30×30×20cm（18,000cm³:以下サンプルAと呼ぶ）、後者は30×30×15cm（13,500cm³:以下サンプルBと呼ぶ）の範囲を切り取り、それぞれフルイがけや水洗選別を行って自然遺物の検出につとめた。

サンプルBについては水洗選別がうまくいかず、土が玉状に残ってしまい微小遺物の検出が困難となった。また破碎貝層という性格上貝類の同定が不確実となる恐れがあるため、今回の検討からは除外することにした。またサンプルAについても、破片のため同定困難なものは検討から除き、確実に種類の判明したもののみを検討対象とした。この結果、データとしては不確定要素を多分に含むこととなってしまったが、おおよその傾向を説明する上では活用可能と考え、以下にその結果を示すことにする。

サンプルA

サンプルAは18,000cm³であるが、水洗選別により土を洗い流し、種類不明の貝殻破片を除去した結果、検討可能な貝殻は総重量6,777gとなった。この内貝の種類、およびその重量組成（%）を示したのが第6・7表である。

これによれば、重量組成を見た場合ハマグリが全体の74.82%を占め、以下シオフキの8.12%、カキ



第41図 B-3区SK-30の貝層サンプル採取地点 (1/80)

第6表 サンプルA検出の貝類一覧表

I. 軟体動物門 MOLLUSCA

腹足綱 GASTROPODA

- | | |
|------------------|--|
| 1. アクキガイ科アカニシ | <i>Rapana thomasi</i> CROSSE |
| 2. ニシキウズ科ダンベイキサゴ | <i>Umbonium (Suchium) Giganterm</i> LESSON |
| 3. タマガイ科ツメタガイ | <i>Neverita (Glossaulax) didyma</i> RODING |
| 4. ウミニナ科イボウミニナ | <i>Batillaria zonalis</i> BRUGUIERE |
| 5. ニシキウズ科キサゴ | <i>Umbonium (Suchium) costatum</i> KIENER |
| 6. ウミニナ科ヘナタリ | <i>Cerithidea (Cerithideopsilla) cingulata</i>
GMELIN |

斧足綱 PELECYPODA

- | | |
|------------------|---|
| 1. マルスダレガイ科ハマグリ | <i>Meretrix lusoria</i> RODING |
| 2. フネガイ科サルボウ | <i>Anadara (Scapharca) subcrenata</i> LISCHKE |
| 3. バカガイ科シオフキ | <i>Mactra veneriformis</i> REEVE |
| 4. イタボガキ科マガキ | <i>Crassostrea gigas</i> THUNBERG |
| 5. マルスダレガイ科アサリ | <i>Tapes (Amygdala) japonica</i> DESHAYES |
| 6. マルスダレガイ科オキシジミ | <i>Cyclina orientalis</i> SOWERBY |
| 7. マルスダレガイ科カガミガイ | <i>Dosinia (Phacosoma) japonica</i> REEVE |

第7表 サンプルA 検出貝類重量組成表 (注7)

貝種	ハマグリ	サルボウ	シオフキ	マガキ	アサリ	オキシジミ	カガミガイ	アカニシ	タベキキゴ	ツメタガイ	イボウミナ	キサゴ	ヘナタリ	計
重量	5,071	83	550	363	262	228	24	150	26	11	6	2	1	6,777
比率	74.82	1.22	8.12	5.36	3.87	3.36	0.35	2.21	0.38	0.16	0.08	0.03	0.01	99.97

※重量はg (グラム)、比率は%。

の5.36%、アサリの3.87%と続き、腹足綱であるヘナタリ、キサゴ、イボウミナなどはいずれも0.1%にも満たない。キサゴなどはそのみが集中して出土する例が他の遺跡で見られる(注8)が、当遺跡の場合は明らかに採集目的から外れていると判断される。貝種を見る限り、当貝層の場合は大抵が斧足綱で占められており、二枚貝(斧足綱)を採集目的としているといえよう。

判明した貝類は、内湾水域の砂質・砂泥質底に生息するものが多く、いずれも三河(渥美)湾において採集されたものと考えられる。またいずれも潮間帯、あるいは上部浅海帯でも比較的浅い所に生息することや、貝層自体が小規模なことから、遺跡に近い海岸～沖合いにおいて採集され、集落内で消費、あるいは加工のうえ商品として取り引きされたものの一部と想定される。貝種の重量組成は周辺に生息する貝類の量的比率を反映しているのか、あるいは単に選択的な採集の結果を反映しているのかは当サンプルのみの結果からでは不明と言わざるを得ないが、圧倒的多数を占めるハマグリが存在から、遺跡近辺の海岸部において行われた小規模な採集活動により獲得された状況を示すのではないかと考える(注9)。なお、今回の結果は縄文時代晩期の大西貝塚において確認された貝類組成の結果と比較的似ていることが指摘できる(注10)。

なお種類不明のため除外した貝殻片(破碎貝片)は、観察する限り斧足綱のものが多く腹足類は乏しいようである。よって種類不明の貝殻片の分類が仮に可能であったとしても、腹足綱の占める比率にさほど変化は無いと考えられる。また、貝類以外では魚骨が微量に検出されている。

サンプルB

サンプルAは13,500cm³である。前述のように大半が破碎貝であり、貝種の判定が困難であったため、分析からは外すことにした。ただしランダムな観察による限り、サンプルA同様斧足類が圧倒的に多く、腹足類は乏しいようである。この状況から、斧足類についてもあえて破碎し使用する利用法が想定される。

注1 知多の製品については、中野第6型式期においては猿投鳴海地区の製品とほぼ同質と言われている(中野1994)。従って現在の中世陶器の生産地域区分に厳密に従えば、今回知多窯産と推定した製品中に猿投窯の製品が含まれていないとは断言できない。しかし猿投鳴海地区が知多半島の基部に位置するという地理的な性格を考慮し、今回はすべて知多窯産の範疇に含めることとした。

注2 石材については豊橋市自然史博物館の家田健吾氏から御教示を得た。

- 注3 伊藤 恵 「第4章第3節 遺物」『豊橋市大岩町北山古墳群 豊橋市植田町大膳古窯址群』
豊橋市教育委員会 1968
- 注4 墨書土器については、(財)愛知県埋蔵文化財センターにおいて赤外線写真撮影を実施し、内容の検討を行った。その結果、すべての墨書が希薄で、木製品のように墨が内部まで浸透するようなものとは材質的に異なるためか、結果的に判読可能なものはなかった。なお赤外線写真撮影については、(財)愛知県埋蔵文化財センターの服部俊之氏の御協力をいただいた。
- 注5 赤木 剛 「第9章3.出土遺物について」『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第21集 吉田城址 (I)』 豊橋市教育委員会他 1994
- 注6 注3に同じ
- 注7 本来ならば各貝種ごとに個体数を数え、そこから貝類の組成を探るべきであるが、時間的・方法的な制約から、データを提示する上では不明確なこのような方法で分析を行った。従って今回の分析結果を個体数のカウントを伴う分析と対比させることは困難である。しかしおおよその傾向を探る上では活用可能と考えている。すなわち当サンプル中では斧足綱のものが圧倒的に多いこと、さらにその内でもハマグリのかかなりの優位性が指摘できること、内湾域に生息する貝種が大半であることなどである。
- 注8 豊橋市牟呂町市場遺跡他の発掘調査で確認している。この場合微小な貝を破碎した例が多く認められ、地元の住民からはかつてはこのような方法で肥料として使用したと聞いている。
- 注9 三河(渥美)湾海岸部ではかつて大量のハマグリが採集されたが、江戸時代以降の新田開発の激化や河川からの砂泥・家庭排水の流入などに伴う水質悪化によりその量は激減し、現在はアサリが主に採集されるようになっている。
- 注10 渡辺 誠他 「第6章 自然遺物」『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第19集 大西貝塚』
豊橋市教育委員会他 1995

参考文献

- 赤木 剛 「第9章3.出土遺物について」『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第21集 吉田城址 (I)』
豊橋市教育委員会他 1994
- 伊藤裕偉 「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history vol.1』
三重歴史文化研究会 1990
- 上田秀夫 「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究 No.2』
日本貿易陶磁研究会 1982
- 大橋康二 『肥前陶磁』 ニュー・サイエンス社 1993
- 川井啓介 「三河地域出土の土師器皿について」『年報 平成4年』
(財)愛知県埋蔵文化財センター 1993

- 後藤建一 「渥美・湖西中世古窯址群」『マージナル No.7』 愛知考古学談話会 1987
- 小林久彦 「東三河地域における古墳出土須恵器編年」『三河考古第6号 東三河の横穴式石室資料編』 三河考古学談話会古墳部会 1994
- 中野晴久 「近世常滑焼における甕の編年的研究ノート」『常滑市民俗資料館 研究紀要Ⅱ』 常滑市教育委員会 1986
- 中野晴久 「生産地における編年について」『全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集』 日本福祉大学知多半島総合研究所 1994
- 中野晴久 「知多（常滑）古窯址群の山茶碗について」『研究紀要 第3号』 三重県埋蔵文化財センター 1994
- 新田 洋 「中・南伊勢における中世土師器」『マージナル No.9』 愛知考古学談話会 1988
- 藤澤良祐 「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁 第8号』 東洋陶磁学会 1982
- 藤澤良祐 「本業焼の研究（3）」『研究紀要Ⅷ』 瀬戸市歴史民俗資料館 1989
- 藤澤良祐 「瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年－」『研究紀要Ⅹ』 瀬戸市歴史民俗資料館 1991
- 藤澤良祐 「第4章 瀬戸・美濃大窯の編年」『瀬戸市史 陶磁史篇4』 瀬戸市史編纂委員会 1993
- 藤澤良祐 「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要 第3号』 三重県埋蔵文化財センター 1994
- 藤澤良祐 「瀬戸古窯址群Ⅲ－古瀬戸前期様式の編年」『研究紀要 第3輯』 (財)瀬戸市埋蔵文化財センター 1995
- 松井一明 「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究 No.25』 静岡県考古学会 1993
- 森田 勉 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究 No.2』 日本貿易陶磁研究会 1982
- 横田賢次郎・森田勉 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究紀要4』 九州歴史資料館 1978
- 松島義章 「日本列島における後氷期の浅海性貝類群集」『神奈川県立博物館研究報告（自然化学）15』 神奈川県立博物館 1984

※人工遺物については、中野晴久、藤澤良祐、増山禎之、松井一明の各氏から、自然遺物については岩瀬彰利氏から有益な御教示を多々頂いた。ここに記し深く感謝致します。

第8表 出土遺物観察表

遺物 番号	地区名	遺構名	器種・分類	法 量			残存度%	胎 土	焼 成	色 調	調 整	備 考
				口 径	器 高	底 径						
1		S B-2	P 小皿	8.5	2.1	4.5	30	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り、 外面に自然釉	松井Ⅲ-2期
2		S B-2	H 伊勢型鍋		(1.6)		—	やや密	良好	褐色	内外面ヨコナデ、スス付着	伊藤第1段階
3		S B-2	T 折縁深皿	19.0	4.8	10.2	40	密	良好	淡褐色	内外面ロクロナデ・灰釉ハケ塗り、 底部ヘラ削り	古瀬戸中期 I ~Ⅱ期
4		B-3 S K-30	P 碗		(3.2)		—	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ	松井Ⅲ-2・3期
5		S B-7	P 碗		(4.3)		—	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部ヘラ削り	松井Ⅲ期
6		S B-7	S 壺		(2.4)		—	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、自然釉	
7		S B-7?	P 碗	14.5	5.0	5.5	40	密	良好	灰色	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り	松井Ⅲ-2期
8		S B-10	P 小皿(知多)	8.5	1.5		30	密	良好	淡灰白色	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り	中野6a期
9		S B-15	P 碗		(1.8)	7.0	20	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り	松井Ⅲ-2・3期
10		S B-15	P 碗	14.0	3.3		15	密	良好	灰色	内外面ロクロナデ、内面全体にスス	松井Ⅲ-2・3期
11		S B-15	P 小皿	8.8	2.1	5.0	60	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部外面ヘラ削り、 内面に墨の痕跡	松井Ⅲ-1・2期
12		S B-15	Z 蓮弁文碗		(3.7)		—	緻密	良好	青灰色	内外面に青磁釉、外面に鎬蓮弁文	龍泉系Ⅲ
13		S B-15	H 皿		(2.7)		—	やや密	やや不良	淡茶褐色	内外面ナデか、摩滅が著しい	在地製品か
14		S B-15	H 皿	11.0	2.4		70	やや密	良好	淡褐色	内面ナデ、外面指オサエ未調整	南伊勢系
15		S B-16	P 碗		(1.6)	8.0	10	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部切り放し後 ナデ	松井Ⅲ期
16		S B-18	D 土錘	長さ(3.2)、幅最大0.7、孔径0.4				密	良好	淡灰色	外面指オサエ、ナデ	
17		S B-20	P 壺(常滑)		(1.7)		—	密	良好	灰色	内外面ロクロナデ	中野5型式期
18		S B-21	P 碗	6.7	4.6	7.0	55	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り	松井Ⅲ-2期
19		S B-21	P 碗(知多)	14.0	4.5	6.0	20	密	良好	淡灰白色	内外面ロクロナデ、底部ヘラ削り、 高台に粗穀痕	中野6a型式
20		S B-21	P 碗		(3.0)	6.6	20	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り 後ナデ、高台に粗穀痕	松井Ⅲ-2・3期
21		S B-22	P 碗		(2.1)	7.8	20	密	良好	淡灰色	内外面ナデ、底部ヘラ削り	松井Ⅲ-2期
22		S B-22	P 碗		(2.6)	7.0	20	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り	松井Ⅲ-2・3期
23		S B-22	Z 蓮弁文碗		(4.0)		—	緻密	良好	淡灰色	内外面青磁釉、外面に鎬蓮弁文	龍泉系Ⅰ-5b
24		S B-22	X 製塩土器	長さ(4.9)			—	密	良好	淡赤白色	外面ナデ、指オサエ	
25		S B-22	X 製塩土器	長さ(7.0)			—	密	良好	淡褐色	外面ナデ、指オサエ	
26		S B-23	T 摺鉢		(12.0)		—	密	良好	淡褐色	内外面ロクロナデ、鉄釉	藤澤登窯6期
27		S B-23	D 土錘	長さ(6.3)、最大径2.2、孔径0.9				やや密	良好	橙褐色	外面ナデ	
28		S B-26	P 碗		(1.6)	6.0	5	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部ヘラ削り	松井Ⅲ期
29		S B-26	X 製塩土器	長さ(5.3)			—	やや密	良好	淡灰白色	外面ナデ・指オサエ	
30		S B-29	I 銭貨	径2.4、孔径0.7、厚さ0.1、重量3.2g							元豊通寶：北宋・元豊元(1078)年	
31		S B-30	T 天目茶碗		(4.75)		—	密	良好	淡褐色	内外面ロクロナデ、鉄釉	藤澤大窯3段階
32		S B-30	S 坏蓋				—	密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	小林第Ⅲ期中葉
33		S A-3	Z 蓮弁文碗		(2.0)		—	緻密	良好	青灰色	内外面青磁釉、外面に鎬蓮弁文	龍泉系Ⅲ
34		S A-3	D 土錘	長さ4.4、最大径0.75、孔径0.3				密	良好	橙褐色	外面ナデ・指オサエ	
35		S A-3	I 銭貨	径2.5、孔径0.7、厚さ0.8、重量2.2g							皇宋通寶：北宋・寶元2(1039)年	
36		S A-6	P 碗		(1.4)	6.5	15	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部ヘラ削り	松井Ⅲ期

※法量の数値はcm、()は残存数値。底径には脚部径・高台径を含む。

J-縄文土器、H-土師器、S-須恵器、P-中世陶器、T-陶器(古瀬戸以降)、Z-磁器、I-金属製品、R-石器・石製品、D-土製品、X-その他

遺物 番号	地区名	遺構名	器種・分類	法 量			残存度%	胎 土	焼 成	色 調	調 整	備 考
				口 径	器 高	底 径						
37		SA-8	H皿	12.6	2.5	10.5	90	密	良好	淡橙褐色	口縁内外面強いヨコナデ、底部内面ナデ、外面指オサエ未調整	赤木土皿E
38		SD-1	T碗		2.3	4.8	20	密	良好	淡褐色	外面回転ヘラ削り、高台削出し、内外面に鉄釉・高台付近は露胎	藤澤登窯6・7期
39		SD-1	H鍋				—	密	良好	茶褐色	内面ナデ、外面ナデ・指オサエ、スス	
40		SD-2	S坏蓋				20	密	良好	淡灰色	外面天井回転ヘラ削り、他は回転ナデ	
41		SD-2	T摺鉢		(3.5)		—	密	良好	淡褐色	内外面ロクロナデ・鉄釉	藤澤登窯4期?
42		SD-2	T摺鉢		(3.0)		—	密	良好	淡褐色	内外面ロクロナデ・鉄釉	藤澤登窯6期
43		SD-2	T鉢(肥前)		(2.0)		—	密	良好	淡灰褐色	内外面ロクロナデ・灰釉、内面に白化粧土による象嵌	
44		SD-2	T摺鉢		(3.5)	12.0	5	密	良好	淡褐色	内外面ロクロナデ・鉄釉、底部回転糸切り、内面及び破断面にスス	藤澤登窯期
45		SD-2	H皿	9.0	2.3	4.0	55	密	良好	淡褐色	内面ナデ・指オサエ、外面指オサエ未調整	川井D ₁ 類
46		SD-2	H皿	9.0	2.4	3.0	50	密	良好	褐色	内面ナデ、外面指オサエ未調整	川井D ₁ 類
47		SD-2	H皿	9.6	2.2		20	密	良好	淡褐色	内面ナデ、外面指オサエ未調整	川井D ₁ 類
48		SD-2	H皿	11.0	2.3	6.0	25	密	良好	淡褐色	内面ナデ、外面指オサエ未調整	川井D ₂ 類
49		SD-2	H皿	11.5	2.0	7.0	50	密	良好	淡褐色	内面板ナデ・口縁に面、外面指オサエ未調整	赤木土皿D
50		SD-2	H鍋		(2.5)		—	密	良好	淡褐色	内外面ナデ、外面にスス	
51		SD-2	H鍋		(4.5)		—	やや密	良好	淡褐色	内面ナデ、外面ナデ・指オサエ・スス	半球形
52		SD-2	H鍋				—	密	良好	淡褐色	内面ナデ、外面ナデ・指オサエ・スス	半球形
53		SD-2	Iキセル吸口	長さ5.7、最大径1.05、厚さ0.05							銅製	
54		SD-2	R磨製石斧	長さ(7.2)、幅(4.9)								塩基性岩
55		SD-2	R砥石	長さ(11.7)、幅4.3、厚さ3.2								凝灰岩
56		SD-3	T摺鉢		(4.6)	13.0	10	密	良好	淡灰褐色	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り、内面全体にスス	登窯期
57		SD-3	T柱 <small>(ひょうそく?)</small>				—	密	良好	淡褐色	内外面ナデ・灰釉	登窯期
58		SD-3	T甕(常滑)				—	やや密	良好	橙褐色	口縁内外面ロクロナデ、体部外面板ナデ、内面に褐色の付着物(肥甕)	明治時代 混入品
59		SD-3	Z碗		5.5	4.6	60	緻密	良好	淡褐白色	内面に顕著なロクロナデ、外面に具須絵	
60		SD-3	H皿	11.0	2.3		40	密	良好	淡褐色	内面ナデ、外面手づくね未調整	川井D ₂ 類
61		SD-3	H鍋				—	やや密	良好	淡茶褐色	内外面ナデ、外面にスス	半球形
62		SD-5	J(底部)				—	粗	不良	茶褐色	摩滅が著しい	条痕文土器
63		SD-5	S坏蓋				10	やや密	良好	灰色	内外面ロクロナデ	
64		SD-5	P碗	16.0	5.6	7.0	70	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部ヘラ削り後ナデ	松井I-2~ II期
65		SD-5	P碗	16.0	5.4	7.5	50	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部ヘラ削り、内面底にスス	松井II期
66		SD-5	P碗	15.4	5.0	7.6	45	やや密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り後ナデか	松井II~ III-I期
67		SD-5	P碗	14.8	(4.1)	6.8	25	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り	松井III-2期
68		SD-5	P碗	15.8	(3.0)		10	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、外面にスス	松井II期
69		SD-5	P碗		(4.0)		—	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、自然釉	松井III期
70		SD-5	P碗		(3.1)	3.5	40	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部切り放し後ナデか、内面の一部にスス	松井III-1期
71		SD-5	P碗		3.7	6.6	45	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部切り放し後ナデ、内面にスス?	松井III-2・3期

※法量の数値はcm、()は残存数値。底径には脚部径・高台径を含む。

J-縄文土器、H-土師器、S-須恵器、P-中世陶器、T-陶器(古瀬戸以降)、Z-磁器、I-金属製品、R-石器・石製品、D-土製品、X-その他

遺物 番号	地区名	遺構名	器種・分類	法 量			残存度%	胎 土	焼 成	色 調	調 整	備 考
				口 径	器 高	底 径						
72		SD-5	P碗	1.6	7.0	10	密	良好	灰色	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り	松井Ⅲ-2・3期	
73		SD-5	P片口碗	(3.5)		—	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ	松井Ⅱ期	
74		SD-5	P片口鉢	(8.0)	10.0	10	密	良好	淡灰色	内面ロクロナデ・底部付近板ナデ、 外面削り後ロクロ利用の板ナデ	松井Ⅱ期	
75		SD-5	Z口禿皿	(3.0)		—	密	良好	淡灰白色	内外面に釉・口縁端部の釉を剥ぐ	白磁Ⅲ類	
76		SD-5	H伊勢型鍋	(3.3)		—	密	良好	淡茶褐色	内外面にヨコナデ、頸部外面に沈線 外面に漆状物付着	伊藤第1段階	
77	AA-1	SK-7	H皿	(1.6)	3.5	15	やや密	やや不良	淡褐色	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り	川井B類	
78	AA-1	SK-20	R砥石	長さ(5.7)、幅(5.3)、厚さ(3.8)							ホルンフェルス?	
79	AA-2	SK-2	D土錘	長さ(3.5)、最大径0.75、孔径0.4			密	やや良	淡灰色	外面ナデ・指オサエ		
80	A-1	SK-10	P小皿	8.0	1.8	40	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底へら削り、 口唇部に沈線	松井Ⅲ-3期	
81	A-1	SK-11	J深鉢	(3.0)		—	粗	やや良	淡茶褐色	摩滅が著しい	条痕文土器	
82	A-1	SK-20	P碗	(1.5)	7.0	15	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り	松井Ⅲ-2・3期	
83	A-1	SK-20	P片口鉢 (瀬戸)	32.0	(10.2)	15	密	良好	濃灰色	内面ナデ、外面ロクロナデ後縦方向の へら削り、次いで横方向のへら削り	古瀬戸後期?	
84	A-1	SK-34	H伊勢型鍋	(2.7)		—	やや密	良好	暗茶褐色	内外面ヨコナデ	伊藤第1段階	
85	A-2	SK-10	P碗	(3.9)		—	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ・自然釉	松井Ⅲ-2・3期	
86	A-2	SK-10	P小皿	(2.0)	3.0	10	密	良好	淡灰白色	内外面ロクロナデ、底部回転へら切り	松井Ⅲ-1期?	
87	A-2	SK-10	D土錘	長さ5.15、最大径0.95、孔径0.5			密	良好	淡橙褐色	外面ナデ・指オサエ		
88		SB-4	P碗(知多)	(4.3)	7.0	40	やや密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り、 強い押しナデにより底部内面に孔	中野6a型式期	
89	A-2	SK-79	P碗	(3.5)	6.5	40	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り、 墨書「一」	松井Ⅲ-2・3期	
90	A-2	SK-131 ・132	P碗	15.5	4.5	6.5	70	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部へら削り、 口縁部に意図的な打ち欠き・スス	松井Ⅲ-2期
91	A-2	SK-139	I銭貨	径2.4、孔径0.7、厚さ0.1、重量2.6						天聖元寶：北宋・天聖元(1023)年		
92	A-2	SK-135-140	P碗	14.6	(4.3)		10	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ	松井Ⅲ-2期
93	A-2	SK-135-140	P小皿	9.0	1.7	6.0	5	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部へら削り	松井Ⅲ-3期
94	A-2	SK-175	D土錘	長さ4.4、最大(1.1)、孔径(3.0)			やや密	やや良	淡褐色	外面ナデ、指オサエ		
95		SB-14	P小皿	8.8	1.8	5.0	60	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り	松井Ⅲ-2期
96		SB-14	P碗	13.4	4.4	6.8	70	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部へら削り	松井Ⅲ-2期
97	A-2	SK-203	P碗	(1.2)	6.0	10	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り、 底部外面に墨書(判読不能)	松井Ⅲ-2・3期	
98	B-1	SK-20	P小皿	(0.8)	5.0	10	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部へら削り、 底部外面に墨書(判読不能)	松井Ⅲ-2期	
99	B-1	SK-20	P碗	13.0	4.1	6.0	95	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部へら削り	松井Ⅲ-3期
100	B-1	SK-36	P小皿	8.0	1.1		25	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部へら削り	松井Ⅲ-3期
101	B-1	SK-40	H皿	8.0	2.0	6.0	100	やや密	良好	淡褐色	内面ナデ、外面指オサエ・未調整	川井D ₂ 類
102	B-1	SK-40	H皿	8.5	2.0	5.0	100	やや密	良好	淡褐色	内面ナデ、外面指オサエ・未調整	川井D ₂ 類
103	B-1	SK-40	H皿	8.0	2.0	5.0	99	やや密	良好	淡褐色	内面ナデ、外面指オサエ・未調整	川井D ₂ 類
104	B-1	SK-40	H皿	8.0	2.0	5.0	98	やや密	良好	淡褐色	内面ナデ、外面指オサエ・未調整	川井D ₂ 類
105	B-1	SK-40	H皿	8.0	2.0	5.0	100	やや密	良好	淡褐色	内面ナデ、外面指オサエ・未調整	川井D ₂ 類
106	B-1	SK-40	H皿	8.0	2.0	6.0	100	やや密	良好	淡褐色	内面ナデ、外面指オサエ・未調整	川井D ₂ 類
107	B-1	SK-40	I銭貨	径2.4、孔径0.65、厚さ0.1、重量2.7g						元口通寶		

※法量の数値はcm、()は残存数値。底径には脚部径・高台径を含む。

J—縄文土器、H—土師器、S—須恵器、P—中世陶器、T—陶器(古瀬戸以降)、Z—磁器、I—金属製品、R—石器・石製品、D—土製品、X—その他

遺物 番号	地区名	遺構名	器種・分類	法 量			残存度%	胎 土	焼 成	色 調	調 整	備 考
				口 径	器 高	底 径						
108	B-1	SK-58	P小皿	(0.9)	5.0	10	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部回転 ヘラ削り、底部外面に墨書(判読不能)	松井Ⅲ-2期	
109	B-1	SK-58	H伊勢型鍋	(2.5)		—	やや密	良好	暗褐色	内外面ヨコナデ		
110	B-1	SK-63	P碗	(2.7)	7.0	25	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部ヘラ削り	松井Ⅲ期	
111	B-1	SK-66	H伊勢型鍋	(1.5)		—	やや粗	良好	淡褐色	内外面ヨコナデ	伊藤第1段階	
112	B-1	SK-66	H鍋	(1.8)		—	やや密	良好	淡褐色	内外面ナデ	羽釜形	
113	B-1	SK-66	D土錘	長さ(4.0)、最大径1.1、孔径0.4			やや密	良好	橙褐色	外面ナデ・指オサエ		
114	B-1	SK-67	P小皿	8.5	1.8	5.0	60	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り	松井Ⅲ-2期
115	B-1	SK-72	P小皿	8.5	1.6	5.0	40	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部ヘラ削り	松井Ⅲ-3期
116	A-2	SK-55	D陶丸	径2.1			100	密	良好	淡灰白色	外面ナデ、黒色粒が目立つ	
117	B-1	SK-78	S壺	(1.8)		—	密	やや不良	淡灰色	内外面回転ナデか		
118	B-1	SK-78	S壺			—	密	良好	淡灰色	内面ナデ、外面平行タタキ		
119	B-2	SK-30	P小皿	8.0	1.6	5.0	30	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り	松井Ⅲ-2期
120	B-2	SK-41	P碗	13.8	4.7	6.0	70	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ・自然釉、底部 回転糸切り、口縁に浅い沈線	松井Ⅲ-3期
121	B-2	SK-41	I銭貨	径2.4、孔径0.5、厚さ0.1、重量3.2g						寛永通寶	混入品	
122	B-2	SK-41	H伊勢型鍋	(1.5)		—	やや密	良好	褐色	内外面ヨコナデ	伊藤第1段階	
123	B-2	SK-41	H伊勢型鍋	(3.0)		5	やや粗	良好	暗褐色	内外面ナデ、内面頸部下に指オサエ、 外面にスス	伊藤第1段階	
124	B-2	SK-53	D土錘	長さ(4.1)、最大径1.0、孔径0.4			やや粗	良好	明橙褐色	外面ナデ、指オサエ		
125	B-2	SK-53	D土錘	長さ(3.4)、最大径1.1、孔径0.4			密	良好	灰白色	外面ナデ、指オサエ		
126	B-2	SK-67	D陶丸	径1.95			100	密	良好	淡灰白色	外面ナデ	
127	B-2	SK-97	H伊勢型鍋	25.0	(5.8)		5	密	良好	淡褐白色	口縁内外面ヨコナデ、体部内面 板ナデ・指オサエ、外面ハケメ・スス	伊藤第3段階
128	B-2	SK-145	I銭貨	径2.4、孔径0.65、厚さ0.12、重量2.2g						政和通寶：北宋・政和元(1111)年		
129	B-2	SK-156	P仏供(瀬戸)	7.8	5.2	4.8	70	緻密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り、 内面底部中央を強く押しナデ	古瀬戸中期併行
130	B-2	SK-160	P碗	13.8	4.6	7.0	85	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部ヘラ削り、 高台に糊ガラ痕、内面・割れ口にスス	松井Ⅲ-2期
131	B-2	SK-189	H伊勢型鍋	25.0	(2.0)		5	密	良好	暗褐色	口縁内外面ヨコナデ、外面にスス	伊藤第1段階
132	B-2	SK-191	T片口鉢(常滑)	(7.0)		—	やや密	良好	茶褐色	内面板ナデ、外面は口縁ヨコナデ、 体部は板ナデ	中野10型式期	
133	B-2	SK-197	I銭貨	重量10.3g						3枚が錆着、銭種不明		
134	B-2	SK-201	T仏供	9.0	4.6	4.8	65	密	良好	淡褐色	内外面ロクロナデ・鉄(錆)釉ハケ 塗り、底部回転糸切り痕	古瀬戸後期Ⅱ期
135	B-2	SK-202	P碗	15.0	(4.1)		15	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ・自然釉	松井Ⅲ-2期
136	B-2	SK-208	P碗	(3.0)		—	密	良好	灰白色	内外面ロクロナデ・自然釉	松井Ⅲ-1期?	
137	B-2	SK-208	P片口鉢(知多)	(6.0)		—	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、内面に使用痕	中野4型式期	
138	B-2	SK-208	Z蓮弁文碗	(3.0)		—	緻密	良好	青灰色	内外面に青磁釉、外面に鎚蓮弁文	龍泉系Ⅰ-5b	
139	B-2	SK-208	H伊勢型鍋	(2.0)		—	やや粗	良好	暗褐色	口縁部内外面ヨコナデ	伊藤第1段階	
140	B-2	SK-208	D土錘	長さ(3.8)、最大径1.1、孔径0.4			やや密	良好	淡赤白色	外面ナデ、指オサエ		
141	B-3	SK-30	S甕			—	やや密	良好	淡灰色	内面ナデ、外面平行タタキ		
142	B-3	SK-30	P碗	(3.8)		—	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ・自然釉	松井Ⅲ-2・3期	
143	B-3	SK-30	P碗	(4.0)		—	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ	松井Ⅲ-2・3期	
144	B-3	SK-30	P碗	(2.4)		—	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、口縁に沈線	松井Ⅲ期	

※法量の数値はcm、()は残存数値。底径には脚部径・高台径を含む。

J-縄文土器、H-土師器、S-須恵器、P-中世陶器、T-陶器(古瀬戸以降)、Z-磁器、I-金属製品、R-石器・石製品、D-土製品、X-その他

遺物 番号	地区名	遺構名	器種・分類	法 量			残存度%	胎 土	焼 成	色 調	調 整	備 考
				口 径	器 高	底 径						
145	B-3	SK-30	P 碗		(3.4)	7.0	10	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部切り放し後ナデ	松井Ⅲ-2・3期
146	B-3	SK-30	P 碗		(1.8)	7.7	15	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部切り放し後ナデ	松井Ⅲ-2・3期
147	B-3	SK-30	P 碗		(1.8)	6.9	15	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部切り放し後ナデ	松井Ⅲ-2・3期
148	B-3	SK-30	P 碗		(1.5)	6.4	10	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部ヘラ削り	松井Ⅲ-2・3期
149	B-3	SK-30	P 碗		(1.8)	6.8	15	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り後ナデ	松井Ⅲ-2・3期
150	B-3	SK-30	P 碗		(1.4)	6.5	10	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り・外面に墨書(判読不能)、高台に粉殻痕	松井Ⅲ-2・3期
151	B-3	SK-30	P 碗		(1.6)		20	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り	松井Ⅲ-2期
152	B-3	SK-30	P 碗		(1.4)	7.0	15	密	良好	灰色	内外面ロクロナデ、底部ヘラ削り後ナデ	松井Ⅲ-2・3期
153	B-3	SK-30	P 小皿	8.4	1.9		20	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ	松井Ⅲ-2期
154	B-3	SK-30	P 小皿	10.0	(2.3)		15	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ	松井Ⅲ-2期
155	B-3	SK-30	P 小皿		(0.6)	4.4	15	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ、底部外面に墨書(判読不能)	松井Ⅲ-2・3期
156	B-3	SK-30	P 片口鉢(知多)		(1.5)		—	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ	中野6a型式期
157	B-3	SK-30	P 甕				—	密	良好	暗灰色	内面ナデ・指オサエ、外面板ナデ・併行タタキ	
158	B-3	SK-30	P 甕		(8.5)		—	密	良好	暗灰色	内面ナデ、外面板ナデ	
159	B-3	SK-30	P 甕		(5.1)	14.6	3	密	良好	灰色	内面ロクロナデ、外面ナデ、底部未調整	
160	B-3	SK-30	P 甕		(6.8)	18.5	5	密	良好	淡灰色	内面板ナデ・ナデ、外面ナデ・指オサエ、底部外面未調整	生焼け気味
161	B-3	SK-30	P 甕		(9.3)	15.0	5	密	良好	暗灰色	内面板ナデ後底部付近ナデ、外面ナデ、底部未調整	
162	B-3	SK-30	P 甕(常滑)				3	密	良好	暗赤褐色	内外面ナデ、底部外面未調整、内面にスス	中野9~11型式期
163	B-3	SK-30	T 折縁深皿	25.6	4.8		10	密	良好	淡褐色	内外面ロクロナデ・灰釉ハケ塗り、外面底部付近回転ヘラ削り	古瀬戸前期Ⅳ期 ~中期Ⅰ期
164	B-3	SK-30	T 鉢		(3.5)		—	密	良好	淡褐色	内外面ナデ	古瀬戸か
165	B-3	SK-30	T 鉢		(6.3)	15.6	10	密	良好	淡褐色	内外面ナデ(内面は板ナデ?)、使用痕あり	164と同一品
166	B-3	SK-30	T 片口鉢 (常滑)	33.2	(7.2)		5	密	良好	暗茶褐色	口縁付近内外面横方向のナデ、外面横方向の板ナデ	中野10型式期
167	B-3	SK-30	T 折縁皿		(2.5)		—	密	良好	淡褐色	内外面ロクロナデ・灰釉、口縁部を指で押さえて波状に	古瀬戸後期
168	B-3	SK-30	T 筒形香炉	11.0	(3.8)		30	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、内面口縁付近及び外面に鉄釉	古瀬戸後期
169	B-3	SK-30	Z 蓮弁文碗		(2.5)		—	緻密	良好	青灰色	内外面に青磁釉、外面に鎊蓮弁文	
170	B-3	SK-30	I 銭貨	径2.5、孔径0.7、厚さ0.1、重量3.0g							元豊通寶：北宋・元豊元(1078)年	
171	B-3	SK-30	I 銭貨	径2.4、孔径0.6、厚さ0.15、重量3.1g							元豊通寶：北宋・元豊元(1078)年	
172	B-3	SK-30	H 伊勢型鍋		(1.8)		—	やや密	良好	淡褐色	内外面ヨコナデ、外面にスス	伊藤第1段階
173	B-3	SK-30	H 伊勢型鍋		(1.1)		—	やや密	良好	淡褐色	内外面ヨコナデ、口縁端部外面に面、外面にスス	伊藤第1段階
174	B-3	SK-30	H 鍋				—	やや密	良好	淡褐色	内外面ヨコナデ、外面の一部にスス	羽釜形
175	B-3	SK-37	T 内禿皿 (初山)	10.6	2.55	5.5	50	密	良好	暗灰色	内外面ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、高台削り込み	大窯第3段階

※法量の数値はcm、()は残存数値。底径には脚部径・高台径を含む。

J—縄文土器、H—土師器、S—須恵器、P—中世陶器、T—陶器(古瀬戸以降)、Z—磁器、I—金属製品、R—石器・石製品、D—土製品、X—その他

遺物 番号	地区名	遺構名	器種・分類	法 量			残存度%	胎 土	焼 成	色 調	調 整	備 考
				口 径	器 高	底 径						
176	B-3	SK-41	P碗		(2.5)	7.0	20	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部切り放し後ナデ?、高台に靱殻痕。	松井Ⅲ期
177	C-1	SK-1	P小皿	10.0	2.0	6.0	15	密	良好	淡灰褐色	内外面ロクロナデ、底部ヘラ削り	松井Ⅲ-1期
178	C-1	SK-22	H鍋		(2.9)		—	密	良好	淡茶褐色	内面板ナデ、外面ナデ・指オサエ	半球形
179	C-1	SK-38	P碗	14.0	(3.0)		15	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ	松井Ⅲ-3期
180	C-1	SK-38	H皿	14.0	(2.5)		20	やや密	良好	淡褐色	内外面ロクロナデか、外面に指オサエ	
181	C-2	SK-9	H甕				—	やや粗	やや良好	暗橙色	内面板ナデ、外面ハケメ・スス	古墳~奈良
182	C-2	SK-21	H皿	8.2	(3.2)		30	やや密	良好	淡橙褐色	内面ナデ、外面ナデ・指オサエ・未調整	
183	C-2	SK-79	H皿	11.0	2.6		55	やや密	良好	淡褐色	内面ナデ・口縁端部に面、外面指オサエ・口縁ヨコナデ	赤木土ⅢD
184	C-2	SK-51	H甕		11.5		—	密	良好	淡褐色	内面ナデ・指オサエ・輪積み痕、外面ハケメ	古墳
185	D-2	SK-1	P碗	14.0	4.8	6.0	45	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り後ナデ	松井Ⅲ-3期
186	D-2	SK-1	P碗		3.3	7.0	50	やや密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部ヘラ削り	松井Ⅲ期
187	D-2	SK-1	P小皿	8.2	1.8	5.0	95	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ・ススが3カ所に分かれ付着、底部回転糸切り後ナデ	松井Ⅲ-2期 燈明皿?
188	D-2	SK-1	P小皿	8.8	2.1	4.5	55	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ・口縁端部に自然釉、底部回転糸切り	松井Ⅲ-1期
189	D-2	SK-2	Z蓋	12.0	3.2	5.0	50	緻密	良好	白色	内外面に呉須絵、内面天井に「寿」?	
190	D-2	SK-2	T壺(常滑)		(12.3)	13.8	10	やや密	良好	明茶褐色	内面ナデ・指オサエ、外面板ナデ	18~19世紀
191	D-2	SK-2	I銭貨	径2.5、孔径0.6、厚さ0.1、重量0.9g							寛永通寶	
192	D-3	SK-12	H鍋				—	やや密	良好	淡褐色	内面ナデ、外面口縁ヨコナデ・体部ナデ・被熱のため赤化	内湾形口縁
193	A-2	5層	P碗	14.0	4.3	6.6	55	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ・口縁部に自然釉、底部回転ヘラ切り、墨書有(判読不能)	松井Ⅲ-3期
194	A-2	5層	P碗	14.0	(4.1)	7.0	70	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ・口縁部に自然釉、底部回転ヘラ切り後ナデ	松井Ⅲ-3期
195	A-2	5層	P碗		(2.8)	7.6	20	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り	松井Ⅲ-2・3期
196	A-2	5層	P片口鉢 (知多)	16.2	(5.2)		20	密	良好	淡青灰色	内外面ロクロナデ	中野4型式期か
197	A-2	5層	P小皿	8.2	2.1	4.4	100	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り	松井Ⅲ-2期
198	A-2	5層	P小皿	8.4	2.0	5.0	75	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り、口縁端部に沈線	松井Ⅲ-2期
199	A-2	5層	P小皿	8.4	(1.9)	4.6	40	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部切り放し後ナデ、口縁部に自然釉	松井Ⅲ-2期
200	A-2	5層	P小皿	9.5	2.0	4.5	70	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り	松井Ⅲ-2期
201	B-1	5層	P四耳壺	10.6	(3.7)		5	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、外面は灰釉ハケ塗り	松井Ⅰ期併行?
202	A-2	5層	P甕		(7.3)		—	密	良好	暗灰色	内面板ナデ、外面板ナデ・ナデ・指オサエ	
203	A-2	5層	Z蓮弁文碗				—	緻密	良好	青灰色	内外面青磁釉、外面に鎬蓮弁文	龍泉系Ⅰ-5b
204	A-2	5層	Z蓮弁文碗		(2.0)		—	緻密	良好	青灰色	内外面青磁釉、外面に鎬蓮弁文	龍泉系Ⅰ-5b
205	B-1	5層	Z口禿皿	11.0	(2.6)		—	緻密	良好	乳白色	内外面に釉・口縁端部は釉を剥ぐ	白磁Ⅸ類
206	A-2	5層	D土錘	長さ(5.1)、最大径1.35、孔径0.4				密	良好	淡橙褐色	外面ナデ・指オサエ	
207	A-2	5層	I銭貨	径3.0、孔径0.65、厚さ0.15、重量2.9g							開元通寶：唐・武徳4(621)年	
208	A-2	5層	I銭貨	径2.8、孔径0.7、厚さ0.15、重量2.8g							天聖元寶：北宋・天聖元(1023)年	

※法量の数値はcm、()は残存数値。底径には脚部径・高台径を含む。

J-縄文土器、H-土師器、S-須恵器、P-中世陶器、T-陶器(古瀬戸以降)、Z-磁器、I-金属製品、R-石器・石製品、D-土製品、X-その他

遺物 番号	地区名	遺構名	器種・分類	法 量			残存度%	胎 土	焼 成	色 調	調 整	備 考
				口 径	器 高	底 径						
209	A-25層		I 錢貨	径2.5、孔径0.7、厚さ0.1、重量2.6g						元□通寶		
210		表土	P 碗(知多)	15.0	4.8	6.2	40	密	良好	淡灰色	内外面ナデ、底部回転糸切り	中野5型式期
211		表土	P 小皿	8.0	1.5		20	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ	松井Ⅲ-2期
212		表土	P 小皿		(2.7)		—	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、口縁端部外面に沈線	松井Ⅲ-1・2期
213		表土	P 片口鉢(知多)		(5.3)	13.0	20	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ、外面底部付近静止ヘラケズリ、底部回転糸切り	中野4・5型式期
214		表土	T 摺鉢				—	密	良好	淡褐色	内外面ロクロナデ・鉄釉	大窯第2段階
215		表土	T 摺鉢	29.0	(6.2)		30	密	良好	淡褐色	内外面ロクロナデ・鉄釉	藤澤登窯6期
216		表土	H 鍋		(6.8)		—	密	良好	淡茶褐色	内面口縁ヨコナデ・体部ナデ、外面ナデ・スス、頸部に沈線	内湾形口縁
217		表土	H 鍋		(5.2)		—	やや密	良好	淡褐色	内面ナデ、外面ナデ・指オサエ・スス	半球形
218		表土	D 土鍾	長さ(4.1)、最大径1.2、孔径0.4			—	密	良好	淡橙色	外面ナデ	
219		表土	D 土鍾	長さ(3.5)、最大径0.7、孔径0.3			—	密	良好	淡橙褐色	外面ナデ・指オサエ	
220		表土	I 錢貨	径2.5、孔径0.5、厚さ0.1、重量2.3g							咸平元寶：北宋・咸平元(998)年	
221		表土	I 錢貨	径2.55、孔径0.6、厚さ0.1、重量2.0g							寛永通寶	

※法量の数値はcm、()は残存数値。底径には脚部径・高台径を含む。

J-縄文土器、H-土師器、S-須恵器、P-中世陶器、T-陶器(古瀬戸以降)、Z-磁器、I-金属製品、R-石器・石製品、D-土製品、X-その他

第5章 まとめ

1. 遺構の変遷 (第42・43図)

今回の調査では、縄文時代晩期(?)～江戸時代の遺構が検出された。遺構は掘立柱建物を中心に、柵(塀)、溝、土壇などがあり、同一面(地山面)上に時期を問わず混在していた。これら遺構の切り合い状況、出土遺物、及び掘立柱建物については主軸方位などを検討し、大きく8時期の遺構変遷を想定した。以下にその概要を示す。

なお、掘立柱建物の所属時期については、近似した主軸方位を持つ建物群を同一時期と想定し、更に出土遺物からその時期を推定している。建物群の抽出については、分別が困難な場合主観が混入した可能性は否定できないが、遺構変遷案としてあえて提示する。

また第42図については、検出時の形態(=最終形態)で遺構を表現している。

I 期 (奈良時代以前)

奈良時代以前をまとめてI期とした。遺構には、A-1区SK-11、B-1区SK-78、C-1区SK-43、C-2区SK-9、C-2区SK-51などがある。A-1区SK-11は性格不明の土壇である。条痕文土器片のみが出土しており、縄文時代晩期の遺構と推定される。調査区の南西側には同時期の王ヶ崎貝塚が所在しており、貝塚自体は確認できなかったが、遺構はその一部と考えられる。B-1区SK-78は古墳時代の遺構で、須恵器片が出土した。C-1区SK-43、C-2区SK-9、C-2区SK-51は古墳時代、あるいは古墳～奈良時代の遺構で、土師器の甕の体部片しか出土していないため詳細な時期比定が困難である。いずれの埋土にも焼土・炭が含まれている。調査区内におけるこの時期の遺構は乏しいが、全域から須恵器片、製塩土器脚部などが出土しており、当時の遺構は削平などにより多くが滅失したと考えられる。なお古墳時代の遺構・遺物については、調査区の南に所在する6世紀後葉の首長墳である磯辺王塚古墳との関係を考慮する必要があるだろう。

II 期 (時期不明、13世紀前葉以前?)

掘立柱建物、柵(塀)のうち、主軸方位がN-37~43°-Wの一群があり、これらをII期の建物群と想定した。出土遺物はほとんど無く所属時期は不明だが、主軸がIII期以降の建物とは著しく異なるため13世紀前葉以前と想定した。遺構にはSB-8・32、SA-6・7などがある。SB-8は2間×3間(面積27.6㎡)の主屋と考えられる建物で、南東に小建物が付随する。SA-6・7は調査区内部を北東側と南西側とに区分しており、ここで屋敷地が分けられたと考える。ただしII期の遺構が12~13世紀に属すると想定した場合、SD-5も同時に存在したことになる、屋敷境はさらに北東側ということになる。

Ⅲ期（13世紀中～後葉）

遺構には、SB-3・4・9・11・14・16・33、SA-1・2・10、SD-5、B-3区SK-30、D-2区SK-1などがある。掘立柱建物は主軸方位がN-35~42°-Eの一群である。この主軸はSD-5のそれに近く、両者はある時期共存していたと考える。建物には建物同士で、あるいはSD-5と重複するものが認められ、最低2小期の時期分割が可能である。いずれの建物も調査区北東側の緩斜面にあり、標高2.75~3.00mと高く、平坦な南西側には遺構は乏しい。あるいはこの部分に畑などの耕作地、あるいは広場的な作業場が存在したのであろうか。主屋は特定できないが、SB-4にその可能性がある。またSB-9は方形の土壌を伴う小建物で、作業小屋的なものと推定される。12世紀後葉から存続したSD-5はこの時期に廃絶する。遺構の性格は検出部分が少ないため不明瞭だが、通例から屋敷地を区画する溝と考えた場合、この時期に屋敷地が統合されたと言い換えることができる。また、大型廃棄土壌のB-3区SK-30はこの時期に設けられた。土層の状況から西側部分は後の掘削で、当初は方形を呈していたと思われる。

Ⅳ期（13世紀後葉）

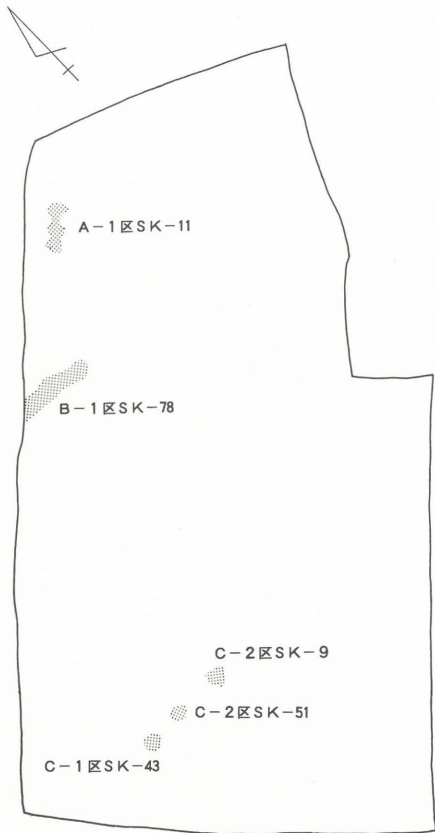
遺構には、SB-7・10・15・18・19・22・29・31、SA-11、B-3区SK-30などがある。調査区内を分ける溝・柵のような遺構は確認されず、調査区内は同一敷地内に相当するようである。掘立柱建物は主軸方位がN-28~33°-Eの一群である。主屋と考えられ、南北二面に庇を持つSB-7、長屋状建物のSB-15などⅢ期に比べ大型で多様な建物構成が見られる。調査区を横断する溝や塀が見られないことから、調査区内は同一敷地内に相当するようであり、Ⅲ期と同様に建物は北東側の緩斜面に集中する傾向がある。建物には重複するものがあり、最低2小期の区分が可能である。

Ⅴ期（14世紀前葉）

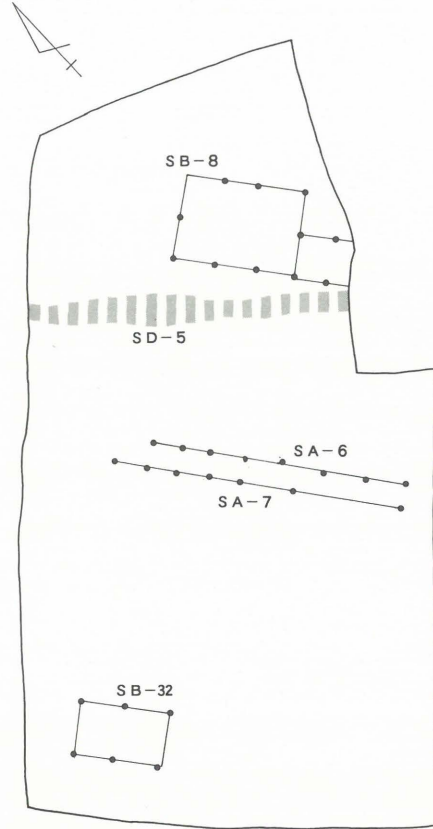
遺構には、SB-1・2・20・25・26、SA-3・8、B-3区SK-30などがある。調査区内を分ける溝・柵のような遺構は確認されず、調査区内は同一敷地内に相当するようである。掘立柱建物は主軸方位がN-1~9°-Eの一群である。SB-2は主屋と考えられる10×5間の大型建物（面積68.4㎡）であり、2カ所の間仕切りと南側に庇を持つ。SB-26はこれに直交する形で配されており、古代～中世初頭の集落に認められる官衙的な建物配置を想起させる。SA-3はSB-2に、SA-8はSB-26に伴う目隠し塀と考えられる。建物はこの時期にも北東側の緩斜面に集中する傾向がある。なお、建物には重複するものがあり、最低2小期の区分が可能である。B-3区SK-30はこの時期に廃絶するようである。廃棄物は貝殻、及び有機物が主体であり、陶磁器はあまり多くない。

Ⅵ期（14世紀前葉以降）

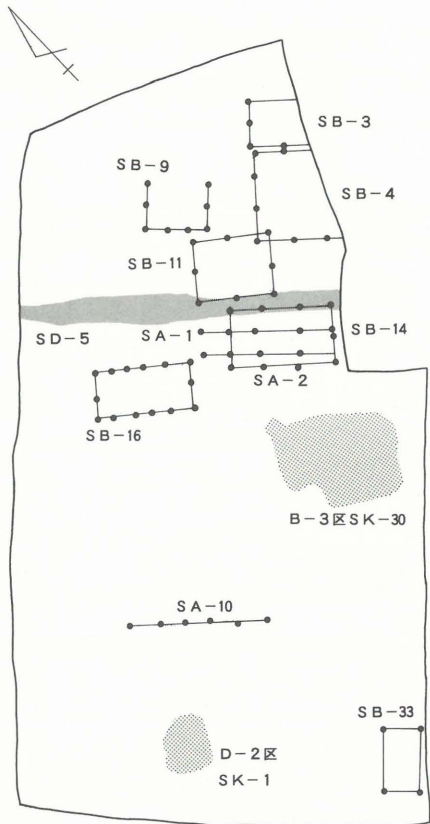
遺構には、SB-21・24・27などがあり、主軸方位はN-20~25°-Eの一群である。SB-21は東側の柱列が検出されず、建物ではないかもしれない。柱穴からは13世紀中葉を中心とする遺物が出土しているが、B-3区SK-30と重複しており、その廃絶後の建物と推定される。遺構は全体に散漫であり、遺物の出土状況についても同様である。これ以後16世紀にかけては、古瀬戸後期、および



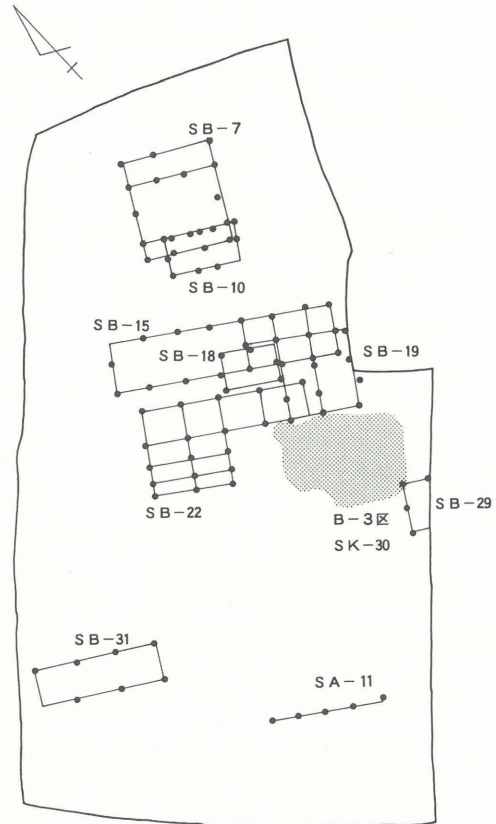
I 期



II 期



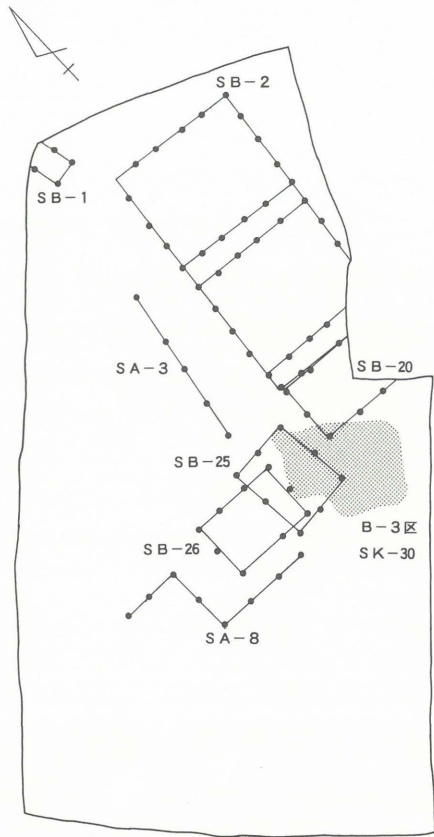
III 期



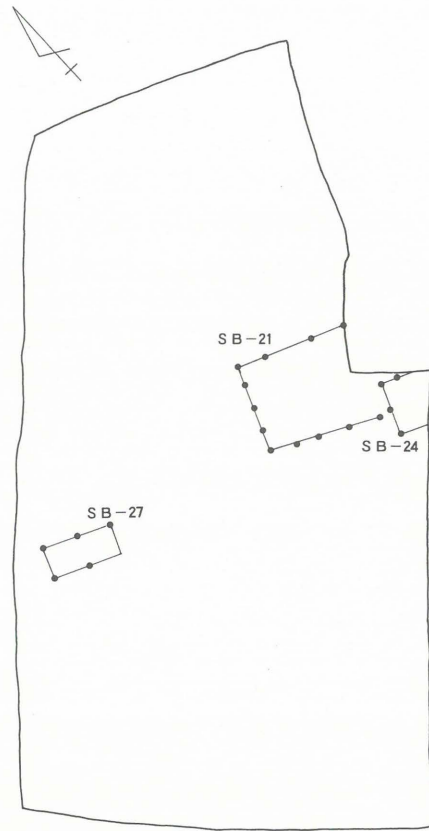
IV 期



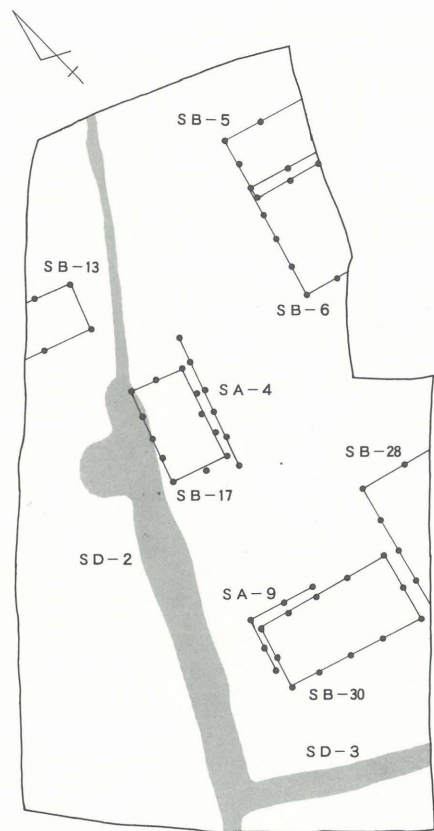
第42図 遺構変遷図-1 (1/400)



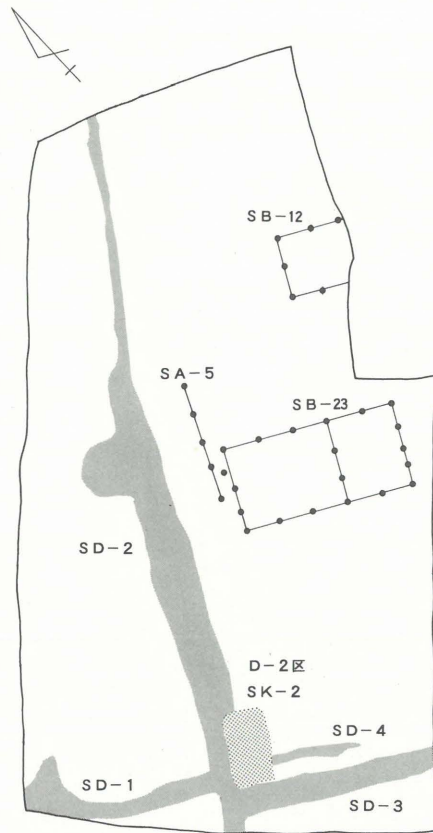
V 期



VI 期



VII 期



VIII 期



第43図 遺構変遷図-2 (1/400)

瀬戸美濃大窯の遺物が若干見られるのみである。

Ⅶ期（16世紀後葉～17世紀後葉）

遺構にはSB-5・6・13・17・28・30、SA-4・9などがあり、またSD-2・3も存在した可能性がある。掘立柱建物は主軸方位がN-13～18°-Eの一群である。建物は調査区全域に所在し、比較的規模の大きなものが揃うことから調査区は数カ所の屋敷地からなるのかもしれない。SA-4はSB-17に、SA-9はSB-30にそれぞれ伴うものである。出土遺物はSB-30から出土した16世紀後葉の天目茶碗片のみであるため、所属時期は曖昧であり、Ⅷ期の建物の所属時期から上記の時期を推定した。SD-2は出土遺物から17世紀後葉に掘削されたと考えられるが、実際にこれらの建物に伴ったかどうかは不明である。

Ⅷ期（18世紀前葉以降）

遺構にはSB-12・23、SD-1・2・3・4、D-2区SK-2などがある。掘立柱建物は主軸方位がN-25～27°-Eの一群である。SB-23は間仕切り1カ所を持ち、土間と座敷に区分された通例の主屋と考えられる。この場合SB-12は倉庫、作業場などの付随的な建物であろう。調査区は溝によって4カ所の屋敷地に区分されている。D-2区SK-2は水溜と考えられ、溝の廃絶後に設けられた新しい遺構である。

以上から、調査区の遺構変遷を次のようにまとめることができる。

奈良時代以前から調査区付近では人々の生活・生業が営まれていた。中世の屋敷地は12世紀後葉の可能性を持ちつつも、13世紀中～後葉には明らかに存在する。この時期から14世紀前葉にかけては屋敷地の最盛期と考えられ、約100年間に6回以上建物の建て替えが行われた（水害など災害による影響を考慮する必要もあるが）。所有者の社会的地位を反映して各時期で様々な規模・性格の建物が建てられており、規模は徐々に大型化していくようである。これらはいずれも調査区北東側の標高の低い緩斜面に集中している。また建物の主軸は西へ西へと振れていく傾向にある。主軸については当時の磁北（N-10～12°-E）、および近在で確認された条里遺構の方向（＝地割線・N-22°-W）いずれにも合致せず（注1）、その折々の諸条件（気象条件、地理的条件など）を考慮して適宜設定されたと考えられる。14世紀後半～16世紀は調査区内の遺構・遺物とも乏しく、王郷遺跡の規模は縮小したと考えられるが、17（16）世紀以降は調査区周辺が近世集落として再開発され、溝で囲まれた方形の屋敷地が広く存在したようである。そしてこれが現存集落の基盤になったと考えられる。

注1 当時の磁北については下記広岡文献を、また条理の方向については下記歌川文献を参照した。

広岡公夫 「考古学地磁気および第四期古地磁気研究の最近の動向」

『第四期研究 vol.15』 1977

歌川 学 「三河の国の条里制」『伊勢湾岸地域の古代条里制』 弥永貞三・谷岡武雄編

東京堂出版 1979

2. 出土遺物について (第44図・第9表)

今回の調査では、縄文時代～近世にかけての出土遺物があった。その内13世紀中葉～14世紀前葉のものが最も多く、全遺物量の約1/2を占める。以下では鎌倉時代の遺物についてまとめを行う。

最も普遍的に見られたのは中世陶器(山茶碗)の碗、皿である。これらは渥美・湖西窯の製品で、松井編年のⅢ-2・3期の製品が圧倒的に多い。Ⅲ-1期以前の遺物を主体とする明確な遺構はSD-6のみである。13世紀以降には渥美窯の衰退と共に東三河地域において尾張型と呼ばれる製品が一定量流通するといわれ、豊橋市吉田城址、公文遺跡、橋良遺跡、豊川市郷中遺跡、宝飯郡一宮町城下遺跡などまとまって中世陶器が出土した遺跡では尾張型が確認されている(吉田城址、橋良遺跡では東濃型も出土している)。今回の調査区でも尾張型、ことに碗・小皿については知多窯産の製品がいくつか見られたが、その占有率は必ずしも高いとは言えないようである(第9表・注1、以下遺物構成に関する記述についてはすべて同じ)。

なお、調査区で出土した碗・小皿の中にはススのつくものが数点認められた。その付き方はA、内面全体にべったりと付着する(130など:数字は遺物実測図番号)、B、口縁端部のみに付く(90)、C、灯芯の痕跡として付く(187)、D、内面底部付近につく(65)形に分けられる。この内Bは灯芯が口縁端部のみに触れていたため付いたと考えられることからC同様灯火具であったと考える。またAとDについても内面にススが付くという意味では似た性格と考えるが、その性格は計りにくい。しかしAに属する130とBに属する90はいずれも口縁の一部が意図的に打ち欠かれていることから、同様に灯火具と考えられる。付き方の違いは燃料や構造などの違いに起因するのだろうか(注2)。

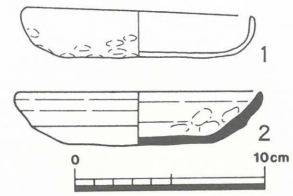
その他の器種では片口鉢、甕が少量出土している。胎土観察によれば、甕はすべて渥美・湖西窯産、片口鉢は凶化した4点がいずれも知多窯産である。後藤建一氏によれば、渥美・湖西窯において甕・片口鉢ともⅢ期第1小期(松井編年のⅢ-1期にほぼ対応、以下同)まで生産が行われており、Ⅲ期第2・3小期には生産器種が碗・小皿のみに集約されるという。貯蔵具としての甕と日常食器としての片口鉢との使用期間の違いを考慮すれば、調査区での状況は後藤氏の説を補強するものといえよう。

施釉陶器では渥美窯産の灰釉四耳壺を除けば、中世の製品はいずれも古瀬戸で占められる。数は少ないが、宗教用具の仏供(無釉)が出土している。

輸入磁器は青磁碗と白磁皿が出土している。いずれも小破片ばかりで点数も少なく、当調査区では主要器種とは言えない。一般に言われる輸入磁器の出土量が所有者の階級制を表すという考えに従えば、当調査区の屋敷地はごく一般的なものであったと言えそうである。青磁碗は横田・森田分類の龍泉窯系Ⅰ-5b類、および同Ⅲ類に比定される鎬蓮弁文碗、白磁皿は横田・森田分類のⅥ類に比定されるいわゆる口禿皿である。これらは太宰府における出土状況によれば13世紀中葉～14世紀中葉に主体的にみられるものであり、中世陶器との間に時期的な矛盾は見られない。

土師器は鍋、皿が主に出土している。鍋は伊勢型鍋が主体で、伊藤編年の第1段階に比定されるものが大半である。口縁付近に鏝が巡るいわゆる「羽釜型」の鍋は112のような小破片が見られるに過ぎない。皿は乏しく、中世陶器の小皿が主体であった(調査区内に限る)ことを物語るが、逆にその

ような状況下であえて土師器の皿を使用した要因を考える必要があるだろう。調査区で出土した13～14世紀と考えられる皿には、A. 口縁部が強く内湾し、器壁は薄く外面未調整のため指頭圧痕が明瞭に残るもの（14）、B. ロクロ整形によるもの（77・180）の2者が見られる。Aは三重県の中・南勢地域において普遍的に見られるタイプと同型で、新田分類のA2に相当する。東三河地域における類例の報告は少ないが、橋良御厨に比定される豊橋市橋良遺跡の竪穴状遺構SK-09で確認されている（第44図1）。胎土などを考慮して伊勢から搬入されたものと考えられるが、伊勢型鍋同様商品として流通していたかどうかは不明である。一方、2は前代において主体的であったロクロ整形皿を受け継ぐものと考えられる。中でも180は豊川市郷中遺跡の大溝SD06中層、及び豊川市雨谷遺跡のSD06南側肩部土器集中区から松井編年Ⅲ期中の中世陶器碗と共伴して出土したロクロ整形土師器皿（第44図2：郷中例）に近似しており、在地産と推定される。



第44図 土師器皿
実測図（1/4）

土鍾は細形のものが多く認められた。いずれも軽量で、表面は淡灰色を呈し、還元気味に焼成されている。軽量な土鍾の使用は、波のおだやかな内湾部での小規模な網漁を想像させる。

遺物構成（第9表）は注1に記したように不確実なものだが、13～14世紀における傾向として以下の事が指摘できると考える。

- ・中世陶器が主体で、碗が最も多く、小皿がこれに続く。碗：皿の比率は約2：1である。
- ・土師器の鍋（特に伊勢型鍋）は比較的多く、中世陶器の碗・皿に次ぐ主要器種といえる。
- ・土師器の皿が非常に少ない。これは中世陶器の小皿の流通量に起因すると考えるが、一方で豊川市雨谷遺跡のSD06南側肩部土器集中区（松井Ⅲ期中の中世陶器を共伴）など土師器皿の大量廃棄が認められる例があり、皿の使用が衰退する訳では無く、遺跡・遺構の性格にもよると考える。
- ・施釉陶器（古瀬戸）、輸入磁器は従属的存在である。いずれも特殊品であり、生活上無くてはならないものではない。言い替えれば、これらを多く所有するのは経済的に余裕を持つもの、すなわち優れた財力を持つ階級者である。

第9表 出土遺物構成表（13世紀中葉～14世紀前葉）

種類	中世陶器（山茶碗）						施釉陶器		輸入磁器		土師器			合計	
	碗		小皿		片口鉢	壺	甕	折縁深皿	仏供	青磁碗	白磁皿	伊勢鍋	羽釜		皿
産地	渥美	知多	渥美	知多	知多	知多	渥美	瀬戸	瀬戸	北宋	北宋	南伊勢	—	—	—
点数	50	3	23	1	4	1	6	2	1	7	2	12	2	3	117
構成率%	42.7	2.6	19.7	0.9	3.4	0.9	5.1	1.7	0.9	6.0	1.7	10.3	1.7	2.6	100.2
	45.3		20.5		3.4	0.9	5.1	1.7	0.9	6.0	1.7	10.3	1.7	2.6	100.1
	75.2						2.6		7.7		14.5			100.0	

※産地における渥美は渥美・湖西窯産の製品を示す。点数は実測回数。

注1 出土遺物のうち、松井編年Ⅲ期中の中世陶器（山茶碗）、およびそれと同時期の遺物（土鍾、陶丸などの特殊遺物は除く）について、遺物構成のおよその傾向を探るため構成表を作成した（第9表）。ただしこれは図化した遺物のみを対象とし、それぞれを1点と計測するため分析は

厳密性を欠いており、通例行われる口縁部・底部計測法により最小個体数を割り出し、その点数から組成を採る方法などとは同列には扱えない。実際に輸入磁器については他に比較して実測採用基準が甘く、組成率を高くしている。しかし他の遺物についてはランダムに選別しているため、当調査区内での傾向を把握する程度には有効と考えた。

注2 幕末から明治初年の愛知県渥美半島における風俗を描いた「三州奥郡風俗図絵」によれば、当時の民間の主要な灯火具の一つとして、「じん松」というものが見られる。これは石製の鉢・臼の中で松の根（じん）を燃やして明かりをとるものであり、時期的な違いはあるものの調査区出土例の用途を推定する上では有効なものとする。

参考文献

- 伊藤裕偉 「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history vol.1』
三重歴史文化研究会 1990
- 川井啓介 「三河地域出土の土師器皿について」『年報 平成4年』
(財)愛知県埋蔵文化財センター 1993
- 後藤建一 「渥美・湖西中世古窯址群」『マージナル No.7』 愛知考古学談話会 1987
- 新田 洋 「中・南伊勢における中世土師器」『マージナル No.9』 愛知考古学談話会 1988
- 藤澤良祐 「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要 第3輯』 三重県埋蔵文化財センター 1994
- 松井一明 「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究 No.25』 静岡県考古学会
1993
- 横田賢次郎・森田勉 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について一型式分類と編年を中心として一」
『九州歴史資料館研究紀要4』 九州歴史資料館 1978
- (財)愛知県埋蔵文化財センター 『吉田城遺跡(Ⅱ)』 1995
- 一宮町教育委員会 『城山』 1995
- 豊川市教育委員会 『郷中・雨谷』 1989
- 豊橋市教育委員会 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第8集 公文遺跡(Ⅰ)』 1988
- 豊橋市教育委員会 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第9集 公文遺跡(Ⅱ)』 1989
- 豊橋市教育委員会 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第18集 橋良遺跡』 1994
- 豊橋市教育委員会 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第21集 吉田城址(Ⅰ)』 1994

3. 王郷遺跡の位置付け (第45図)

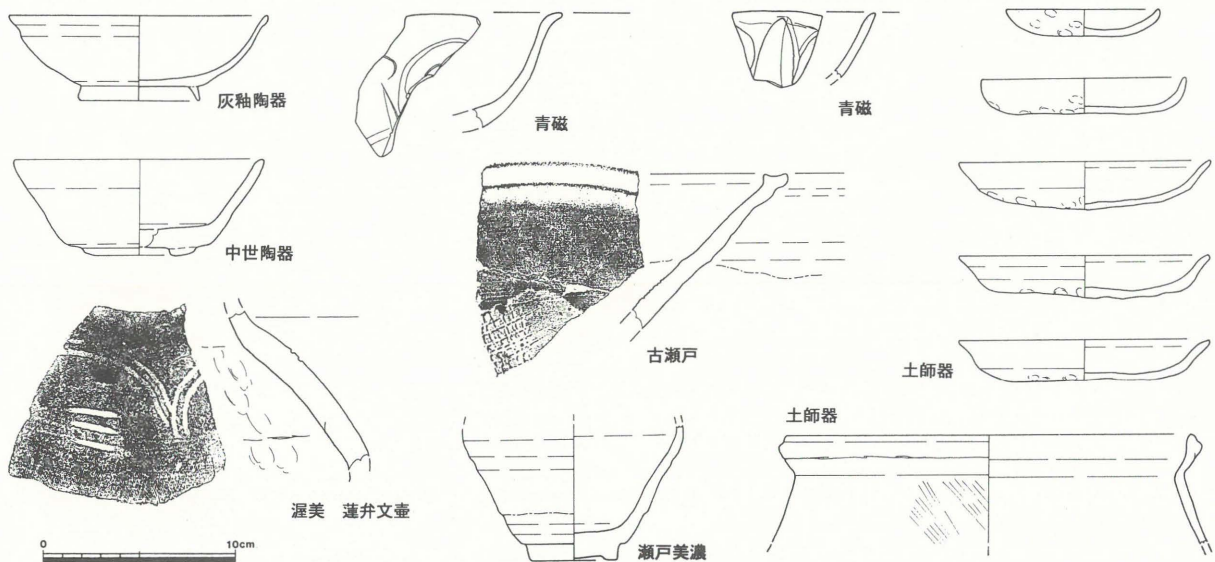
以上、王郷遺跡における発掘調査の報告を行ってきた。最後に東三河地域における中世の状況について概観し、それを踏まえた上で王郷遺跡の位置付けを行いまつとめたい。

王郷遺跡の中心時期は、調査区での状況をみる限り13世紀中葉～14世紀、および16世紀以降と考えられる。一方平成3年に実施された磯辺王塚古墳の調査では、墳丘周辺から王郷遺跡の遺物と考えら

れる多数の中世陶磁器、土師器が出土しており、遺跡の存在時期を推定する上で有効な情報を与えてくれた(第45図)。すなわち今回の調査区では確認されなかった灰釉陶器をはじめ、渥美窯産の蓮弁文壺や刻文壺、15~16世紀前葉のものと考えられる大量の土師器皿(墳丘上から掘削された大型土壌に一括廃棄されていた)などが見られ、遺跡自体は長期に渡り継続的に存在していたと推定される。従って今回の調査区は恐らく遺跡の縁辺部に相当し、遺構が乏しい14世紀中葉~15世紀は人々の生活・生業域がここまで及ばなかったと思われる。

ここで鎌倉時代の東三河地域の状況を概観してみたい。当時の支配状況については、鎌倉時代の三河国守護職は当初安達氏で、鎌倉に居住しつつも東三河地域と深い関係を持っていたといわれる。しかし13世紀中葉以降足利氏が守護となると、岡崎の矢作宿に守護所を設けており、三河国における政治中枢は東三河から西三河に移動している。東三河地域における在地の直接支配状況については、文献が乏しいため不明瞭であるが、13世紀後葉には幕府の有力御家人安達泰盛が豊橋市東南部付近の地頭職を務めていたことが、豊橋市東観音寺所蔵の懸仏銘文から知られている。一方東三河地域には当時すでに荘園制が確立しており、多数の荘園が存在していた。これらの内渥美半島、及び豊橋市など海浜部を中心とした地域には伊勢神宮領である神戸、御園、御厨が多数存在し、神宮との間に海上を介した密接な交流が行われていた(注1)。次に当時の交通状況について述べると、京都と鎌倉を結ぶべく設けられた鎌倉街道は、東三河地域においては紀行文により3種のコースが存在したと推定されている。この内13世紀中葉~後葉には渡津→豊川渡河→高師山のコースが存在していたようである。また今橋、牟呂、前芝など東三河地域における物資輸送の拠点の港湾が豊川、柳生川などの河川河口部に存在し、商品輸送のみならず、人々の往来にも利用されたと考えられる。

さて、ここで王郷遺跡付近の状況について述べてみたい。周辺には橋良御厨、秦御園などの神宮領が存在していたが、いずれも規模は小さく王郷遺跡がその内に含まれるものとは考えられない。また、牟呂は柳生川を挟んで王郷遺跡と対する位置にあたり、河口を渡れば砂堤を利用しての往来が可能である。実際に現在調査区の南側を通り砂堤上を抜けて牟呂に通ずる道は、江戸時代には既に存在していたことが絵図などから知られ(注2)、中世にも道が存在したとは断言できないが、王郷遺跡付近と牟呂が河口部を挟んで強いつながりがあったことは容易に推定できる。牟呂も王郷遺跡付近と同じ



第45図 平成3年磯辺王塚古墳発掘調査出土遺物(1/4)

くいずれの荘園・公領に属すかは記録が無く不明である（あるいは荘園には属さなかったと考えられる）が、近年の発掘調査で牟呂地区全域から中世全般の遺構が多数確認され、有力者の居館や比較的規模の大きな集落の存在が判明しており、当時の海浜部における集落拠点でもあった。また当時の鎌倉街道の豊川渡河地点である渡津は豊川河口部を挟んだ牟呂の対岸でもあり、牟呂への上陸者も多数存在したのではないかと考える。

王郷遺跡、牟呂の遺跡とも水田耕作地に恵まれておらず、また貝殻廃棄や土錘の出土が顕著に認められるなど、海浜集落としての性格が強い。牟呂は柳生川河口部を遅くとも中世以降港として利用していたと思われるが、この付近は砂堤を天然の防波堤にした、安定した水域であったといえる。王郷遺跡も海浜集落として牟呂と深い関係を持ちつつ、渥美湾、あるいは柳生川河口部（砂堤の内側）に舟を出し、漁撈活動や舟運などに人々が従事していた状況が推測される。調査区においては13世紀中葉～14世紀前葉に盛期が認められ、ことに14世紀前葉には大型建物が存在し注目されるが、この調査区内における歴史の変遷が牟呂の遺跡の状況といかなる関係を持つかは、今後の検討課題である。

調査区で確認された遺構は、通常の集落遺構と何ら変わりの無いものであった。当時の海浜集落の形態を考える上で示唆的であるが、一方標高3 m以下という低地に定住していた状況は、鎌倉時代が平安海進後の寒冷期で水位が若干低かったことや、また海岸線までの距離を考慮したとしても、現代のような防災施設を持たない当時では高潮などによる頻繁な水害を被ったと推定される。このような状況下でもこの地に固執した背景には、河川河口部が交通、及び物資の流通拠点であったという性格が反映しているのではないだろうか。

注1 例えば貢納物の輸送、それに関連する神人の往来などである。

注2 例えば、「吉田御領分絵図（文政年間・個人蔵他）」に記載が見られる。この図によれば、牟呂―松島（砂堤上）―草間（王郷遺跡南方）に通じ、さらに海岸線に沿って南下する道が描かれている。ただし、図では道が太線と細線とで描き分けられており、上記の道は細線で表現される事から、当時の主要道とは言えないようである。

参考文献

- 豊橋市史編集委員会 『豊橋市史 第1巻』 1973
豊橋市史編集委員会 『豊橋市史 第2巻』 1975
白井梅里 『牟呂吉田村誌』 1933
新行紀一 「三河国」『講座日本荘園史5』 吉川弘文館 1990
棉貫友子 「尾張・三河と中世海運」『知多半島の歴史と現在 No.5』
日本福祉大学知多半島総合研究所 1993

報告書抄録

ふりがな	おうごういせき							
書名	王郷遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	豊橋市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第28集							
編著者名	岩原 剛							
編集機関	豊橋市教育委員会・豊橋遺跡調査会							
所在地	〒440 愛知県豊橋市向山大池町20-1 (豊橋市民文化会館内) TEL 0532-61-5111							
発行年	西暦1996年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おうごう 王郷	とよはしこはまちよう 豊橋市小浜町 27・28・29・ 30	23201	79869	34° 43' 10"	137° 22' 5"	19950201～ 19950329	956	ガソリン スタンド 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
王郷	集落	鎌倉時代 江戸時代	掘立柱建物 33 柵(塀) 11 溝 5 土壌等	条痕文土器、石斧、 須恵器、土師器、中 世陶器、輸入磁器、 近世陶磁器、土錘、 砥石、銭貨等		13世紀中葉～14世紀 前葉、及び江戸時代 を中心とする海浜集 落で、標高2.5～3 m の低地から掘立柱建 物多数が検出され た。		